

抜けるような空の蒼さは目に痛い。覆い隠す物も無しにまっさらな生まれたままの無邪気で無垢で汚れを知らない、無性に踏み躪りたくなる衝動を掻き立てる純潔さに溢れていて。信じ続けていれば夢は叶うだなんてそんなことは嘘だった。信じ込ませた大人はだれなんだ。叶った物なんてどこにもない存在なんてしていない。祈る先に何も見えず光りなんてとうにどこかへ消えてしまった。僕は一体これから先、だれに愛の言葉を吐けばいい？

L OVELOVELOVELOVE 大嫌い

「もつと甘いモノかと思つてたの。だつて想像しかできなかったから。夢見ていたわけではないけど、それでもちよつと考えるぐらひは自由でしょう？ もつと甘くて、砂糖菓子みたいなものかと思つてた。……恋人つて何なのかしらね」

あんたの吐息が一番甘いよと、言いかけて止めた。どんな言葉も声にはならなかった。してはいけないような、それはまるで神聖な儀式のような静寂さを纏つていたから。

声に出せば形にすれば、それは跡形も無く消え失せてしまひさうだった。飽和して、後は自然の摂理に従つて溶けてなくなるだけ。闇が怖かった。そこには何も存在してはいなかった。してはいけなかつたかのように。

「……そんなこと、今は考えなくていいから」

僕のことだけ見ててよと言うと、あんたは全く勝手なんだから、子供みたいと笑われた。どんなことにでも、反応を返してくれたことが嬉しかった。今この時この時間この言葉で仕草で身体で、彼女に与えているのは自分だけだと思えるその幸福に酔ひ痴れた。「莫迦だつて、だれに言われたつていいんだ」

意味の無いものは切り捨てた。

「どうしてよ。何でもまたそんなこと言うの。わたしが言つたらどうするの？」

「あんたの言葉なら」

そんなのは全部受け止めるから。

「――愛してよ」

髪の毛一本だつて、それが貴方の息に染まれば世界は変わる。

ねえ、愛して。世界ごと包み込んで。

夜、は。

鼓動と共に眠りについた。

【 1 】

リズミカルに聞こえてくる包丁の音で、すでに目は覚めていた。暖かな温もりのある寢床は心地良くて、あと少しすれば起こされるとわかっていながらも、抜け出る気にはなれなかった。……否、起こされるのを待っていた。

こんなに気持ちよく迎えらるる朝があるなんて知らなかった。そういえば昨日もそのまた昨日も、これと同じことを思ったような気がしたけれど、そんなのはもう昔の話だ。きつと今朝ほど幸せな朝は無い。明日もそう思うのだろうけれど。

のぼつて来るブーツの音。開く扉。かけられる言葉だつて、もう覚えてしまった。一日の始まりの声。

「さあ、ハウル。朝よ！ いい加減起きてちょうだい」

ぱつと毛布がめくれられる。暖めていた空気はとたんに逃げ、身体が一気に冷えた。それでも浮かぶ笑顔。

「やあ、ソフィー。おはよう」

「……あんた、起きてたんなら、一人で降りて来なさいよ！」

おはようと笑顔を返してもらいたかったのに、現実はこちら。心の中で顔を歪めて、表面上は寂しそうな、哀れめいた顔を装った。

「——朝一で愛する奥さんに怒られるだなんて。僕は何て可哀相な旦那なんだ。「おはよう」の一言すら言ってもらえないだなんて！」

「くだらないことで騒がないで。朝はお店の準備もあつて忙しいのに、あんたが子供みたいな真似するからでしょう？」

「なにさ、奥さんに起こしてもらつて、そのまま一番に「おはよう」を言ってもらいたいわ、それが子供なの？ 僕達新婚じゃないか。このぐらいのスキンシップ、あつて然るべきものだよ」

自分は当然の権利を主張しただけだというのに、ソフィーは肩をすくめた。言葉だけは聞いているものの、納得している様子は一欠けから見られなかった。わかつてはいたものの少し寂しい。

「バカみたいなこと言つてないで、さっさと起きて。今日は王室に行く日でしょう？ 遅刻なんてしたら、王室付き魔法使いの名が泣くわよ」

「好きで泣けばいいんだ。好きでなつたわけでもないんだからさ」

己の役職について不満のあるハウルは、いつものように悪態をついた。けれどその頃にはソフィーはもう踵を返してしまつていて、ボタンと静かに扉は閉められた。扉の閉められる瞬間はどこか閉鎖的で、まるで世界から切り取られたような気がするなんて事を思いながら、ハウルはやつと身を起こした。彼の奥さんは全てにおいて真面目で、それはそのまま時間厳守へと繋がつていた。これ以上のろろすれば朝食は間違いなくカルシファアに食われるな、と心の中で呟いてから、キレイに畳まれていた、暖かな太陽の香りのする衣服に手をかけた。

ソフィーはすぐに怒るけれど、その一方で機嫌が元に戻るのも早かった。ハウルが一階に姿を現すと、テーブルの上には今日も美味しそうな食事が並べられ、ソフィーは笑顔で最後のスープをよそつていた。さっきまで眉を寄せていたのにと思うと笑みがこぼれた。ソフィーがそれを聞けば、「だっていつものことじゃない」と言うのはわかりきつていた。

「あ、おはようございます、ハウルさん」

「おはよう、マイケル。今日僕は王室に出かけるから。課題を出しておくから、それをやつておくようにね」

席に座りながらそう言えば、「人にばっか言つてないで、あんたも自分の仕事ちゃんとやりなさいよね」と横から言葉が飛んできた。心外だなあとハウルは微笑む。

「まるで僕が日頃仕事をさぼってばかりいるような言い方だね、奥さん？」

「あら、身に覚えがないとは言わさないわよ。先日 of 会議、直前に姿を消してそれっきりだったんですって？」

一見すると、それは新妻の可愛らしい笑顔なのだが、その目は決して微笑んではいなかった。下手な返答をすれば手にしたお玉が飛んでくるなど、今までの経験からわかっている。

「何事も気分転換が必要だと思わない、ソフィー？ とくに職場が王室なんかだと、息がつまって仕方ないんだ！ 王様のつまらない命令に右に左に振り回されてさ。ちよつと新鮮な空気を吸いに行くぐらゐの自由、認めてもらつてもいいと思うんだけどね」

「だからって、王室の会議なのよ。普通そんな真似するかしら！」
お玉は飛んでこなかったが、どんつと勢い良くハウルの前に置かれた皿からは、スーブがわずかに飛び跳ねて机を汚した。結局それを自分で掃除することを、ソフィーはわかっているのだろうか。

どこまでも真面目で、ちよつとしたことでもすぐに怒るいつものソフィーに、ハウルはくすくす笑つた。言つたところで彼が素直に聞くはずもないことなんてわかつているだろうに、それでも懲りずに何回でも何回でも同じことを言つてくるのだから。それも至極真剣に。

今となつては、マイケルも一々慌てるような真似はしない。皆慣れきつてしまつてゐる。新たに始まつたこの日常に。まるで生まれた時からそうして共に日々を過ごしてきたかのように。

適度なからかいを入れながら笑いながら食事を終えて、軽く風

呂に入つてから——本人は軽いつもりでも、それでもしつかりソフィーからは長い！ と注意されていたのだが——それでは行くかと、やつと扉に手をかけた。

「いつてらつしやい。ちゃんと真面目に仕事してらつしやいよ？」
まだ朝の会話を覚えていたのかと、ハウルは小さく笑つた。

「はいはい。あんたつてどこまでも真面目なんだからなあ」
「あんたが不真面目すぎるの！ これでわたしまでが引きずられたら、この家はゴミ溜めになつちゃうでしょ」

べつにそれでも構わないんだけどな、と胸中で呟いて、ハウルはキングズベリーに合わせた扉を開けたまま、くるつとソフィーを振り返つて言つた。にこやかな笑顔で。

「ねえ奥さん。愛する旦那に、行つてらつしやいのキスは？」

返つてきたのは、ソフィー愛用の箒の棒で、軽く腹部を突かれた。これが怒ると威力倍增することは、もうハウルは自分自身で実証済みであつた。

「ひどいなあ。これから僕はがんばつて仕事に行くつてのに」

「そんなのするわけないでしょっ！」

もちろんわかつてゐた。キス自体を期待するよりも、そう言つて顔を赤くして怒る彼女の顔が見たかつた。

「じゃあ、行つてくるよ。ソフィーも今日はレティーと買い物に行くんだらう？ 気をつけて。とくに悪い虫には」

「あんたそればかり。わかつてるわよ。いつてらつしやい」

笑顔に見送られて。今日も一日いい日だらうなんて。

——単純な自分に笑つた。

その知らせが来た時、ハウルは与えられた仕事部屋でつまらない作業をしていた。途中途中で欠伸がまじっては、同僚にして義弟でもあるサリマンに窘められるほど、それは大きな欠伸だった。「だつてさ、サリマン。僕は魔法使いなんだよ？ どうしてこんな紙つぺらなんて眺めてなくちゃならないんだ。それもこんな大量にさ！」

机の上には椅子に腰掛けたハウルの背丈を越すほどの書類が積み上げられ、そして雪崩を起こしていた。それを片付けようともしないハウルに、真面目なサリマンは再三にわたって注意をしていたのだけれど、何度言っても聞こうとはしないハウルに、最近では見て見ぬふりをし自分の仕事だけに専念することにした。とは言うものの、結局のところお人よしなサリマンは、最後の最後でいつもハウルの尻拭いをするはめになっていたのだが。

「君の意見には私も同意したいところではあるけどね。私としても、部屋に閉じこもって書類と睨めっこするよりか、魔法の実験をする方に何倍も魅力を感じるさ」

「ならどう？ 二人で一緒に、王様に退職届でも叩きつけない？」

「……しかしだね、ハウル」

ふざけたハウルの言葉をさらりと流して、サリマンはハウルと視線を合わせずに、書類に判子を押し続ける作業を続行しながら言った。毎日きちんと仕事をこなしているせいで、サリマンはもちろんのことハウルのように机の上で雪崩が起こるようなことは無かったが、それでも毎日山のように仕事は舞い込んでくる。

「王室付きともなれば、このような状況になるのも仕方ないとは思わんのかね？ 考えてもみろ、これが戦争ともなれば、我々は先陣切って駆り出されることはまず間違いないだろう。それを思えば、ここですこして書類の山に埋もれるぐらい、容易いことだ

と思うがね」

もつとも、書類の山に埋もれているのは君ぐらいだろうが、と。

サリマンは同僚を窘めるつもりでそう言ったのだが、それには相手が悪すぎた。そう、素直に言ってくような相手なら、サリマンがここまで苦労するはずもないのである。

「何言つてんのさ。もし戦争なんてことにでもなったら、僕は真つ先に奥さんを連れて逃げ出すね！ 僕は臆病者なんだ、戦争なんかに出て戦えるわけじゃないか」

そんなことを恥ずかしげもなく、いつそ誇らしげに言ってしまう辺りがハウルらしい。そして実際、その通りにするのだろうか。とわかり、サリマンはため息をつきたくなった。

「なら尚更のことだ。臆病者でも、まさか書類が怖くて逃げ出したりはしないだろう？ さつさとその書類を片付けたらどうなんだ。私のところにまで崩れてきているじゃないか」

それだけならまだしも、ハウルの私物が——どこで買ったのかわからない怪しげな人形や、何かの呪いに使う道具や、香水や鏡や帽子や、果てにはソフィーの写真まで——雪崩れ込んでくるのはもうすでに日常と化しており、そして何よりもここで一番問題なのは、それに当の本人は何とも思っていない辺りなのだ。

過度な反省をしるとまでは言わないが、人の机に雪崩れ込んだ物をそのままにしておくとはどういう了見だろう。初めは色々と考えたが、やがて同じ職場で働くうちに、単にハウルがどこまでズボラな気性をしているということに気づき、全ては言葉にできないため息となつて出て行つた。

「邪魔なら床に下ろしておいてよ」

器用にソフィーの写真だけ摘み上げて、あつけらかんとハウルは言った。サリマンは呆れた。

一度床に置いたらどうなるのか、それは火を見るよりも明らか

だった。恐らく一生そのままなのだ。この部屋がゴミ溜めにならないためには、適度に自分が掃除をしなければならないということか。ただの掃除ならまだしも、同僚の私物を片付けねばならないとは、一体何と言う職場だろうか、サリマンは少し悲しくなった。

だらしなく椅子に腰掛けて、船漕ぎをしながら手身近な所にあった書類を一枚つまみ上げる。どうでもいいようなことが、長々と書き連ねてあるそれを、ハウルはぴんつと指ではじいた。サリマンがそれを物言いたげな視線で見ているのはわかっていたが、どうでも良かった。つまらない仕事。けれどそれは義務であり、逃げることは許されない。これだから束縛されるのは嫌なんだと、心の中で何回目になるかわからないため息を吐いた。

扉が開けられたのはその瞬間だった。また新たな仕事の追加かと、二人は内心で同じことを思った。それ以外の用事で扉が外から開けられることは今まで無かった。だから今回もそうだとばかり思っていた。

「サリマン様に、奥方様から緊急のご連絡でございます」

やって来たのはいつも仕事の書類を運んでくる青年と同じで、だからその口からそんな言葉が出たことに二人はわずかに目を見開いた。ハウルは船漕ぎを止めサリマンを見つめる。何があったかと、視線だけで問いかけた。

言葉もなく渡された小さな紙を受け取る。それは魔法の品で、恐らくここまで飛ばしてきた物なのだろう。波動からは大した魔力は感じられなかった。レティーがやった物ならそれも無理は無いだろう。彼女はまだまだ見習いの域を出ない。

文面を読んだサリマンの顔が凍ったのを、ハウルは意外な心境で眺めていた。よほどのことが書いてあるにせよ、仕事面では冷静沈着な面を見せるサリマンがここまで表情を変えろとは、それ

はよほどの事らしいと馬鹿でも気づくというものだ。

「……ハウル」

「何、どうかした？ 今すぐ帰るかい？」

何があったかはわからないが、てっきりそうするものだと思っただけで、ハウルは、だからサリマンが自分に向けてその紙面を渡してきたことに訝しげに眉を寄せた。

どうしてサリマンは自分に紙を渡すのだろう。先ほどの青年がサリマンの名前を呼んだ通り、これはサリマン宛に飛ばされてきたものだというのが、確かに親戚関係はあるが、だからといってそれで全てが許されるというわけではない。

伸ばされた腕から紙を受け取るのに、ハウルは躊躇していた。怖がっていた、と言ってもいい。それを見てはダメだと、どこからかそんな声が聞こえてくるようだった。見てはダメ、見てはいけない、見れば何かが崩れてしまう。

「ハウル。見るんだ」

「……何さ。僕に何の用？」

口はいつもの軽い声音を紡ぎ出していたが、目は決して笑ってはいなかった。カサ、という紙特有の音が辺りに響く。手にしたそれはずいぶんと皺があり、書いた人物の焦りがここまで伝わってくるようだった。字が躍っている。ハウルも決して褒められた字を書くわけではないが、それにしてもこれはひどい！ と、乾いた笑みが浮かんでしまった。それほど荒れた、まとまりのない文字がそこにあった。

文字にばかり気がとられてしまつて、肝心の内容に頭が行かない。わんわんと警鐘が鳴り響くばかりで、脳裏で思考回路が理解した文章を伝えるのを、まるで阻んでいるかのようだった。

ねえ、だって、これには何て書いてある？

「ハウル、しつかりしろ。読んだんだろう？ 立て！」

「……サリマン。だって、これ」

ありえない、とハウルは頭をふった。在り得てはいけなことがそこには書いてあった。そんな、彼が今まで一度だって考えたことのない物だった。頭の中の螺子は、きつともう数え切れないほど外れてしまった。だからわからない。今どんな時間が流れているのか、ここがどこなのか、自分が何を見ているのか、そんな当たり前のことが手の中からすりりと抜け出して、まるで夢のように消え失せてしまったようだった。

「驚くのもわかる。現状を理解したくないのな！　だけどそれはレティーが寄越したものだ。今日ソフィーと一緒に出かけると言っていたレティーが！」

「……ああ、うん。ソフィーもそんなことを言ってたんだ。レティーと出かけるって。それは知ってるんだ。僕も知ってる……」

「わかってるなら、ハウルっ！」

耳に聞こえているはずの声は、けれどどこか遠くでだれかが叫んでいるようだった。サリマンの声は、こんなに切羽詰ったものだったのだろうか。今まで聞いていたはずなのに思い出せない。

だってソフィーが事故にあったなんて、意識不明だなんて、そんな悪夢みたいな、悪夢そのものの現象の前には、サリマンの声なんてどこから聞こえてこようが関係なかったのだから。

つい昨日までは照れたように馬鹿なんて呟いた唇が、今は何の動きも見せずに呼吸をしているのかどうかも疑わしい程の静かさで横たわっているのを、ハウルはただ静かな瞳で眺めていた。

白い包帯を巻いているなあと、そんなことをふと思う。ねえ、あんたにそんな物は似合わないよ。清純な白い色も、あんたには少し綺麗すぎる。

「義兄さんごめんなさいっ！」

涙で濡れた瞳で、わずかに汚れた服で、けれど全く持ち前の美しさを損なわずに言ってくるのは、そう、これはレティー。

「……レティー」

涙を拭こうともしない、きつとそんなことも忘れてしまったレティーを、サリマンは緩慢な動作で胸に引き寄せた。それに抵抗するかのやうにわずかにもがいて、顔だけをハウルに向けてレティーは言う。

「ごめんなさい……私もいたのに。私、いたのに、何にもできなかった……義兄さん、ごめんなさい、私……っ」

「……止めてくれ」

ごめんなさいだなんて懺悔の言葉、薄い粘膜が身体中にまとわり付くような不快感を覚えるだけだった。気持ちの悪い言葉、だと思っただ。そんなことを今言われて何になる？

「ごめんなさい……ごめんなさいっ。私、私、姉さんを……義兄さん、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい——」

「……だから、止めてくれって」

吐きそうになるんだその言葉。口は自然と動き、自分でも意味のわからない音の羅列を紡いでいた。心臓が勝手に動くように、それは意識と関係のない身体の動きのようだった。

「——だれに許しを請いたいんだか知らないけどね。僕にはそんな権利なんてないし、だれにだって無いんだ。言っただけあんたは楽になれるかもしれないけどね。自己満足だろ」

「ハウル！」

咎めるかのやうにサリマンが名前を呼び、けれどとはっとしたよ

うに己の口元を押さえて黙り込んだ。嫌な態度だと思った。嫌な雰囲気だ。ここは。どうしてこんな中でソフィーは一人眠っていられるんだろう。

角を曲がったとたん走ってきた馬車に撥ねられそれ自体の怪我は幸いにも打撲程度で済んだものの地面に打ち付けられた際にぶつけた場所が頭でそれが悪かった外傷はとくに見られないものの内部にはダメージが及んでいるらしくいつ目が覚めるのかは残念ながらこちら側には予想もつきません。

「——だから何なのさ」

くだらないことを話す連中だなあ！ ハウルは笑った。その双眸に宿った剣呑さに、サリマンはたじろいだ。

笑い出したら止まらなくて、乾いたそれはしばらく口から流れるだけ流れていった。部屋中に響き渡るほど。

「だから何？ ねえ、それが何なのさ。それを今僕に話してどうしろって？ その馬車の御者に呪いでもかけようか。五感全てを消し去るような、そんな生きてるんだか死んでるんだかわからないような呪いをね！」

「ハウル、止める」

語尾は鋭くなかったが、その声音に秘められた切なさは大きかった。弱くはない力で肩をつかまれ、ハウルはその長身の顔を弱弱しく睨み付けた。言葉ではなく、視線だけで何かを伝えようとしているようなサリマンのその眼差しに、緩く頭を振った。

わかってる。医者が自分の仕事をただ全うしようとしているだけだというのは、恐らく自分がここに来るまでの間に、できる限りの手を尽くしてくれたのだということも。そんなことはわかっている。百も承知だ。

「——だって、そんな言葉が聞きたいわけじゃないんだ……っ」
痛くて直視もできない。愛しい姿が。

泣き声が耳に痛い。レティーのものだ。医者が何事かをサリマンに伝えていく、その声も聞こえなかった。耳の中で泣き声が反芻して、木霊して、その度にどんだん声は大きくなっていくようだった。

やめてくれ、と。

乾いた唇から、言葉は出なかった。

その日から、彼は時間に取り残された。感覚が無くなった。何を見ても見ていることがわからなくて、世界は自分を置いてどこかへ行ってしまったのかと、本気でそんなことを考えた。

けれど気がつくとき家に居て、日は沈んで朝はきて、そんな太古の昔から変わらぬ時間が流れているのがどうにも不思議で、無性に叫びたくなつて、けれどそんな力は彼の身体のどこにも残されてはいなかった。食べていないし飲んでもいない。少なくとも記憶にある中では。それでも人は生きていけるのだから案外丈夫なものなんだと皮肉な心で思った。

「ハウルさん」

弟子の声に顔を上げるのさえ面倒だった。窓から日差しがさんさんと入ってくる明るい部屋の中で、それでも彼の目は何も映してはいなかった。ベッドに腰掛けて、汚れた絨毯を眺めていた。ただそこにあるなど、そんな思いで。

「病院、行きましょうよ」

夢の中で何度もこの声を聞いたような気がする。あるいはそれは夢ではなく現実のことなのか。それならそれはいつの事だったのか。少しばかり疑問に思ったが、それはどうでもいい事だった。

「ソフィーさん、きつとハウルさんが来てくれるの待ってますよ」
「……寝てるだけじゃないか」

言った自分の言葉に身体がびくつと震えた。

寝てる。だけ。寝ているだけソフィーは寝ているだけ寝ているずっと。これからも。ずっと。寝ている——ソフィーが？

それは急速に心の中に広がって、黒い靄は留まるところを知らず、彼の子供のままの心臓をぎゅつと掴んだ。痛みすらなくただ冷たいだけで、これだから心臓があるのは厄介なんだと拳を握った。

「それでも、ハウルさんが来てくれたら、ソフィーさん絶対喜ぶはずですから。僕やマーサじゃダメなんです。他でも無い、ハウルさんじゃないと……」

「よくそんなことが言えるな！ あんたに僕の気持ちなんて何もわからないくせに！」

久しぶりに正面から見た弟子の目は赤く染まっていた。夜通し泣いたであろうことが容易く見てとれた。泣ける。泣けるのならまだいい。自分なんて、どこからも涙なんて出てきやしないんだから。感情は蓄積されるだけで。出口なんてどこにもない。

「僕が行って何になるっていうのさ。ええ？ ソフィーが喜ぶ？寝てるだけの、意識不明のソフィーがどう喜ぶっていうんだい！僕にソフィーを見てどうしろって？ 優しく声でもかけろって？ああ確かに、それで周りには納得するだろうね、優しい夫婦愛だって！ でも僕はそんなの「免だ……」

「そんなの、ただ逃げてるだけじゃないですか！」

厳しい声音に、こんな声を出すこともあるんだと初めて知った。糾弾されるのも慣れている。彼の人生はそんなことばかりだった。今更一つや二つ増えたところで変わらない。

——そうさ逃げてるさ。逃げるのことの何が悪い？

「確かに行って、何もできないですけど……でも、何かが変わるかもしれないじゃないですか！ 僕だって怖いんです、あんなソ

フィーさんを見るのは嫌ですよ！」

涙がこぼれて、マイケルは慌ててそれを袖で拭いた。それでも、そんなものでは拭いきれないほどの涙の数だった。それをハウルは、どこか郷愁に似たものを感じながら眺めていた。

「でも……それでも、心配だからっ。だから——ハウルさんにも、行って、ほしくて……僕は」

嗚咽が混じって聞き取りにくい言葉は、しっかりとハウルの耳には届いていた。小鳥の囀りと涙を堪える震えとが混じって、ハウルは目を閉じた。何も見たくなかった。泣く弟子を見て、不愉快なのかそうでないのかわからない判別のつきようなない感情が湧き上がってくるのが邪魔だった。

「——だから、の後、どうしてそこで僕の名前が出てくるのかわからないね」

何の考えもなく言った言葉に、マイケルは傷ついたかのように息を飲んだ。目を閉じていても、そのぐらいいは気配でわかる。

徐々に嗚咽も止まり、それからしばらくの時間が経って、足音も立てずに居なくなっただのかとハウルが思うようになって。

「ソフィーさんから、逃げるんですか」

そこにいる少年は、弟子の瞳をしていなかった。

床を踏みしめるように両足を使って立って、唇を噛みしめて、師匠でも何でもないただのハウルを見つめていた。

真っ直ぐな瞳は嫌いだった。自分にはできないそんな瞳は、羨望の行き先であると同時に畏怖べき対象だった。何が見えるのかわからないその双眸に、自分がはたしてどう映るのが、それが怖かった。今でもその感情は残っている。

「……ソフィーもそんな目をするんだ」

けれどそれは怖くはなかった。そんな風に思ったことは一度もない。これからもそうだった。そうなるはずなのだ。

「何でも……許してくれるように思えたんだ」

汚い部分を見透かしても、それすらも含めて好きだと言っているようだった。それはもしかしたら自分の錯覚に過ぎなかったのかもしれないけれど、そんな錯覚を抱けた相手はソフィーが初めてだった。初めてにして最後の相手だった。

「ハウルさん」

名前を呼んでから、何と言葉を続ければいいのか困ったように、マイケルは首をかしげた。窓の外の日差しはどこまでも暖かそうで、けれど室内のこの雰囲気は身体に悪い不純物が存分に含まれているかのようなだった。

「……僕、ソフィーさんの様子を見に行ってきますね」

勝手に行けばいい、と頭の中だけで返事をした。一体マイケルは、これで何回目になるのだろうか。よく行けるものだと、呆れるような心境だった。

ソフィーから。

逃げてる、だなんて。

「――僕が逃げるのなんていつものことじゃないか」

それこそ生まれた時からずっとどこまで逃げてきたようなものなのだから。ウエルズは肌には合わなかった。家族もそう。だからここに来了。この世界に逃げてきた。この世界は良かった。魔法は性に合った。才能もあった。ただそれだけの話。

「あなたの逃げ方に問題があるんだろ」

時間がどれだけ流れたのかわからない。気がつくといつもの暖炉の前の椅子に腰掛けていた。目の前にはカルシファー。契約は解けたというのに、それでもここに居座り続ける風変わりな悪魔。「僕の？ どうしてさ。逃げることに変わりはないさ。ずっと前から変わってないだけだろ」

「……あんたさあ。ソフィーのこと好きなんだろ？」

どうして悪魔にこんなことを言われているんだろう。ずいぶん滑稽な光景だろうなと、意識は第三者を装って笑い出したくなっていた。

何だろう。心は悲しいと思っているはずなのに、ふとした瞬間にいつも笑いが飛び出ようとしている。表面上だけでも感情を忘れまいとするのかのごとく。

「好きだね。ソフィーが死んだら、僕もきっとそのまま死ぬだろうさ」

限りなく本気の言葉だった。そう、ソフィーがこの世からいなくなるのなら、独りになるのなら、一緒に棺に入るのを願うんだ。

「好きなら一緒にいたいって、普通思っもんじゃないのかよ？」

あんた悪魔のくせにだれかを好きになったことあるのかいと笑い返しておいた。そうでないと、何を言い出すのか自分でもわからなかった。

「……悪魔らしくないな、あんたって」

「そりゃ、おまえみたいなのと契約してたからな」

「何だい。僕のせい？」

おどけたように笑うと、カルシファーは何が不満なのか煤を出した。辺りに散らばって床を汚したが、ハウルにはそんなことはどうでもいい。ソフィーが帰ってこないようになって、この家はまた元のゴミ溜めに戻りつつあった。

「おまえ、その薄ら笑いやめろよ。目が笑っていないのに、口だけで笑うな。見てて気持ち悪いんだい」

「……笑ってない？」

どうして悪魔に、そんなことまで指摘されなければならないんだろう！ 自分では何も気づかなかった。マイケルもサリマンも何も言っではなかった。カルシファーだけがどうしてか気づいた。笑ってない、だなんて。

「泣きたきや泣けばいいだろ。何だよ、普段はあれだけ好き勝手してるくせにさ。こんな時に意地張るなよ」

「意地なんて張ってないさ、別に」

元より張るような意地もない。そんなものは、とうにどこかに行ってしまった。今この身体に残っているものは一体何だろう。まだ空っぽにはなっていないと信じた。

「じゃ、泣けよ」

「どうして僕をそこまで泣かせたがるんだよ、カルシファー？ あんた、泣かれるのは嫌いじゃなかったの？」

「嫌いだよ。水はいつだっておいらを消すんだから。でも、あんたの変な笑顔を見てるのはもつと嫌なんだい。早くすつきりしておいらにその変な顔見せるの止めてくれよ」

変な笑顔だの変な顔だのと連呼され、ハウルは苦笑した。普段であれば氣を立てるであろう台詞にも、今は何も感じなかった。カルシファーにそんな言葉を言われたことが、ただ妙な感じだった。

「生憎だけど、悪魔に泣き顔晒すような趣味は無いんだ」

「じゃ、だれの前ならいいって？」

「……そうだな」

浮かんだ顔なんて一つしかない。カルシファーも、きっとそれはわかってる。わかっていて、わざわざ尋ねてくれたのだ。この悪魔は。

性格が悪いな、とハウルは胸中で呟いた。それも悪魔だから仕方ないかと。

不器用な優しさが、今は痛かった。

詰ってくれても良かったのに。そんなことを思う。

「——出かけてくるよ」

「行ってこい、行ってこい。思う存分泣いてこい」

ああ、泣いてくるさと手をふって、ハウルは扉を開けた。外には小さな雪が舞っていて、いつの間にか季節は冬になっていたことを告げていた。

夜には魔力が強くなると、彼の師匠であるペンステモン先生はそう言った。月には魔の誘惑が潜んでいると。けれどハウル、決してそれには負けてはいけませんよ。心を強くもって。魔の囁きに負けてはダメ。

——でも先生。あなたの忠告も無駄だった。僕は悪魔と契約をした。そのまま、どうせろくでもない最期を迎えるのだらうと何の感慨もなしに思っていた。全てを変えてくれたのはソフィー。僕の奥さん。僕は何もしていないんだ。きっと昔から何も変わっていないまま、ただ年だけを重ねている。

キングズベリーの郊外にある、国が運営しているインガリー——と名高いその病院。夜に見るそこは表現できぬほどの静寂さと、生と死が隣り合わせになっている瞬間を覗かせていた。けれどハウルは怖くはなかった。だってそれは自然界の理で、何ら不思議もない当たり前の光景に過ぎなかった。落ちた種がやがて芽吹き、成長して小さな花を咲かせるように。日々赤子は生まれ子供も大人も老人も男も女も皆死んでいく。それだけのことだ。

面会時間とはつくに過ぎているというのに、ハウルの顔を見た医師は追いつくどころか笑顔で迎え入れてくれた。それが純粹たる好意からきたものではなく、単に自分の王室付き魔法使いという地位が物を言わせたものだというのはわかっていて。自分自身

は何も変わつたつもりはないというのに、肩書き一つで周りの態度はいとも簡単に変わつてしまう。

だから。変わらないものが愛しかった。

ソフィーは。真つ直ぐに自分を見てくれるから。

人間はあまり好きではないなあと思つた。そんな彼も人間で、ソフィーもそうだというのが、何だか可笑しかった。きつと僕は、同じ人間の中でも何か少しずつ違ふのかもしれないね。だってあんたは、こんなにも長い間眠りにについている。普通人間は、朝が来れば起きるものなんだ。なのにあんたは起きる気配を全く見せない。

「――あんた、冬眠でもしてるのかい？」

今は冬だからね！ あんたが特別寒がりだとは知らなかったよねえ、春になつたら起きてくれるの。

包帯は取れていた。痛々しいと、そう思うことはなくなつた。目を閉じて、微動だにせず眠りにについている彼女は、月明かりの元、人間ではないような、そんな神秘的な色さえ秘めていた。

まるで、死んでるみたいだ。

思つて、自分の想像に吐き気がこみ上げた。けれど何も入っていない胃からは吐き出せる物はなく、目尻に涙が浮かんだだけだった。ああ、自分にもちゃんと涙は存在していたんだと、妙なところで安心した。

床に膝をついて、空の咳を数回吐いた。

「……ねえ、ソフィー」

名前を呼んでも、答えてくれないことなんて今までだつて多々あった。奥さんは決して素直とは呼べない気性をしていたから、扱いが難しく、その分簡単だつた。

自分ばかりがいつも必死で、ソフィーはまるで余裕なように見えた。そう言えば、彼女はきつと怒つたように「そんなことない

わよ」と言うだろう。けれども彼にはそう見えた。愛してる愛してる、しつこい程に口にする自分は、それだけ怖かつたから不安だつたから。いつ彼女が自分から離れていくだろうかと、そんな莫迦げたことを考へて本気で眠れない夜があつたなんて、きつとソフィーは知るはずもない。

馬鹿みたいだなあ。自分でも呆れる。ソフィーは決して自分を見捨てないと、そうわかつていても怖いდანანて。

――あたしの気持ちわからないの？

何度も何度も僕のことを愛してるのねえソフィーと尋ねるハウルに言い返された言葉。うんわかつてる。わかつてるんだ。それでも言葉にしてほしいんだ。気持ちは目には見えないから。見えなくても伝わるけど、それでも形にしてほしいんだ僕は臆病でどうしようもないダメな夫だから。

「ソフィー」

かける言葉が見つからなかった。何を言えば、どんな言葉は、彼女の耳にも届くのだろう。

ソフィー。あんたが死んだら僕も死ぬよ。

あんたがこのまま目覚めないのなら、僕も一緒に眠りについてやろうかな。

「……あんたのいない世界なら、僕は生きてたつて仕方ないんだ」
本当は泣くつもりでここに来た。泣くことは浄化作用だから、それで少しでも楽になれるのならと、そんな期待をしていた。眠つていても、彼が素の泣き顔を晒せるのはソフィーしかないなかったから、だからその為にここに来たというのに。

「――泣けないよ。泣けないんだよソフィー」

心からの涙なんてどこからも出てこない。

ソフィーは眠つたままだというのに、世界はいまだ回り続けているだなんて、そんな事に不条理さを感じた。

「ソフィー」

きつと言葉は空回りしている。

「ソフィー。……ソフィーソフィーソフィーソフィー……」

他には何も見つからない。言葉を覚え始めた赤子のように、狂ったようにただそれだけ呼び続けていた。

あんたがいてくれれば他には何もいらなんだなんて、そんな感情は知らなかった。彼にとつては遊戯であるはずのそれは、いつしか彼を捕らえていた。奪われた心は、もう元には戻らない。

「起きてよ。ねえ、起きてよ」

我侭な自覚ならあるけれど、けれど今のこの願いがそうだとは思わない。だって自分が願っていることなんて、ただ彼女が目を開けてそうして名前を呼んでほしいと、そんなささやかな可愛らしい願いにすぎないことではないか。

「起きて。ねえ、起きて。起きてよ。ソフィー。頼むから目を覚ましてくれ。お願いだから。ねえ、お願いだから……起きてよ。僕を一人にしないでよソフィー！」

真つ白な掛け布団の上から、彼女の小さな身体をゆすった。出会ってからもう季節が二度ほど変わったというのに、こんな行為は初めてだった。早起きな彼女は、いつだって自分より早くに目覚めてしまうから。いつも自分は起こされる側だった。ソフィーに起こされるのはあんなに幸せな気持ちに伴う行為だったのに、今のこれはどれほどの苦痛を併せ持っているのだろうか？

「ソフィー！ ソフィー、ソフィー、ソフィー！」

僕はあんたとしたいことが山ほどあるんだ。

他愛も無い会話をして、喧嘩をして、でも笑いあって、休日の朝にごろごろとベッドの中でまどろみを味わうことだってしたいんだ。愛しい人の温もりを隣に、ふわふわとした夢を見たい。出かけるのもいいけれど、笑顔の可愛いあんたに、他の男が見惚れ

るのは嫌だから、やっぱり家で腕の中に閉じ込めていたい。そんなことを言って、呆れたようにため息をつく様子を見てみたい。

まだ。全ては、始まったばかりだというのに。

「……ソフィー」

高ぶった想いは溢れて、幼さの残る顔を濡らした。目尻に落ちていった涙は、まるで彼女が流しているようだった。

瞳が。

震えた。

世界が揺れ神の定めた枠から出掛かり、けれどそうはならなかったかのような、そんな瞬間だった。

嬉しさや喜びや、果ては驚きや感謝の心や、他のあらゆる感情も何もかも、ハウルの心には浮かばなかった。今まで感じたことのない、感情なのかもわからない想いの本流にただ流された。

心は流されて、どこかへ行き着き、そうしてようやく双眸に視力というものが戻ってきたようだった。

「——」

名前を呼んだら何もかもが崩れてしまいそうで、恐る恐る指を運んだ。触れた頬は温かくて、それが彼に生きていることを証明させた。

喉が渇く。唾を呑み込む。瞬きをすることも忘れて、口を開いて閉じて、また開いて——言葉を発するのが、こんなにも勇気のいることだとは、今まで知らなかった。

「……ソフィー……」

彼女の戻してくれた心臓が痛い。痛さはだんだんと増して行き、無くなることはなかった。

ソフィーの瞳は。何も映してはいなかった。

【 2 】

春夏秋冬が時間ごとに流れていくこの国において、冬は他国と比べれば過ごしやすいとはいえ、それでも寒さは厳しく人々に吹き付けていた。この時期にはもちろん耕作などもできず、秋までに収穫していた食料で過ごす。特にイモ類は、どこの家庭の食卓にも上っていた。

町のどこでも、がやがや町でもキングズベリーでも、雪かきをする人々の姿が見られた。子供が喜んで遊ぶ雪も、大人にとってはただの駆除の対象にしかならないということか。

ずぼ、ずぼ、と足を雪の中に埋めながら進んでいく。踏みしめた足の下で、固くなった雪がキュッと音を立てた。

ハウルは顔を上げた。

「すごい雪だ」

昨年はこんなに積もっていただろうか。よく覚えていなかった。つけた足跡を振り返ると、最後の数歩を残して、後はもうほぼ見えなくなっていた。まるで僕の人生みたいだな。

「義兄さん！ もういいわよ！」

雪と共に上から降ってきたレティーの声に、ハウルは笑顔を見た。そのまま小さな呪を紡ぎ、飛び上がった。

風が当たり、レティーは小さく身体を震わせる。窓枠に手をかけて、ハウルは部屋に入り込んだ。

「義兄さんも魔法使いなのね、やっぱり」

「何を今更。僕は君の旦那と同じ職場じゃないか」

指を一つ鳴らして、身体についていた雪を消し去った。それを横目で見て、窓を閉めながらレティーは言う。

「ベンは家で魔術の実験をしているけど、義兄さんはそんなことしないじゃない。魔法を使うところを見るのだって、これで二回

目ぐらいよ」

「へえ？ 僕の髪、これも魔法なんだけどね」

「そうなの？」

とたんに目を丸くするレティーに、ハウルは小さな笑いを返しておいた。そんな顔はとても子供っぽい。サリマンの犯罪者め、と胸の内で呟いた。

「ねえ、どこがどう魔法なの？ 何かの呪いでもかかっているの？」

「さあね。サリマンにでも聞いてごらん。あいつは気づいているだろうから」

何たって、まあ、僕の次ぐらいには強い魔法使いだからね、と。

はぐらかされ、レティーは不満そうな顔になった。姉妹全員そろって好奇心が強いなあと、ハウルは笑った。

「でも、だからって、窓から出て行くことはないと思うわ」

会話は遡っていた。窓の外の、緑の生い茂る光景を忘れてしまいうようなほどの白い雪を見ながら。

「君が、少し席を空けてくれって言ったんじゃないか」

「部屋の外で待っててくれれば、それで良かったのよ。何も寒い外に出て行けなんて言っていないわ」

「いいんだ。雪は好きだからね」

曖昧な笑顔を浮かべて、レティーは「私はもう雪には飽きたわ」と呟いた。まあ、これだけ続けばね、とハウル。世界中が雪だけで覆われているような、この世に春が、夏が、秋が、他の季節があることを忘れてしまいうような時間だ。

「雪は音を吸収してくれるからね。中に一人で佇んでると、まるで世界が自分の物になったような気持ちを味わえるよ。他に生き物はだれもないみたいでさ」

「——義兄さんで、たまによくわからないことを言うわね」
「いいんだ。理解されたくてしゃべってるわけじゃないから」

この会話はお終いにしようと、言葉ではなく視線で言つて、ハウルは軽く頭をふつた。金髪が揺れる。視線を、ベッドの上の住人に向けた。どんな顔をすればいいのか、会う度にわからない。とりあえず笑顔を浮かべるけれど、それは自分でもずいぶんと偽物めいたものだと思つた。

「……やあ、ソフィー。レティーに体拭いてもらつて、どう、さつぱりした？」

返事の無い生活にも慣れてしまった。人形に話し掛けているような虚脱感。けれどそれももう日常と化していた。硝子玉みたいな目。どこを見ているかわからない。

「別に、僕を追いつけなくてもいいのにさ」

視線を早くも逸らして、何でも無い素振りでもハウルは言つた。レティーが肩をすくめる。

「ダメよそんなの。いくら夫婦だからって、姉さんが治つたら怒られちゃうわ」

「……そう？」

治つたら。それは何時になるのだろう。遠い未来か、それとも時間なんて忘れた頃かなんて思い、あるいはそんな未来は来ないのかもしれないしなあと、漠然とした思いも抱いた。願つていれば叶うだなんてこと、信じていられるのは子供の内だけだ。成長すれば大人になれば、嫌でも現実という壁を知る事になる。甘言だけでは生きていけないと。

「ウェールズに、行つて来ようと思うんだ」

その発言は唐突だつたけれど、レティーはわずかに目を見開くだけだつた。

「ベンと義兄さんの故郷よね」

「うん。あつちはこちらよりも、色々な物が発達しているからね」
少しの可能性でもあれば、それに賭けてみるつもりだつた。そ

れは何も信じているからなんて物ではなく、ただ、何か行動をしていないと、とたんに世界が現実味を無くしてしまうからに過ぎなかつた。

「どうして兄さんは、インガリーに来たの？」

いつでも真つすぐに尋ねてくる子だなあ！ さすがはソフィーの妹だ、と感心した。これも血なのかな。

「昔の事なんて忘れたよ」

逃げてきただなんて事、妹に言う気にはなれなかつた。見栄つぱりの自覚ならある。けれど今あるのはそんな安っぽい物ではなく、ひたすらに面倒で鬱陶しいだけだつた。そのうち生きていくことすら億劫になりそうで、そんな自分が少し不憫で恐かつた。

ハウルの言葉を、触れられたくないものだと思つたのか、レティーはあつさり話題を変えた。

「私もベンも、できる限りのことはしてみよう。今もね、色んな本と睨めっこしてるのよ」

「うん、知ってる」

ありがとうなんて言葉は出てこなかつた。レティーもそんなこと、気にしてはいなかつた。

互いの言葉は確かに聞こえていて、そうして声を交わしているというのに、どこかずれているようなピースの嵌りきらない妙なテンポ。居心地は悪かつた。

「……ねえ、義兄さん。こんなこと言つても、気休めにもならないとはわかつてるけど」

なら言わないでよ。心の声で呟いた。

「姉さんなら、きっと良くなるわ。私たちも義兄さんも、こんなになんばつてるんですもの。だから気を強く持つて。義兄さんが負けちゃダメよ」

「……ああ、そう？」

薄っぺらい言葉なんて聞きたくなくて、彼は耳を閉ざした。所詮それはキレイ事だった。本気でそんなことを思っているのかなと、不思議に思った。

「義兄さん、帰るの？」

向けた背中に声がかかった。

「うん。ちよつとやることもあるからね」

うん。これ以上君の言葉を聞きたくないからね。

「……義兄さん、がんばってよね」

その言葉がどれほど重いものなのか、きつとレティーはわかっていない。

振り返らずに、ハウルは病室を出た。顔を向けても、そこに彼の待ち望む瞳がないことはわかっていた。

「僕の奥さんなんだけどね、事故にあって頭ぶつけてずっと意識不明で何日も眠ったままで、やっとこの前起きたと思ったらどこが悪いのかまるで心が無くなっちゃったみたいにしやべらないし動かないし目も合わないしで心配なんだけど」

一息にそこまで口にした後、ハウルは大きく息を吸った。身体中に行き渡らせようとするかのように。呼吸をしたかったわけではなくて、体内に溜まった淀んだ空気を全て吐き出してしまいたかった。

言うのはたったこれだけなのに、その現実がちりちりと肌に痛い。

「——まあべつに、期待をしていたわけじゃなかったからね」

だから落ち込むこともないんだと、言外に呟いた。

期待なんてしない、その方が、賢い生き方のように彼は思った。パンをちぎって、スープにひたして、彼女の口に運んだ。ソフィーは口を開けてそれを呑み込む。自分からは動かない彼女だったけれど、口元まで持っていけば食べることはした。それに少し安心した。

無表情にただ咀嚼をする彼女は、まるで無機質な何かのようだった。

「ウェールズでも、あんたを治す方法は見つからなかったよ」

どんな味がするのかと少し気になって、ちぎったパンを自分の口に持っていた。ごく普通のパンだった。不味かった。

「でも、似たようなケースは他にもあるみたいだね。色々話は聞いてきたよ」

それだけでも、少しは収穫があったって言えるのかな、と、ハウルは自嘲気味に微笑んだ。パンはもう無くなって、やることはなかった。沈黙になるのが怖くて、口を開いた。

「ソフィー、今日もすごい雪だよ。あんたと過ごす初めての冬だけど、一緒に雪が見れるのかな」

ソフィーと共に過ごす季節なら、きつといつだってそれは素晴らしい時間になるんだろうなと思ったら、言い切れない切なさ胸にこみ上げてきて困った。感情なんてものはいつだって厄介で、ちつともこちらの思い通りになんてなってくれない。他の人は、一体溢れる感情をどう始末しているんだろう。

「ねえ、ソフィー。あんたの心はどこにあるの？」

彼女は自分に心を戻してくれたけれど、自分は彼女に何もできることはないのだろうか。だって自分はこんなにもちっぽけで無力だ。それでもまだ生きていけるのは、彼女が言ってくれた、愛しているという言葉が胸の中に残っているから。

怒っているように顔を真っ赤にして、甘ったるい雰囲気なんて何も無しに、「愛してるわよ！」と吐き捨てた彼女の顔が忘れられない。そんな様子の一つ一つに胸がぎゅつと締め付けられて、小さな身体を腕の中に閉じ込めた夜。

「……ソフィー」

今の彼女に触れるのは怖くて、頬に手を伸ばすのが精一杯。でも、ねえ、ソフィー。

僕はもう一度、あんたの声が聞きたいんだ。

「その辺にしておいたらどうだね」

声をかけても無駄だということはわかっていたが、それでも口から出てきたのはそんな言葉だった。勉強熱心なのは知っている。そう、彼女はいつでも努力を惜しまない種類の人間だ。

「聞いているかい、レティー」

「聞いているわ。でも、今日中にこれを全て読んでしまいたい。先に寝ていてちょうだい」

夜も遅くに仕事から帰ってくれば、妻はずっと書庫に籠っているという。気になって様子を見に来れば、レティーは周りにたくさん本を積んで、一心不乱に手にしたその文字を目で追っていた。

「寝るのは君の方だ、レティー。一体何時間ここにいる気だい？ いい加減休まないと身体を壊してしまう」

「あなたにだけは言われたくないわね。朝早くからこんな時間まで、ずっと仕事をしていたような人には」

本から視線を外し、睨みつけるようにサリマンを見て、レティーは言った。心配しているのはあなただけじゃないんだから、と。

「私は男で、君よりも体力だってある。これぐらいは平気さ」

「それは詭弁にすぎないわ、ベン」

十以上も年の差があるというのに、こんな時のレティーは、その年齢を感じさせない。まるで母親に叱られているみたいだなど、サリマンは苦い笑いをもらした。

「あなたががんばっているというのに、どうして私ひとりが休んでいられるの？ あなただって、義兄さんの分の仕事までやっているんでしょ」

「それは当然の事だとは思わないかい？」

今の彼に、仕事を強要するのは酷すぎる、と。

今ハウルがどこで何をしているのか、サリマンは知らない。最後に顔を合わせたのはいつだろう。彼はあまり病院にも顔を出さない。それを責める気にはなれなかった。

「……私のやっていることなんて、きつと何の役にも立たないでしょうね」

ぱたと本を閉じて、どこか遠くを見つめながら、ささやくような声でレティーは言った。

「レティー、そんなことは……」

「下手な慰めはいいの、ベン。自分でもよくわかっているんだから。いくら本を睨めっこをしたって、それで姉さんを助けられるわけじゃないのよ」

口を開いたものの、かける言葉が見つからず、サリマンはぎゅつと拳を握った。こんな時、妻に何もしてやれない、自分の無力さが悔しかった。

「何もしてないと怖い。どんどんどんどん、悪い方向にばかり考えが行ってしまつて。何かをしていれば、怖さを忘れていら

れるからのよ。私はがんばってる、努力しているんだからって、そう思うことができるから」

最低ね、と。形のいい小さな唇が呟いた。

それは自分の勝手なエゴだとはわかっていたけれど、そんな言葉言っただけでなく、肩に手をおいた。愛しいと思う温もりが、今はどうしてか痛かった。

「……自己満足、って」

レティーの小さな呟きには、何の感情もこもってはいないようで、けれどそれが余計にレティーの今の心情を全て表しているように、サリマンには感じられた。それは思い込み過ぎなかったのかもしれない。

「あの日、事故にあった日、義兄さんは言ったわ」

「……レティー」

そんなことまで覚えていなくてもいいのだと、そんなことを思うのは、並外れた記憶力を持つ彼女には無駄なことなのだろうか。「今の私は、本当にそうだと思うの」

レティーは慰められることを望んではいなかった。サリマンにはそれがわかった。もしこれが他の男であれば、好機とばかりに甘い言葉を囁いたのかもしれない。

けれどサリマンは、そんなことはできなかった。

痛いほどに、文字通り胸の奥が軋むような痛みを覚え、それでもそれは、レティーと全く同じものではないのだろう。彼女にとってソフィーは実の姉だった。サリマンにとつてのソフィーは義姉で、血の繋がりの目に見えないそれは、こんな時に一番大きく重くその身に押し掛かる。

自己満足。そんなことはない、そう言うことは簡単だった。それでもその言葉が、全くの嘘偽りでないとサリマンにはわかっていて。

覚えのある感情だった。

いつか、今となつては思い出せない過去のいつかに、そんな思いを味わったことがあるような気がした。

「……結果も大事だが、行動するというその行為に、意味があるんだと私は思うがね」

「義兄さんにその台詞が言えるの、ベン」

鋭い切り替えしに、サリマンは言葉を失った。

——ハウル。

「義兄さん、あまり感情の起伏が見られないの」

「……そうなのかい？」

「あれだけ騒がしい人だったのにね。心のどこかが麻痺しちゃったのかしら」

——私はまだいいのね。散々泣いて、泣き喚いて、飲んだ水が全て目から出て行っちゃったぐらいで。でも義兄さんはそれができないのよきつと——入ってくる言葉に耳を傾けながら、サリマンは義兄の姿を思い出そうとした。記憶にあるハウルの姿は、いい加減で身なりにばかり気を使って、そしてインガリー一の魔法使いだった。

「——もしかしたら、私がそうなつていたのかもしれない」

今更ながらにそれを思い出して、サリマンは自嘲気味に微笑んだ。馬鹿なことを言おうとしていると、頭の片隅で声がする。その声を聞きながら、動こうとする口を止めることが難しい。いつもであればそんなことは無かった。感情を理性で止めることには慣れていないはずだった。どうして今は、どうして。

「……ベン？」

「あの日、手紙が届けられた時」

言えば彼女は、どんな顔になるのだろう。いや、それを。自分は、確かにわかっているというのに。

「私はすぐに、君の身に何かあったのかと考えた。幸いにも君は無事だった。事故に遭ったのは、君ではなくソフィーだとわかり

——私は、とっさに、安心してしまったんだ」

はっと、息を飲む音が聞こえた。

「ベン……っ！」

非難の眼差しを、サリマンは手で制した。

「わかってる。言われなくてもね。自分でも自分が信じられないくらいだ。こんな感情があつただなんて」

醜い自分を見つめるのは辛いことだとサリマンは思った。人間は聖人ではない。汚い感情はどこにだって渦巻いている。日頃は見ないふりをしていても、確かに存在している以上——それはこうしてふいに、その身を突きつけてくるのだ。

これが、おまえの本心だろう、と。

「ベン！ ベン……あなた……」

「仕方ないだろう。私は君の夫で、私にとって君以上に大事な者なんていないのだから」

そんな事を言っても、レティーが手放しに喜ばないことなんてわかってる。

「だから……だから……！ 姉さんがあんな目に！ 私……

私の方が……」

言いかけた言葉を塞ぐように、その身体を抱きしめた。大柄のサリマンの腕の中で、レティーはいつもよりも小さく見えた。

「……だからお願いだから、自分の方が事故に遭えば良かったなんて事、言わないでくれ」

——そんな事になったら、私は死んでしまうから。

手に濡れた物が落ちてきて、サリマンは腕に力をこめた。

「……姉さんの声が聞きたいわ」

「ああ」

「マーサと喧嘩するとね、いつも姉さんに叱られたの。母さんじやなくて姉さん。怒ったあとには、破れた服を繕ってくれて……お菓子も作ってくれて……」

胸に顔をうずめるレティーの、その頭を、サリマンの大きな手が撫でていた。

「私も、二人の喧嘩をしている姿が見たいよ」
ハウルとソフィーの、二人の笑顔を。

「温めなくていいのかわ」

聞こえてきた声に、頼めば嫌な顔をするくせに、とマイケルは小さく笑った。

「冷たいままでも食べれるから平気だよ」

「でも美味くないんだろ」

「どっちも美味しいとは感じないから」

一人で食べる食事ってそんなものだよと呟くと、おいらにくれてもいいけどと返された。マイケルは口の形だけで笑った。

「カルシファア。これスープだよ」

「じゃあいらない。おいら消えちゃうもんな」

どうせ他に食べる人もいないのだからと、鍋ごと机の上においてやった。冷たいスープは具がたくさん入っていて、そしてどれも大きさが揃いだった。マーサはどんな顔でこれを作ったのだろうと考えると、唐突に目に熱い物がこみ上げてきた。

こんな時でなければ、もっと味わえただろうに。そう思うと残念でたまらなかった。

「カルシファー、最近歌わないね」

「そんな気分だと思ってるのか？ いいからさっさと食ってさっさと寝ろよ。もうこんな時間だぜ？」

「……うん」

日付が変わって、もうどれぐらい経ったのだろう。時計を見るのは億劫だった。カルシファーは心配してくれているのかなどふと思う。悪魔だけど、でもその声音はとても優しい。

沈黙になるのが嫌で、だから口を開いていることを、きつと彼はわかってるのだろう。

「……前に戻ったみたいだね、カルシファー」

自分と彼と。一人と一匹と。

一年前の冬もこうだった。

「ハウルさん、いつ帰ってくるのかなあ」

「あいつが帰ってこないのなんて、いつものことだろ」

そうかもしれない。けれど今、ここにハウルがいない事に、マイケルは耐え難い苦痛を感じていた。

どうしてかなんてわからない。そんな事を考えていられる余裕なんてない。それでも、多分きつと、ここに自分以外の人間がいないことが辛いのもかもしれないと、何となくはわかっていた。

自分がこれほど弱かったのだと初めて知った。あの人達が、どれほど大事な人達であったのかと。

——ぼた、と膝に水が落ちて、マイケルは慌てて袖で目をこすった。

「……涙腺、弱くなってるみたい」

言い訳のように口にする。カルシファーは何も言わなかった。

言わない代わりにふふよと飛んできて、両手を伸ばすと机の上の鍋を抱え込んだ。

「やっぱこれ、温かい方が美味しいと思うぜ、おいら」

悪魔らしくない悪魔。

「——カルシファー」

名前を呼んだものの、そこから言葉が出てこなくて、変な笑顔になってしまった。泣きたいのか笑いたいのか、自分でもわからない。多分どつちも半々で。

「それね、マーサが作ってくれたんだ」
だから違うことを言った。

——マーサ。

もうどれぐらい、彼女の心からの笑顔を見ていないのだろう。そして自分も、見せていないのだろう。

頼りにならない自分が嫌で、何もできない自分が嫌で、何もかもが嫌で嫌でたまらなくて、そんな感情で身体中がいっぱいになりそうだった。

……でも、スープはこんなにも美味しいから。

「泣きながら食ったら美味くないだろ」

「……うん。美味しいよ、すつごく」

この気持ちをどう伝えればいいのかわからなくて困った。

こんな時、人の優しさが身に染みて、自分の小ささを改めて思い知る。

だれだって。涙する夜はあるのだから。

「明日さ」

「うん？」

「掃除しようか」

「……うん」

だって、こんな荒れ放題の部屋を見たら、ソフィーさんはまた怒るだろうからさ。

—— 全ての始まりはどこだったのだろう。
—— あんたと出会った瞬間がそうだというのなら。

今。歩いている先は、どこに。

「ソフィー」

ささやきは。
風に乗り、消えた。

その日もそのまた次の日も、ハウルは城に帰っては来なかった。数日後、どこに行っていたのか、今まで何をしていたのか、何も言わずにハウルが帰宅した時にも、マイケルはそれを責めようとはしなかった。してはいけないのだと思った。それはカルシファアも同じなようで、以前なら文句の一つや二つもこぼすお湯の催促にも、ただ黙って従っただけだった。

氣を使われるのは返って変な感じなんだけどと、ハウルが内心で苦笑をもらしていたのを二人は知らない。けれどそれがあの二人なりの思いやりなのだとわかると、嫌な気持ちはしなかった。確かに感謝はしているのに、それを上手く言葉にできない自分が、たまたまどかしくて仕方がないだけだった。

「――マイケル。今から病院行くんだけど、一緒に付いてきてもらえるかい？」

かけた言葉に、マイケルはわかりやすいほど目を丸くして、それにハウルはかける言葉もなく笑っておいた。

言わない言葉を、それでもわかってくれないかななんて、そんなずるい期待を胸に秘めて。

「べつにいいですけど……どうしてですか？」

「うん。まあちよつとね」

ハウルの準備はもう終わっていたから、マイケルが帽子をかぶって、二人は扉の取っ手をキングズベリーに合わせて外へ出た。今日は雪は降っていなかった。けれど辺りはまだ白く、当分の間冬が終わらないことを見せ付けてくれていた。きんつとした空気が耳の中から入ってきて、ぶるつと全身に奮えが回った。厚手のコートを着込んでいるというのに、それでも寒さは容赦なく襲ってくる。

「ハウルさん、寒くないんですか」

明らかにマイケルよりも薄手だとわかる上着を一枚だけ羽織っ

ただの格好で。寒さにも暑さにも、人一倍うるさい人だと思っ
ていたのだけれど。

「ああ。寒さはね。あまり感じないんだ」

「……そうですか」

では他の何なら感じるというのか、それが気になって尋ねたくて、けれど結局その問いを口に出せはしなかった。出せるほど何もわからない子供でも、ハウルのことがわからないわけでもなかった。

ハウルさんって一体どんな人なのといつかマースに聞かれたことがあった。金髪の可愛らしい女の子。マイケルにとっては唯一無二のかけがえのない存在。特別に美人でも料理が上手いわけでもすごい魔法が使えるわけでもない、どこにでもいそうな女の子。けれどマースはこの世にたった一人しかいないくて、だからマイケルの恋人もたった一人しか存在してはいない。

……どんな人って見た通りの人だよ魔法の腕はすごいのに他は全然ダメダメな人。だけど今ならきつこう言う。ものすごく繊細な人だよ。そうして優しい人。

馬車に乗ればすぐの距離を、二人は黙って歩いていた。ハウルの足は特別速くもなく、二歩程後ろの位置を保ってマイケルは後を付いて行った。ハウルはいつも、この白いばかりの道を一人で歩いているのかなと考えると、胸の奥がきゅつと締め付けられて痛くなった。それはどれほどの苦痛を強いる行為で、この人はだれにも涙一つ見せずに。

強いのか弱いのかわからない背中をしていた。ハウルさん。あんまり我慢ばかりしていると。壊れてしまいうでハウルさん。人々の手によって雪かきのされた道には足跡なんてつくはずもなく、歩いてきた印を残さずに二人は郊外の病院へと辿り着いた。町外れだというのに辺り一帯には雪がなくて、これは魔法を

使ったのかなとマイケルは思った。人の手でやるにはあまりに重労働すぎる。ハウルかなと一瞬考えたが、それも違うような気がした。いつだったか雪は好きだというようなことを言っていたから。好きなら多分ハウルは消さない。妥協も知ってはいるけれど、それでも自分を貫きたい人だろうから。

今のハウルはどっちでもなくて、それがマイケルには不安だった。どっちつかずな、揺れて、揺れて。

もうすでに顔見知りになった看護婦に挨拶をして、人とすれ違いながら真っ直ぐに病室へと進んでいく。ハウルの足取りには迷いが無くて、それが逆に自分を奮い立たせているようでもあった。マイケルの思い過ぎなのだろうか。機敏になりすぎているのかもしれない。

扉を開けると、消毒薬の匂いが鼻についた。この匂いは好きではない。病人のいる部屋なのだと空気全体が存在を示しているようで気に食わない。病人。そうじゃない。そんなものじゃない。

言葉も無しにハウルは部屋へ入っていくと、枕を背にベッドに座り、窓の外を見ているようでその実何も見ていないであろうソフィーの隣に立った。立つだけで、言葉は無い。

ソフィーはハウルに顔を向けようとせず、きつとそんなことには気づかずに、微動だにしなかった。瞳はどこを向いているのかわからない。そこには一体何が映っている？ 今の彼女には、どんな世界が広がっている？

「――ソフィー」

壊れ物に触れるかのように。そつと、頬に伸ばされた指。

……ああ。ハウルさん、ソフィーさん、ああ！

その光景はあまりに寂しすぎて、微笑みを浮かべるハウルの姿が痛くて、マイケルは背中を壁に当てて両手で顔を押しつぶした。見てはいけない二人がそこにいた。どうして。ハウルのあんな消

えそうな微笑なんて知らない。ああ、どうして、どうして二人が。何故世界はこうも二人に辛すぎる。平穏な時間なんてそこらにくらでも転がっているようなものを、あえて二人からは切り取ろうとしているかのような、神の悪意を感じるこの瞬間が。痛くて。ただ、目を開けることもできずに。

「マイケル。来なさい」

遠くから声が聞こえて、手を離して、光りが目に痛くて、それでもマイケルは足を動かし彼らの元へと歩いて行つた。

この空間にいることが苦痛だった。自分がここに存在している者だとは思えなかった。恐らく、ここに、ソフィーの傍に居ることが許されるのはハウルだけなのだ。

「……ハウルさん」

「何て顔してるんだい、マイケル」

泣けないあなたの代わりなんですよというのはおこがましいとわかっていた。それでも世界の中の涙の量はきつと変わらないから、ハウルが流さない分だけだが、自分が、流しているのかもしれない。思うだけなら勝手ではないだろうか。

「今から魔法を使う。おまえにも手伝ってほしいんだ」

魔法。ああ、そういえば自分達は魔法使いだったのだとそんな根本的なことを瞬間的に忘れていた自分がいた。呆れた。けれどそんなこととは関係のない生活を、この所ずつと送っていたものだから。最後に課題をこなしたのは何時だろう。もうずいぶんと昔のことのようだった。

「でも、魔法って、ハウルさん。僕が大した魔法も使えないことなんて知ってるでしょう？」

何せ師匠なのだから。魔法の「ま」の字すら知らなかった幼い自分に、まだまだ半人前とはいえ、ここまでの知識を教えてください。たのはハウルだ。そうしてカルシファア。

「ああ。だからおまえに使ってもらうわけじゃなくて、魔法的になつてもらいたいんだ。具体的に言うと、おまえを犬の姿に変えるから、せいぜい犬らしく振舞ってもらいたい」

「……犬、ですか」

ハウルが冗談を言っていないことなんてわかつている。けれどその言葉だけではハウルの意図がどこにあるかなんてわからなかった。それは日常においてもそうではあったが。

意思の疎通というのは難しく、言葉が多すぎて、足りなすぎても、何の過不足一つであつても明確に想いも気持ちも伝わらないのだから。厄介なもので、けれどだからこそ、その分も大事なものののだろうか。まだたつたの十数年しかいないマイケルにはわからない。人生なんて。そんなもの。

「ウェールズに行つてね、色々話を聞いていた。ソフィーと同じようなケースに陥つた人の話なんかをね。それをそっくりそのままやったところで良くなるかなんてわからないし、もしかしたら悪化する可能性だつて無くはないけど。でもこれ以上悪化のしようもないと思つてね」

さらつとそんなことを言うハウルは、自分で言つた言葉に傷つくことはないのだろうかと少し気にかかった。それを口に出すのは躊躇われたから、マイケルは黙つてハウルの言葉を聞いていた。

「その人もやつぱり、頭をぶつけて今のソフィーのようになったらしくてね。何の反応も返してはくれなかったそうだよ。でもある日、ふと思つて家族がチリソースを食べさせてみたら、とたんに言葉を話せるようになったらしい」

その時程チリソースに感謝したことはなかっただろうねえと、ハウルはおどけたように呟いた。そうしている様子は普段のハウルのようで、同時にとても痛々しい。

「どうしてチリソースを食べさせたかわかるかい？」

「……何か、思い出の食べ物だったりしたんですか？」

「いや、そうじゃないんだ」

優しい指で、乱れていたソフィーの髪を整えながら答えた。

「その人は辛い食べ物は一切食べられなかったみたいだね。だからふと思つて、大嫌いなチリソースを食べさせてみたんだよ。そうしたらどんな反応を返してくるのかつて。味覚はそのままだつたようで、今まで一言も言葉を発しなかったその人は言つたつてね。『水をちょうだい』つて」

何かのきっかけが必要なんだとハウルは言つた。多分、何か一つでもきっかけがあれば、この状況は変わるはずなんだと。それがソフィーの場合は犬だといひんだけだなあと。

「ソフィーさん、犬、嫌いでしたっけ？」

思い出そうとしても、ソフィーがどこかの犬と一緒にいる場面は思い出せなかつた。嫌いだから傍に寄ろうとしなかつたのだろうか。いや、けれど……そう、ずっと前に、犬が居たことがなかつただろうか？

「でも、あの、パーシヴァル！ あれつて犬ではありませんでしたけど……でも犬の姿をしていたし。ソフィーさん、自分から連れてきてませんでしたか？」

「ああ。だから僕も不思議には思つてただけだね。何でかは知らないけど、それでもやつぱり犬は嫌いなようだよ」

思い出したのか、ハウルはくすつと笑みをもらした。

「前に、二人で散歩をしていた時にね。向こうから野良犬が走つてきたんだけど……すごかつたよ。真っ青になつて抱きついてきてくれたんだから。日頃からああだといひのになあつて——」

言葉は途中で消えて、ハウルは手で口元を押さえた。話したことを後悔したのか、それとももつと違うものなのか、マイケルにはわからない。ただ居心地は悪くて、そわそわと身体を小刻みに

震わせた。

「……まあ、そんなわけだからさ。やらないよりは何事もいいだろう？ 変化の魔法をかけるけど、いいかな」

「はい」

わずかでも、どんな可能性にでもすがりたいのは自分も同じだったから、拒否する理由なんてなかった。ハウルだってマイケルの返事は聞かずともわかっている。「ありがとう」と、らしくもない声音で言って、その口は次の瞬間呪文の詠唱に入った。

ああ、気持ちのいい力のうねりを感じると、マイケルは瞳を開じてその波に意識を合わせた。こうすることで、多少でもハウルの気が楽になればいいと思いつながら。そんなことをせずとも、ハウルは簡単に魔法を完成させられるとわかっている。それでも、

身体中に溜まった熱が熱くなり、その形を変え、別の物を構成していく。魔法で何もかもができるわけではない。万能の力ではない。魔法にも法則があり、それは世の中の枠から出てはいけな

い種類のものである。身体が震えて、次に目を開けた時、見える物が変わっていた。いや、高さが違うからそう思えるのだと、数秒してから気がついた。色はいつも通りだ。鼻が特別利くようになったとも思えない。姿を変えるのが目的なのだから、そこまで力を使っているのではないだろう。

「名前は忘れたけど、大型犬にしておいた。気分はどう？ マイケル？」

「……これでいい気分がしてたら、それはちよつと、僕がおかしいってことじゃないですか」

困惑したような弟子の言葉にハウルは笑った。確かにそれはそうだなと。そんな答えを期待して声をかけたわけではなかったのだけれど。

「じゃあ、頼むよ。ソフィーを脅かしてやって」

ふさふさの毛に覆われた背中をぼんぼんと軽く叩いてやると、マイケルは若干困ったような雰囲気漂わせてから、よろよろと歩きにくそうな四足歩行で進んで行った。

——あなたが犬を嫌いなことは知ってるから。こんなことはしたくないんだでもごめんね。

自分から言い出しておきながら、けれど罪悪感を感じることも確かだったから、精一杯心の中で謝っておいた。その声が彼女に聞こえるはずもないなんてことはもちろん承知の上で。

少しの期待を覚えると同時に、今までどんな魔法を使っても何をしてダメだったのだからと、そう思う気持ちも同じ位置に存在しているのが厄介だった。では何のために動いているのだろう。ただ止まっているのが怖いだけなのかもしれない。

のそのそと歩いて行ったマイケルは、勢いをつけて後ろ足で立つと、前足をぼすつと、ソフィーの目の前の掛け布団の上に下ろした。その瞬間、ソフィーの身体が確かにびくつと一瞬震えたのを、ハウルは見逃さなかった。

「……ソフィー？」

声は小さすぎて、ささやきにもならなかった。

どこを見ているのかわからなかった瞳が、目の前の、犬の姿をしたマイケルに向けられる。「マイケル、吼えろ」と後ろから指図すれば、犬の声が部屋中に響き渡る。身体は確かに震えていた。

反応している。今までだれが何を言っても、何の反応も返してはこなかったソフィーが！ それだけでハウルの胸の鼓動は早くなった。この、ソフィーが戻してくれた心臓が。

「マイケル！」

ハウルの声に呼応するかのようにマイケルが吼える。慣れてきたのか、先ほどよりもずいぶんと犬らしい声になっていた。こい

つは犬になる素質があるんじゃないのかなんてくだらないことを考えるのは、うるさい心臓から少しでも意識を離そうとしているため。子供のままの心臓は、特に鼓動が早すぎて痛くなる。

唸り、吼えて、大きな身体を揺らすマイケルに、ソフィーの双眸もまた揺れていた。光が揺れ、唇が震え。

「あ……や、ヤダ……」

心臓は。

跳ねて、跳ねて、跳ねて。

「ソフィー!？」

身体は反射神経で動いていた。肩を掴んで、その瞳に自分を映す。夢ではないと。現実なのだと。確かめたくてその肩を揺さぶった。声を、声を、声を！ ああソフィー、あんたの声を！

「ソフィー！ ソフィー、ソフィー！ ねえ、しゃべれるの？ しやべれるんだね？ ねえソフィー！」

感情は言葉にはならなくて、ただハウルの視界は明るくなつて、そこはただソフィーの姿だけで占められた。「ソフィーさん！」マイケルが叫んでベッドの上に飛び乗ってくる。甲高い悲鳴が辺りに響いた。

「ヤダ……犬、嫌い。や…っ」

「ああソフィー、大丈夫。これはマイケルだから！ 魔法で姿を変えてるだけで……ああうん、それよりも解いた方が早いね。マイケルが犬の姿を気に入る前にさ！」

指鳴り一つでマイケルの姿は元に戻った。何の言葉もなしのいきなりな変化に、身体バランスが付いていかずマイケルはベッドから転がり落ちた。弟子が痛がる様子なんて目もくれず、ハウルはただソフィーの身体を抱きしめた。腕の中に閉じ込めて、その温かさを存分に味わった。

「ああソフィー、ソフィー！ 良かった、良かった……僕はもう

てつきりあんたの声が二度と聞けないものだとはっかり！ しやべれるんだ、そうなんだ！ ねえしゃべって、ソフィー？」

きつく抱きしめていた腕を解いて、けれど背中に戻したまま、その顔を覗き込んだ。戸惑ったような双眸の色を見て首をかしげる。かしげて——思い当たった一つの不安に、身体の体温は急速に冷めていった。

「……ソフィー？」

ねえ、しゃべって。名前を呼んど。

声ではなく、視線で伝える。貫きそうなほどのこの眼差しで。

小さな唇は震えていた。

「
あ
な
た、
だ
れ
」

「早く雪が止めばいいのにね」

と、彼は言った。窓の外の景色に視線をやったその顔は穏やかな笑みを刻んでいて、彼が本心の部分で何を考えているのか思っているのか、見ている者にはわからなかった。

境界線があるみたい、と彼女は思う。彼と人との間には線が引いてあって、そこから内側に入れる人間とそうではない者とを明確に区別しているかのような。ボーダーライン。内側に入ることできた人間は、一体どんな人物なのだろう。それはきつと、彼の言う『彼女』なのだろうと、そんな考えに至るまでにその時間は必要ではなかった。所詮は他人事だった。

「雪は好き？」

端正な顔立ちが急にくるっと振り返って、それだけで身体は緊張に強張った。何度見ても、何度声を交わしても、それでも彼に慣れることはない。まるで身体が彼に対する慣れというものを知らないかのようなだった。

「……考えたことないわ」

はいでもいいえでもない答えを返す自分は、それだけでずるい存在のような気がした。彼は気にしていないのか、「そっか」と小さく言うだけだった。

「一面の雪景色とか、本当に綺麗なんだよ」

今度見せてあげるよ、と。

曖昧な笑顔しか返すことができなかった。浮かぶ言葉はなかったし、嬉しいとも迷惑だとも、どっちの感情もなかった。気を使わしてしまっているようで、それが申し訳なかった。

訪れる沈黙。どうしようもなく肌に痛い。

同じ部屋にすることが、ただ、苦痛以外の何物でもなかった。

「……あ、あの、ねえ」

自分から声をかけたのは、もしかしたら、初めてだったのかもしれない。再び窓の外を向いていた彼は驚いたように振り返って、口元に小さな笑みを浮かべた。

「ハウル、だよ」

「……ハウルさん」

彼が、笑顔の中にも苦しそうな、自嘲めいたものを見せたのは気のせいではなかったのかもしれない。『彼女』は、こんな風に彼を呼びはしなかったのだろうか。

「あの、忙しいでしょう？ わたしもう、今日はいいいから……」

「僕が忙しいなんて、だれが言ってたの？」

「色んな人が……王室付き魔法使いだって……」

彼が魔法を使っているところを、彼女は今まで見たことはなかった。だから、彼が本当にそれほどの魔法使いなのかもわからない。そもそも魔法使いというのは、一体どんな存在だったのだろうか？ もうそれすらもあやふやだった。

「仕事なら平気だよ。同僚に代わってもらってるからね」

それは自分の所為なのだろうか。

自分が、ここで、こうして、ベッドの住人だから。

「……ねえ、ハウルさん」

知らない人だというのに、それでも罪悪感を覚える心は確かに存在していて、それが苦しかった。何もしてほしくなかった。

わたしのためなんかに。何も。何もしなくていいから。お願いだからあなたはあなたの仕事を全うして下さいと。

言いたい言葉は声にはならない。それは言っただけじゃないことだとわかっていった。心配して想ってくれる気持ちを踏みにじるものだとかわかっていった。けれどそれなら自分の気持ちはどこに行っているのだろうか、そんなことを彼女は思う。

「あの、仕事、優先してくれて構わないから——」
お願いだからわたしに構わないで。

「ソフィー」

それがだれの名前なのかも彼女にはわからない。自分の名前だと、そういくら教えてもらったところで、感情は心はついていかない。他人が呼ばれているような感覚。それは目覚めてからずっとこの身について回るものだった。

一生なのかと考えるだけで身体が冷える。

「僕は、あんた以上に、優先できるものなんて無いんだよ」

「わたしの」

どこが良かったのかと、問いかけようとした言葉は胸の奥に消えた。聞いてもきつと無意味なのだ。それは。自分は『ソフィー』ではない。『ソフィー』は記憶を失う前の自分だ。

「ねえ」

声を聞くだけで切なくなる。

「抱きしめてもいい？」

同時に腕は伸びていた。背中に回され、直に伝わる体温は熱かった。圧迫される感覚。想いに押しつぶされそうだった。彼がだれを抱きしめているのかわからない。自分でないことは確かだった。怖かった。

「……嫌っ」

身をよじるだけの小さな抵抗。声を上げるのが精一杯だった。身動きすらできない。彼は大きな力を込めているとも思えないのに、そこには歴然とした男女の力の差が存在していた。

不安だらけで体中は悲鳴を上げる。

至近距離にある顔は、知らない他人のものだった。

「……ごめん。怖がらせたね」

腕は解かれた。熱が遠ざかり、一気に冷めたようにすら感じ

られる身体を自分で抱きしめた。震えていることに気づいて、何だか泣きそうになった。

一体何に対して涙がこぼれそうになっているのかすらわからない。今は自分が一番遠い他人だった。何も掴み取れない自分が情けなくて、ソフィーはただ泣いた。泣くという意識もなく、涙はとめどなく溢れ流れていた。

「……ソフィー」

そんな名前と呼ばないでと言いたかった。わたしはそんな名前ではない。わたしに名前なんてきつと無い。

伸ばされる腕はなかった。もし彼女が顔を上げていれば、泣きそうな顔をしている彼を見たことになった。けれど彼女は俯き、目を閉じて、何も見ようとはしていなかった。だから互いに、相手がどんな顔をしているのか、知る術はなかった。

「——ごめんね」

どうして謝るの。

謝るのはわたしではないの。

「あなたは記憶喪失なんですよ」

そう医者に告げられたのは、それはもうだいぶ昔のことのようだった。実際の時間よりも、ずっとずっと遠い過去の出来事のような。

目覚めた瞬間のことを、彼女はよく覚えていない。今から思うに、あの時はずいぶん錯乱していたのだろう。ようやく少し

の正気を取り戻した時には、隣には金髪の青年がいた。

「……初めましてって、言うべきなのかな」

君の夫なんだと彼は言った。まだ新婚なんだよと。覚えてないだろうけど僕は君のことがとても好きで……君も、僕を好いてくれてたと思うんだけど。

「……夫？」

頭の中は空白で、もちろんそこには、自分が結婚していたなどという事実はどこにも見当たらなかった。この人と自分が結婚？ この、金髪の、端正な顔立ちの人と？

「うん。わからない？」

浮かぶものは何もなかった。あるのはただ戸惑いだけで、心のどこからか、この人に対する情なんてものは沸いてはこなかった。

彼はただの他人で、道ですれ違えばそれだけで終わるような一瞬の相手が、けれど自分の夫だというこの現実は何だろう。夢だったらしいのにと逃避したくなる。けれどどこへ逃げろというのだろう。世界のどこだってそこは知らない場所で、自分に相応しい、受け入れてくれる所なんてどこもないのかもしれない。

「……わたしと、あなたがって……」

嘘だという思いは顔に出てしまったのだろう。

「本当だよ」

一歩近づき、笑顔の裏にも真摯な物を潜ませて、彼は言った。

「僕はハウル。魔法使いだよ。君とはまあ、色々なことが重なって出会って……僕はそれも必然だったんじゃないのかなんて思って……ああ、うん、だから」

彼は言葉に迷っているようだった。言われる言葉は全てが初耳のことで、彼女はそれを吸収することすらできなかった。言

葉は耳の上を滑っていくだけで、どこか遠い世界のできごとのようだった。

「……何を言っても、君はわからないんだろうけど」

まるでそれは、責められているような言葉だった。彼女はわずかに顔をゆがめる。どうしてそんなことを言うのだろう。わからない自分が、まるで罪を犯しているような気持ち。

「ねえ、ソフィー」

どこかで聞いたことのある名前だと思い、先ほどの医者が、自分に対して言っていた名前だったような気がすると思い出す。

——それは、だれの名前？

「君の名前だよ。ソフィー。ソフィー……ジェンキンス」

ジェンキンスは僕の苗字なんだよ、と。

ソフィー・ジェンキンス。ソフィー・ジェンキンス。ソフィー・ジェンキンス。心の中で何度も呟く。他人の名前としか思えなかった。今までの人生で、この名前を呼ばれていたとは思えない。

それはだれか違う人の名前ではないの。

わたしは。そんな人では、無い。

「わからない？」

緩く首を振るしかできなかった。動きはとても緩慢で、けれどそれが彼女の精一杯だった。

「……どうしてだろうなあ」

疲れきったように、彼はベッドにぼすんと腰を下ろした。スプリングが揺れ、一気に距離が近くなり、彼女は怯えた。それが彼に対するものなのかこの空間か、それとも何もわからない自分自身なのか、全ては霧の中に包まれているようだった。

明け方が近いとはいえまだまだ辺りは暗く、部屋は息遣いが感じられるかと思うほどには狭く感じられた。閉鎖的な、日常

から切り取られた空間だった。

せめて少しでも距離を空けようとしたけれど、リハビリの必要な彼女の身体は大して動かなかった。枕を背にして座るだけでも、看護婦の手を必要としたこの身体。とくに後遺症などとは残らず大した怪我でもないのだけれど、二ヶ月近くベッドの住人だったために身体は弱くなっている。一人では歩くことはおろか立つことも当分はできないのだと医師から説明されたことなんて、彼女の頭に残っているはずはなかった。

意識が戻ったと同時に記憶喪失だという、それこそ嘘だとは思えない事態を突きつけられ。けれど確かに頭の中に記憶と呼べるものは何も存在なんてしてなくて、それを事実だと認めぬわけにはいかなかった。現れた自分の夫だと名乗る見知らぬ青年。いつの間にか二人きりになり。息がつまってしかたないねえここは本当に。

「ソフィー」

伸ばされた腕に身をよじった。この距離では逃げられるはずもない。圧迫感しか感じなかった。彼の浮かべている笑みはどこまでも透き通りそうなものだというのに。

「……ちがうわ」

わたしの名前は。

「何が？ 何がちがうって？」

ソフィーなんかじゃ無い。

想いは言葉にはならず、声にはならず口からは出ないままただ蓄積されるだけ。しゃべることすら恐ろしく、何か得体の知れないものに飲み込まれてしまうかのような恐怖感だけが、ただ胸の内をすくっていた。

「ソフィー。言ってくれないとわからないよ」

近くなった腕から逃れることしか頭には無かった。

嫌だと、悲鳴すら上がらなかった。避けようとした身体のパランスが崩れたのは至極当然の成り行きで、上手く動かない身体で、とっさの反応なんて何もできるはずはなかった。状況を理解することすらできずに、目を開いたまま、気がつくとうつかるようにして彼の胸に顔が埋まっていた。回された腕。温かい身体は震えていた。

「……ソフィー、大丈夫？」

床の上だった。ベッドから落ちそうになった自分を、とっさに彼が抱きとめたのだとわかるまで、数秒の時間が必要だった。「あなたの身体は、しばらくリハビリが必要なんだからさ。お願いだから、安静にしておくれよ……。また頭をぶつけたりしたら、それこそ冗談じゃ済まないんだからさ」

懇願するような響きがそこにはあった。回された腕は解かれず、小刻みにゆれる腕から震えが彼女にも伝わってきた。彼がどれほど不安なのかそこからわかると同時に、他人としか思えない彼が、ここまで自分の安否を気にすることに困惑して、そして怖さは拭えなかった。

知らない男性に抱きしめられているのは心臓に悪い。ばくばくと鳴る心臓と同時に小さく頭も軋み始める。この軋みが大きくなれば頭が割れ、全ては終わってしまうかのような感覚。

「あの、ねえ、離して……」

触ることすら躊躇われて、そう言うことしかできなかった。眩きは弱弱しく、自分の声に、彼女は何か泣きそうになった。

「ソフィー」

背中へ回った腕に力が入った。びくんと跳ねる身体。彼はそれには気づかないのか、それとも己の震えを抑えるだけで精一杯になっているのか。抱きしめた肩に額を乗せているその様子は、まるで幼子のようなだった。

知らない人が知らない声で、自分にこんなことをしているのが信じられなかった。けれど彼にとつて自分は知人で、それどころではなく妻で、愛する者だというのが、さらに彼女を混乱させた。

「――愛してるよ」

愛の言葉はだれの耳にも届くことはなく、その場で無情に霧散するだけだった。

気がつくと浴室にこもる時間は二時間を越えていて、それでカルシファーに文句を言われる日常が戻っていた。つい最近までは何も言わなかったのと言え、カルシファーは小さな炎をけつと吐き出しながら返して来た。

「ソフィーも目を覚ましたんだろ？　いつまでもおまえを甘やかしてられるかよ。おまえの好きにさせてたら、何個温泉が空になるかわからないんだからさ」

ひどいなあと笑ってから、椅子の上にかけてあった上着を羽織った。もしかしたらカルシファーの話は誇張などない事実なのかもしれないけれど、そんなことはどうでもよかった。

まるで人事のようだった。自分良ければ全て良しとまでとは思わないが、それに近いことを考えているのも確かだった。

「カルシファー」

ハウルの散らかした本を片付けながら、マイケルが咎めるように悪魔の名前を呼んだ。その声の響きからマイケルの言いたいことを察して、ハウルは小さく微笑んだ。

「いいんだよ、マイケル。かえって気を使われる方が辛いから」
マイケルは目を見開いた。まだ年若い彼には、わからないことなのだろう。それをカルシファーはわかったから、態度を戻したのだと、ハウルは理解している。伊達に何年も契約をしていたわけではないか、と何やら複雑な気持ちになった。

「病院ですか、ハウルさん」

毎日のように出かけていくハウルを見送っているマイケルは、だから今日もハウルが出かけることは予想していたに違いない。行動を読まれているのは何だか癪で、ハウルは返事もなしに城を出た。日差しは暖かかったが、身を差す空気はまだまだ冷たく、道の両端には雪が積まっていた。

ウェールズだったら、除雪車なんかで簡単に終わっちゃうことも、ここでは人が自分達の手で全ての作業を行わなくてはならない。魔法もあるにはあるが、魔法使いの多いこのイングリに置いてさえ実践魔法の使える魔法使いの数なんて限られている。ちっぽけな人の手が自分達の全てを支えているこの世界が、自分の生まれ故郷ではないとわかってはいても愛しかった。

子供の笑い声と人々の笑顔と、太陽の光は雪に反射してきらきらとした宝石よりも眩い輝きを生む。世界の結晶。昔からの約束がそこにはある。奇跡だって何だって起きそうな、起こせそうな力を感じる。

「……樂觀的なのかな、それは」

けれどそうでも考えないとやっていけないんだと、言い訳をするように胸中で呟く。患者に不安を与えてはいけません。ゆつくりと時間をかけることが大切です。大丈夫です奥さんはきつと思ひ出しますよ大丈夫です。医者言葉。何が大丈夫なのかなんてきつと聞いてはいけないのだ。

「彼女の声が聞きたいって、願ったのは僕だよ」

けれどこんなことなら、もっと先のことまで願っておけばよかったのかもしれないとハウルは小さく苦笑した。

ねえ、だってまさか。

あんたが記憶を無くすことは思わなかったからさ。

人生は予想しないことの連続で、とくに彼女と出会ってからはそうだから、きつとこれからぞくぞくするような暮らしが待っているのだろと思うたし実際にもそうだった。しかしまさか、こんな、予想を遥かに上回るようなことが。

「……一人で寝るのが怖いって、言ったらあんたは怒るのかな」

雪かきのされた道を、郊外の病院までゆつくりと歩いていく。いつでもそうだった。行くのには多少の期待と、そしてそれよりも大きな緊張と覚悟を必要としている。怯えの色を瞳に宿した彼女が顔を伏せるだけで。心臓は容易く悲鳴を上げるから。

自分自身のそんな気持ちから目を逸らすように辺りに視線をやれば、小さな花屋の前、これまた小さな鉢植えに植えられた白い花を見つけた。白は見飽きたんだけどなあと思いつつも、足は自然と寄せられていた。

「これ、何て花だい？」

店の前で雪かきをしていた女性が店員だろうと思って声をかければ、それは間違っていないようだった。汗をぬぐいながら腰を上げた中年の女性は、にこやかな笑顔で口を開いた。

「スノードロップですよ。この季節には売れる花なんてちっともなくってね。唯一あるのはこれぐらいですよ。この時期に咲く珍しい花なんです」

「へえ、そっか」

そういえば自分たちも花屋だということを忘れていた。花屋を休業にしているから、もう二月以上が経過している。季節はあま

り問題ではない。少し魔法で手助けすればいくらだって花なんて咲かせられる。店を切り盛りしていた彼女が今は家にいないから。だから。

「それ、一つもらえるかな」

自然と口はそう言っていた。もしかしたら、その花に目を留めた時点で、心はそう決まっていたのかもしれない。他に花を贈る相手なんていやしないのだから。

「ありがとうございます！ 恋人にですか？」

「うん。花が好きだからね」

花の手入れをしている時は本当に楽しそうだったなと思う。す。ちよつとした気まぐれで始めた店だというのに、彼女は真剣なものだった。いつの間にか珍しい花を取り扱う店は有名になっていて、王室で侍女から話を聞いた時には驚いた。まさかそれは家なんだとも言えずに笑いかみ殺すのに精一杯だった。

お代を払って小さな鉢植えを受け取った。そこではスノードロップが、可憐な姿を見せていた。

「花言葉は、希望って言うんですよ！」

後ろからかけられた声に、ハウルは笑顔を返した。歩き出しながら、ただの偶然にですら感謝したい気持ちだった。

ああ、だって、希望だなんて！

「……今の僕に、何てびったりなんだろうね」

わずかな希望にですらしがみつきたい自分に。のんびりとでも歩は進み、花を揺らしながら、もう見飽きるほどになった建物は目に映る距離になっていた。

軽くノックしてから、返事を待たずにドアを開けた。ソフィ

「は決して返事をしてくれなかった。それほど嫌がられているのかと始めはショックを受けたが、彼女がだれに対してもそんな態度なのを知って少し安心した。それに彼女は拒否反応を起こしているのではなく、ただ戸惑っているだけのように見えた。」

「おはよう、ソフィー。今日はどうだい？」
枕を背に起き上がっていたソフィーは、本を読んでいたようだった。珍しいその姿に、ハウルはおや？ と片眉を上げる。ソフィーはハウルに顔を向けると、困ったように曖昧な微笑を浮かべた。

「その本、どうしたの？」

近づいて行つて尋ねれば、ソフィーはさつと本を布団の中に隠した。見られたくないのかと思ひ、ハウルは苦笑する。

「あの……レティーが、持ってきてくれて」

「ああ、そっか。ずっと病室にいと暇だろうしね。僕も何か持つてこようか？ 家に本はたくさんあるんだ。探せば君も楽しめるような物があるだろうし」

数秒の沈黙の後、案の定、ソフィーはふるふると首を横にふつた。わかつていたことだとはいえ、拒否されたことが少し辛かった。レティーの好意は受け入れても、自分のそれはいらない物なのかと、思わず彼女に詰め寄りたくなるのを必死に堪えた。

知らない内に手にぎゅつと力を込めていて、そこにあった物に気がついた。先ほど買った小さな花。

「……そうだ、これ」

驚かさないうようにとゆっくり差し出した腕は、自分でも驚くほどには弱弱しく、それ程までに彼女に拒否されることを恐れているのかと、自分自身を嘲つてしまう程だった。

「来る途中の花屋で買ったんだ。スノードロップって言うんだ

ってさ。今の季節に咲くなんて珍しいなあと思って。ああ、気に入らなかつたらいいんだけどべつに持ち帰るから。あの」

緊張を紛らわすように口を動かすしかない自分を馬鹿だと思つた。どうして自分の妻に花を渡すだけのことがこんなにも心臓に負担をもたらすのだろう。彼女の眉の動きの一つ一つにすら感情は大きく左右されて。

女性の扱いなんてもっと楽で簡単なものだと思つていた。甘い言葉を吐けばそれだけで済むものだ。現実はそのような容易いものではなかつた。自分もそんな器用な人間ではない。今になつてそれを思い知る。

ソフィーの手がゆっくりと伸びて、壊れ物を扱うかのような仕草で植木鉢を受け取つた時も、ハウルは夢のような感覚でそれを眺めていた。

「……ありがとう」

口から出た感謝の言葉。小さく浮かんた笑顔に胸がつまつた。ありがとうなんて。何ヶ月ぶりに言われた言葉だろうか。言うのはあんたじゃなくて僕なんだありがとうと言いたかつた。受け取つてくれて。その小さな笑顔だけでも僕は当分生きていくからと。

「迷惑じゃなかつた？」

ほつとした自分は、多分とろけるような笑顔を浮かべていたはずだ。彼女にしか見せないその笑顔。ううん、と軽く首をふつた様子を見るだけで、信じることも愚かではないのかもしれないと思える自分がいた。

「ソフィー、出かけよう！」

自分の中で何かが弾けた。触れるのが怖いと、そう思つていた自分は消し飛んだ。怯える必要はないのだ。だって彼女は、紛れもない自分の奥さんなのだから！

「え？ え、あの、出かけるって……」

「ずっと部屋にこもってるのも退屈だろう？ それに身体にも良くないさ、そんなの」

羽織っていた自分の上着をソフィーの背にかけて、その顔を至近距離で見つめながらにこりと微笑んだ。驚いた時に丸くなる目も彼の知っているそのままのもので、変わらないものがここにありとそう信じたくなった。

「待って！ 待って、わたし、まだ、上手く歩けなくて……っ」

必死に言う彼女に、何だそんなこととハウルは軽く笑った。ハウルとしては、少しでも安心させられればと、そう思っても笑みだったというのに、まるでソフィーは奇人の行動を見るかのような怯えた視線を返してくるだけだった。

「大丈夫だから」

僕を信じてと目で伝えた。

ソフィーにとつて自分は他人だということはわかっている。

記憶にない人物。今まで共にした時間など、彼女の中では消去され、そこは白紙になってしまった。

けれどそれは嘘だ。まがい物だ。今まで過ごした時間さやき合った愛の言葉は。あれは、まだこの世界に息づいているはずだ。――僕が忘れない限り。

「待って、待って！ お願……っ！」

まるで悪人に連れ去られるようだなあとハウルは苦笑した。今のソフィーにはそれと似たようなものなのかもしれないと、そう思うと少し自分が滑稽に思えた。一人でムキになってバカになって、それはどれだけか愚かに見える光景なのかもしれない。それでもいい。

「ちよっと大人しくしてよ」

まあ無理かなと呟きながら、喚くソフィーを横抱きに抱き上

げた。窓に向かつて足を動かしながら、そういえばソフィーが目覚めてから、こんなに言葉を聞いたのは初めてかもしれないと気がついた。嬉しいのか悲しいのか、自分でもよくわからなかった。

両手は塞がっていたから、少し力を使って窓を開けた。風は無かったが、それでも窓一枚隔っていた外の冷気は容赦なく入り込んできた。身体はぶるりと震えたが、ハウルはこの寒さが嫌いではなかった。冷たい空気は体内を浄化してくれるような気さえする。

腕に抱いた、久しぶりに感じる温もりが、自分とは違う意味で震えているのがわかった。怯える様に苦笑して、もつと信じてくれてもいいのにと、勝手だとはわかっていてもそう思うのは止められなくて、そんな思いを振り払うかのように足をかけた。

「ねえ、待って！」

「待ってなんかいられないよ」

まだウェールズにいた頃、ただ人とは違った物が見えるだけだった頃、ここから落ちたら死ぬのかななんてことを、煙草をふかしながら想像していたことがあった。そんなことにはならない。そんなことには。今の、今の僕なら！

小さな、甲高い悲鳴。一瞬の浮遊感。後はもう力は安定して、わずかにも揺れを感じることはなかった。

「やっぱり見るなら、一面の雪景色の方がいいね」

人のいる、人の手の入ったそれもいけれど、今は何となく真つ白な物が、キレイな物が見たい気分だった。見たいのと同じなのと、どちらの比重がより大きいのだろう。

「ちよっと跳ぶね」

これ以上ないと言うほど目を見開き、驚愕の色に染め上げて

いるソフィーに優しく微笑んでから、小さく呪文を呟いた。基本構造は城の扉と同じ。空間と空間の間を切り取ってまた繋げる。長時間それを続けようとすれば、それはさすがにカルシファアの力が必要となったが、一瞬の転移には事足りた。

一瞬のうねり。いくつもの景色が混ざり溶け合い、それらはまた離れあるべき所へと収まっていく。頬を弄る一瞬の風。自然と瞑っていた目を開ければ、そこは何の音も存在しない場所だった。自分達の息遣いと鼓動の音だけが全てだった。太陽の光りに反射したそれが目に痛い。ダイヤモンドを百個集めても、きつとこれには叶わない。どこまで雪が続いているのか、どこになったら終わるのか、そんなことはわからなかった。

世界は一つなのだとわかる光景がそこにはあった。

気がつくともソフィーの瞳から恐怖の色は消えていて、ただ一面に広がる、世界中を多い尽くしたような雪を、ただ眺めてそっと息をもらしていた。

「さっきは怖かったかい？ いきなりでごめんよ」

本当に謝りたいわけではなくて、まるで雪に魅了されてしまったかのように動かない彼女の意識を、自分に向かせたいだけだった。

ゆっくりと、顔が自分の方に向けられて、それだけでハウルは嬉しくなった。浮かんでいるのは驚きと戸惑いで、それはいつも見ている彼女の表情のようで、けれどそれとは違うもののだとはっきりわかっていった。

「僕が王室付き魔法使いだって、知ってたんだろう？」

意地悪をしたつもりはない。ただ、説明をするのが面倒で、それよりも動いてしまった方が簡単だろうと思ってしまっただけだった。

「……魔法、こんなことに使うの？」

信じられないと、その瞳も声音も如実に語っていた。きつとそれは、記憶を無くす前のソフィーでもそうだったのだろう。何でもかんでも魔法で片付けようとするのはいけないと、母親のように言っていたから。思い出して胸の奥が切なくなつた。そんなの、思春期の女の子だけの特権だと思っていたのに。

「今使わずに、いつ使えつて言うのさ？」

「だって、仕事とかで……」

「仕事でいくら魔法を使つたって、あんたの喜ぶ顔なんて見れないじゃないか」

自分は至極当然のことを言っただけなのに、ソフィーは何を言われたのかわからないような、まるで異国の言葉を引きなりかけられたかのような、そんなぼかんとした表情になった。自分と彼女の間に差があることはわかっていった。理解していた。けれどこんな時には、それをまじまじと形にされてしまったようで、少し辛かった。

「僕はあるが喜んでくれるんなら何だってするつもりでいるんだよ。この程度の魔法を使って、それであんたが喜んでくれるのなら、それぐらいお安い御用さ」

それをまたあんたは、魔力の無駄遣いと叱るのだろうか。以前の彼女なら。叱られたいと心底から思った。前のように、前のように。腰に手を当てながら説教をして、でも最後には困ったように笑って、でもありがとうと。

そんな夢を見る自分は、ただ愚かなだけだとわかっている。子供ではないのだから。現実を見ると頭の隅から声が響く。

ソフィーは怒りはしなかった。そんなこと、きつと頭の片隅にも浮かばなかったに違いない。ただ戸惑いだけを顔に浮かべて、困ったようにハウルを見つめていた。

「……わたしが、喜ぶなら？」

「喜んでくれないの、ソフィー？」

無邪気さを装いながらも、心臓はうるさく高鳴っていた。懇願の響きが混じらないように、気をつけるのには骨がいった。演技なんてし慣れているはずだというのに、どうしてこんな時ばかりそれは発揮されてはくれないのだろう。舌打ちがもれそうだった。

「……あの、嫌、だった？」

不安は簡単に広がっていく。何がきっかけだったのかなんて、本人ですらわからない。自分はただけ情け無い表情をしていたのだろう。気がつくとき、目を覚ましてから、初めて見たような、呆れているのか笑っているのか、よくわからない表情をしているソフィーがいた。

「——あなたって、勝手なのか何なのか、よくわからないわ、ハウルさん」

「ハウル」

一転してはつきりとした口調だった。考えるよりも先に口は動いていた。ずっと思っていたこと。それはいくらソフィー相手でも——いや、だからこそ、譲れない部分だった。

「さん付けなんてしなくていいよ。ハウルでいいから。そう呼んで」

「……でも、だって、年上の人に……」

「そんなの」

夫婦なのに、年上も何も関係ないだろうと。そう言いかけて止めた。夫婦だと、それを持ち出すのは、彼女にはまだ辛いことだろうと思ったから。

「——僕が、そう呼んでほしいんだ。だから」

お願い。

だってハウルさんだなんて。どうしてそんな他人行儀に。

今の彼女にとって、自分は確かに他人なのかもしれない。けれど僕にとつてはそうではないんだと、それは身勝手な思いなのかもしれないけれど。今だって耳の奥には、怒鳴りつけてくる声が潜んでいるというのに。

「ソフィー……お願いだから」

きつと今の自分は、泣きそうな子供の顔をしているに違い無い。それはどんなに見つとも無いことだろう。それでも良かった。外見なんて、そんなもの取り繕っている余裕なんてどこにも無い。そんなものは後でいい、後で。

涙なんて、肝心などんな時にでさえ出てこないものののに、目じりに浮かぶものがあつた。弱い。何て。何て自分は。ああ、僕は！

「……ハウ、ル……？」

戸惑いを存分に含んだ声に、笑いかけることが精一杯だった。呼ばれるだけで。それだけで。それは一体どれだけぶりのことなのだろう。

何も現状なんて変わってはいない。それでも目の奥は熱くなる。涙は出なかった。代わりに、抱く腕に力をこめた。

——希望なんて儚い言葉、信じる年ではないけれど、それもいいのかもしれないなんて、思ってしまったような瞬間。

「ねえ、すごくキレイだと思わない？」

本当は景色なんてどうでも良かった。二人で居られるだけで。

視線を合わせて会話が出来るだけで、それだけで。

今自分がどんな表情をしているのか、ハウルはわからなかった。けれど見つめてくるソフィーが、まるで初めて何かを見るかのような、そんなぼかんとした表情から、吹き出しそうな小さな笑いに変わっていくのを、信じられないような気持ちで眺めていた。

「……子供みたい」

そんな表情をしていたのだろうか。

子供みたいだなんてそんな、僕はあんたよりも九つも年上で、でもきっと子供のように、ただ一つのことだけをずっとずっと望んでいるんだ。

「……ねえ、ソフイー」

思い出して、思い出して、思い出して。

口にはしない。言葉には出さない。それは彼女を追い詰める。壊れてしまう。だから言わない。心の中で、そこだけでただ一人叫んでいる。

今はただ。

この、笑顔だけで。

世界は丸い。

この道も、

きつとあんたに繋がってる。

「本を読むのはね、好きなんだけど」

でも、毎日毎日こう読書ばかりだと、ちょっと飽きるわねとソフィーは言った。見慣れた、枕を背にして起き上がっている体勢で。入ってきたハウルを見て、軽く挨拶をしてからすぐの言葉だった。

「こないだ天気なんだから。散歩ぐらいしたいと思うわ」

空には、春と夏とも違う、冬特有のびんと空気が張り詰めたような、澄み切った青空が広がっていた。

「いつもよりは暖かいけど、でもこの季節だからね。散歩日和とは言えないと思うよ？」

「でも、ずっと病室に閉じこもってるよりはマシだわ」

葉を挟んで、ソフィーは本をベッド脇の小さな机の上に置いた。タイトルからして、それを持ってきたのがだれなのか、ハウルにはすぐにわかった。あのぐらゐの年の女の子が好きそうな本だなと小さく笑う。マイケルは普段どんな会話をしているのだろうか。

「退屈？」

わかりきっていることを問い掛けながら、そうして極当たり前の会話がでること、今更ながらにわずかな幸せと、大きな安堵を感じている自分をハウルは確かに自覚していた。

少し前までは。当たり前過ぎて、何の感慨も抱かなかったことを。今はそんな小さな欠片一つ一つも、抱き締めた自分がいる。その変わりように思わず笑って、笑える自身に素直な驚きも覚えていた。

今の生活に、慣れることなどはなくて。感情はいつだって収まることを知らずに、こうして日々は感情のうねりの中にある。

「……わかっていることを聞くのね」

呆れたように、困ったように微笑みながらも、ソフィーはどこか拗ねているようでもあった。ハウルにそう見えただけなのかもしれない。

けれどハウルは、その自分の目に映ったそのソフィーの表情を信じることにした。今となつては、そう、信じられるものは、そうして自分の瞳に映ったものそれだけだった。

ただ、それだけ。

こうして自分の目の前にいる、ソフィー。それだけが、現実。

「ソフィー」

名を呼んでから、ハウルの頭に一つのことか思い浮かんだ。顔中に笑顔を浮かべて、背にしていたドアから数歩歩いて、枕によりかかっていたソフィーの横へと。

「散歩に行こうよ」

ハウルの唐突なセリフには、ソフィーもある程度は慣れたつもりだった。けれど今のその言葉に、ソフィーは少し目を丸くしたのち、まるで幼い子供の冗談を聞いたかのように、大人しい笑みを浮かべた。

「無理よ」

嫌ではなく、無理だという、そんな返答だった。

「……わたし、まだ一人じゃ満足に歩くこともできないのよ」わかつているでしようと、苦笑しながらソフィーは言った。

もちろんわかっていると、ハウルは頷いてみせた。

長いこと眠ったままだったソフィーの身体はとても弱っている。ある程度であれば、それはハウルの施した呪いが支えているが、それはあくまでも「ある程度」に過ぎなかった。

魔法はあくまで人を助けるものであり、それで全てを担うことはできなかった。ハウルの施した呪いは、ソフィーの衰弱を

止め、支える助けにはなった。けれど確かに彼女は二ヶ月もの間眠りについており、意識を戻ってから、徐々にリハビリを始めたとはいっても、そう簡単に弱った身体は元には戻らない。

流れる時間の遅さを、ハウルはそこに見たような気がした。弱っているソフィーの姿を見るのは、正直苦痛だった。以前の、激しく怒って笑って、そんな彼女の姿に慣れきってしまった自分には。ふとした瞬間に、思い出して切なくなる。

過去ばかり振り返って、それは今ここに居る『ソフィー』に申し訳ないだろうと、そう思うことも無駄だった。

「一人じゃ、だろう？」

刹那の瞬間、浮かび上がる暗い感情は無視することにした。いつだって明るい未来を想像することなんてできなかったけれど、それでも暗闇に囚われてはいけなかった。自分の為にはなく、ソフィーの為に。

「僕がいるじゃないか」

当然のように答えたハウルに、ソフィーはわずかに驚いたように目を丸くした。頼ってほしいのだと、言外にそう言ったのは、彼女には伝わっているのだろうか。

ソフィーは聡い人だった。けれど同時に鈍い人でもあった。そんな矛盾するかのような両面も、確かにハウルが愛した部分だった。

「魔法を使うの？」

数日前、雪景色を見に行った時のことがよほど頭に残っているようだった。そんなに頻繁に魔法は使わないよとハウルは緩やかな微笑みを浮かべながら首を横に振った。まるで僕は魔法を使う以外何もできないようだねと、心の片隅でそんな皮肉めいたことを考えて。

「少しでも歩けるようだったら、僕が支えてあげるから。無理

でも、あんた一人抱き上げてるぐらい何てことはないさ」

「……わたし、重いわ」

「何言ってるんだい」

ハウルは心底から呆れた声を漏らした。女性というのが、必要以上に自分のスタイルを気にする生き物だというのは知っていたが、ソフィーがその台詞を言うのは全く持つてお門違いというものだった。

数歩近づいて、布団の上のソフィーの手をとる。掴んだ手首は、記憶の中の洗い物をしているそれよりも、ずっと細くなっていた。その細さが、まるで彼女自身の今の儚さの表れのように、ハウルの背筋はわずかに震えた。

「ちゃんと食べてるの？」

無意識の内に、声は詰問するかのような、いくらか厳しいものになっていた。それを、自分の耳ではなく、決まりが悪そうな若干怯えているようなソフィーの表情で知る。ああしまった、思ってもそれは後の祭り。

「……一日中ベッドの中じゃ、お腹も減らないわ」

目を伏せたソフィーは、明らかにハウルと視線を合わせないようにしていた。掴まれた腕を引き戻そうと力がこもる。ハウルはそれに逆らうことはせずに、静かに手を放した。

「早く元気になってほしいから……食事ちゃんと食べて」

できる限りの優しさをもって、ただ心配しているのだということが伝わるようにハウルは言った。怯えさせてはいけない。それでは、また元に戻ってしまう。心配する気持ちは真実で、そして今のこの関係が壊れてしまうことへの不安もまた真実だった。

「明日、キングズベリーで有名なケーキを買ってきてあげるよ。あんたが好きなやつをね。甘い物は別腹だろう？」

からかうかのようなハウルの声音に、ソフィーはそつと顔を上げた。ハウルは自分の浮かべるこの笑みが、一般的に女性にどんな影響力を及ぼすのかをよく知っていた。けれどこと、相手がソフィーになるとわからない。

今だって浮かべた笑顔に、ソフィーは見惚れるなどということはしなかった。こんなところばかり、以前の彼女と全く変わらない。それは嬉しいようなそうでないような微妙なところだった。少し首をかしげ、精一杯の笑顔を浮かべてソフィーを見つめる。安心したように、ソフィーもまた小さく微笑んだ。けれどそれはハウルから見れば、まだまだどこもない微笑みだった。

「じゃあ、ほら、行くよ。一応靴は履いてくれる？」

邪魔にならないように、隅に置いてあった一足の見慣れた靴は、当然ではあるがハウルが自宅から持ってきた物だった。ソフィーの意識が戻ってから、彼女の換えの夜着や下着を靴に詰めて持ってきたのは、何とも微妙な気持ちだった。けれどそれ以上に、受け取ったソフィーが一番複雑そうな顔をしていた。夫が妻の用意を持つてくるのは、ごく普通のことだというのに。

「……毎日ちゃんと履けるようになればいいのに」

上手く身体が動かないのか、ゆっくりとした動作でソフィーは背中を曲げ、慣れない手つきで靴を履いた。まだその靴に慣れていないのかもしれない。それは常日頃彼女が履いていた物だったのだけれど。

「すぐなるさ。別に身体は健康なんだから。ちゃんと食べてよく眠れば、すぐにね」

壁にかけてあったコート取ると、いつものようにハウルはそれをソフィーの背中につけ、コートに包まれたソフィーをさらに包むようにして抱き上げた。

「あの、いつもごめんなさい」

「何で謝るのさ？」

ハウルには本当にそれがわからなかったが、ソフィーは心底から申し訳なさそうな顔をしていた。そんな顔は見たくないのにと、そう思う自分が勝手なのだという自覚はあったが、それでもその思いを止めることはできそうにもなかった。

「早く、一人で歩けるようになるから」

「そりや、僕もそれを願ってはいるけど」

どうして彼女が負い目を感じる必要があるのだろうか。ハウルはわからなかった。いや、本当はわかっていた。けれどそれに気づかないふりをした。その方がソフィーの為だろうと思つた。自分が気づいているということに、彼女は気づいているかもしれないけれど。何なのだろう、このややこしい絡まりあいは。

ソフィーは負い目を感じている。

記憶を、失つたことに。

——それは彼女自身の所為などではないというのに。

「あんたと歩いて散歩できるようになるのは楽しみだよ。でも、こうやってあんたを抱き上げていくのも、実はけっこう好きだったりするんだ」

冗談めかした顔を装って、それは確かなハウルの本音だった。

「……僕だけにしかやらせないで」

こうしてあんたを抱き上げるのは。

それは、僕だけに、許された。

夫婦としての共通の思い出も何もかも失い、今のソフィーにとつての自分は、他のだれとも同じ立場になってしまった。そんな中で、こうした小さな一つ一つの出来事が——今はただ、それだけが、唯一感じることでできる拠り所になっていた。

それは勝手な自分だけの思いだとわかつてはいても。

目に見えない愛情を信じることはとても難しかった。けれど今、その愛情さえも無くなってしまった今、何を信じればいいのかそれすらもわからなかった。

「……ハウル？」

腕の中で、ソフィーはいつもよりも身体を小さくさせて、ハウルを見上げていた。今の彼女は、そう簡単には思っていることを口に出さない。だからこそハウルは、その瞳から読み取らなければならなかった。それは時に難しく時にとてもたやすかった。

「ああ、ごめん。行こうか」

無理に愛情を求めることは、ソフィーに夫としての愛をぶつけることはしてはいけないと思っていた。それはただソフィーを追いつめるだけだろう。ただでさえ負い目を感じている彼女を。けれど意識をしない瞬間、ふいにそれは溢れ出て。

相反する感情は、いつだってハウルの中に渦巻いて。

わずかな希望でも信じようと思い、絶望を感じ、愛情を見つめようと躍起になって、今はただ見守るしかないのだと自分を戒めて。

ぐるぐるぐるぐる。

それぞれに色があるとしたら、きっと複雑に混ざり合い、混ざり合い——そうして最終的には、それは真つ黒になっていくのだろう。

黒く、黒く。この瞬間にも染まり掛ける心のざわめきを聴きながら、ハウルはゆっくりと窓の前まで歩いて行った。

「ここから出るの、好きね」

何度か経験した今になっては、ソフィーは初日のように怯えることはなくなっていた。けれど好きだとも聞いたことはない。

こうなつてからのソフィーは、好き嫌いをあまり口にしないようになっていた。我慢強くなつたわけでは決してなくて、ただ遠慮をしているだけののだろう。

「表玄関から出て行くのが面倒だからね」

「本当は入院患者は、外出の際には担当の看護婦さんに許可をもらつてからじゃないといけないって」

「そんなの大丈夫さ」

意識一つで開く窓。何度目にしても、その度にソフィーは目を丸くする。今日は雪は止んでいた。窓枠に足をかけ、次の瞬間には、もう身体は宙へと浮かび上がつて。

「僕は魔法使いなんだからさ！」

そう、言いながらも。

魔法ではどうにもできないことが多いこの世界において、魔法なんてものにどれだけの意味があるのか、ハウルにもそれはわからなかった。

その翌日、ハウルは言つた通りキングズベリーで有名なケーキを買つてからソフィーの元へとやって来た。くるくると巻かれたチョコレートが上に飾られた可愛らしいケーキをそれぞれ一つずつ食べ、今度は一緒に食べに行こうと約束した、それはハウルの小さな未来に向けての希望の光だった。

毎日毎日、ハウルはソフィーの病室の扉を叩いた。ソフィーからは、また来てとも、もう来ないでとも言われなかった。歓迎されているかどうかなんてわからなかったけれど、嫌がられ

ているとも思えなかった。どちらともつかなかった。ソフィーの様子は、来る者拒まずといった表現がぴったりなもので、だからハウルはソフィーの確かな気持ちを聞くことはなく、ただひたすら毎日彼女の顔を見ようと病院へ足を運んだ。

「今日は雪が降らないね」

ゆつくりと引いた手の先に話しかける。舗装され、雪かきのされた病院の庭。無理をしない程度であれば、ソフィーは何とか歩けるまでに回復していた。それはひとえに、自分がいない時間での彼女の努力によるものなのだろうとハウルは思っていた。きっと外れてはいないはずだ。

「でも、寒いわ」

「冬だからね。春になったら暖かくなるよ」

やがて来る春の光景を、ハウルは瞼の裏に思い浮かべることができなかった。去年もその前も、確かに自分が過ごしてきた一つの季節だというのに。

去年、ソフィーに出会ったのは、緑の葉が生い茂る五月のことだった。灰色の服でびくびくとして。今のソフィーは、あの様子と似ているような気がした。

そうだ。

今のソフィーも、あの時のソフィーも。まだ自分を知らないソフィーであり、その点において、二人のソフィーは共通しているのだから。

——それならば。

ハウルは、見ないふりをしようと思いつつも、浮かび上がってくるわずかな希望の光に気づかずにはいられなかった。勝手な自分の心が作り出した、願望の現われとでもいうべきものと、わかっていながらも、それでも。

それならば、それならば。昔の彼女が自分に恋をしたように、

今のソフィーも、また——また、同じ気持ちを抱いてはくれないものだろうか。

馬鹿だ、とハウルは胸中で呟いた。そんな思いを抱くのは馬鹿げていると。

確かにソフィーはソフィーだった。けれど彼女からしてみれば、自分は「夫だと名乗る見知らぬ男」に過ぎないではないか？ 出会い方も過ごし方も違う自分達の間に、再び愛が芽生えることなどあるのだろうか。あると信じたい。けれど言い切ることなどは何もできない。

知らず繋いだ手に力がこもった。危ないからと、今は繋いでいるこの手は、いつまでこのままなのだろうか。いつまで、繋いでいることができるのだろうか？

離したくないと思った。

けれどいつか、離さなければならぬ日はくるのだろう。彼女が自分に恋心を抱かなければ、それはもうきつとすぐ近いうちに。何も強要することなどはできない。人の気持ちを、変えることなんて。そんなことは、そう、だれにだって。

けれど、と、ハウルの胸の内に浮かぶものがあつた。

今の彼女であれば、今のソフィーであれば、強く自分の意見を言わない、記憶を無くしたことに怯え負い目を感じている彼女ならば。もしかしたら、と浮かぶものがあつた。

「……結婚、してるんだから」

思わずもれた囁くような呟きは、積もった雪に吸い込まれ、ソフィーの耳に入ることは無かったようだった。

愚かだと思いつながらも、ハウルは浮かんた悪魔の誘惑を完全に振り切ることができなかった。その台詞をソフィーに言えばどうなるのだろうか。結婚しているのだからと。自分達は正真正銘の夫婦なのだから、一緒にいなければならないのだと。

それは紛れも無い事実でありながら、歴然とした強制だった。言っではいけないと頭ではわかつている。そんなことは言うべきではない。記憶を無くし、真っ白になった彼女には、そこからまた選ぶ人生というのがあるのだろう。それを自分の気持ち一つで、彼女のこれからの人生全てを決めることだなんて。そんなことはやつてはいけないことだ。

そう思えば思うほど、ハウルは繋いだ手の温かさをより一層感じて切なくなった。一度知ってしまったこの温もりを、どうして忘れられるというのだろうか。忘れられるはずなどないと思った。忘れることがあるとすれば、それは恐らく自分もまた記憶を無くした時だろう。ああ、いざとなれば、全ての記憶を消してしまえばいいのだろうか。自分の思考がどんどんと、暗闇の方へ引きずられていくのがわかったが、ハウルにはどうすることもできなかった。

目の奥がつんと痛くなった。けれど涙は出ない。泣きたい時に上手く泣けない。そもそも、今自分が泣きたいと思っているのかすら、ハウルにはよくわからなかった。感覚は自分自身とはわずかにずれた、少し遠いところにある。

「……わたし、いつ退院できるのかしら」

身体から抜け出たようなハウルの意識を、戻したのは独り言ともとれるソフィーの小さな呟きだった。それは本当に小さな声で、けれど聞き逃すことなどはなく、ハウルは前を向いてゆっくりと歩き続けながら、引いた手の先に言葉を返した。

「もうこうやって歩けるんだから、あと少しで退院できるはずだよ」

記憶喪失ばかりは、いくら入院したって治らないんだからね。言いかけた言葉は飲み込んだ。けれどわずかな反抗心で、唇の動きだけでそう呟いた。

「記憶喪失は治らないものね」

まるで自分の言外の言葉がわかったかのようなソフィーの台詞に、ハウルは一瞬足を止めそうになった。結局は止まらず、一定の距離を保って歩き続けたけれど。

「病院だと退屈だろうからね。嬉しいだろう？」

「そうね」

ソフィーの台詞はそのまま聞けば、ハウルの言った言葉に対して頷いているようだったが、その声音は本当に退院することを嬉しいと思っているのかどうかよくわからなかった。まるで他人事のように。彼女にとつて、『ソフィー』のことは、ある意味本当に他人事なのかもしれない。自分のことだとは、まだ思えないのだろうか。

それからまた会話は途切れ、二人は黙って道を歩いた。居心地が悪いとは思議とハウルは思わなかった。ただ、心がずつと急いでいた。

退院することになったら、ソフィーはどうするのだろう。少し前から気になりだしたその疑問。それをソフィーにぶつけることができなかった。どうするのだろう。どうしたいのだろう、ソフィーは。

自分には決定権などは何も無いとハウルは思っていた。だから医者に見えられた時も、ハウルは素直にわからないと答えた。それを医者は、まだ先のことは決めていないとでも思ったのだろうか。違うのだ。ハウルはわからなかった。知らなかった。わかっていることがあるとすれば、自分はソフィーの出した結論にそのまま従い、そして彼女が自分達の家へは戻ってこないと言ったとしても、黙ってそれに頷いて、恐らくは精一杯の虚勢で、笑顔で見送るだろうということだけだった。そうしてその後は、空っぽのまま生きていくのだ。ただそれだけ。

悲しいとは思わなかった。そんなものは、最早とつくに通り過ぎてしまっていたのかもしれない。じわりじわりと、ゆつくりとけれど確実に広がっていくそれは、悲しみではなく絶望という名を持っているのかもしれない。

周りに積まれた雪を見て、しばらく前、ソフィーに行きかけの花屋で買ったスノードロップをプレゼントしたことを思い出した。その時の希望は、確かに自分の中に存在している。だからこそ、こうして毎日見舞いにも来る。もしかしたら、何か思い出しているかもしれない。そうでなくとも、笑いかけてくれるかもしれない。そんな希望を胸にして。抱き続けて。けれどそれはいつまでも、この身に留まてはいないものだ。毎日毎日、少しずつ減り続け——いつになれば無くなってしまふのか、それはハウル自身にもわからぬまま。

「ねえ」

「何だい？」

「——わたし、退院したら、どうすればいいの？」

足は自然と止まってしまった。

瞬きをすることも忘れて、ハウルはじつと庭中を覆っている雪を見つめ続けた。寒さは感じない。寒いとすれば、それはきつと、ずっとずっと心の奥が。

振り返って、戸惑ったように自分を見つめているソフィーの瞳を捕らえた。ただ答えを待っただけの彼女は、どこまで残酷になれば気が済むのだろう。なじりたくなかった。

「それを、あんたは、僕に聞くの？」

例えばもしここで、今まで住んでいた自分達の家へ来るようにと言えば、きつとソフィーは頷くのだろう。ハウルに言われたそのままだ。他の選択肢など無いとも言おうかのように。

それはあるいは、都合のいいことなのかもしれない。ソフィー

ーを失うことを思えば。けれど同時にとてもとても残酷なものだった。そうして一緒に暮らすうちに、記憶を取り戻すか、そうではなくとも、ソフィーがハウルにまた恋をすればいい。夫婦として暮らすことができるだろう。

けれどそうでない場合は。一体、どうなるというのだろう。

夫婦ではなく、家族ではなく、ソフィーはまた一から、けれどハウルは以前の記憶を想いを引きずったまま——そうして暮らせと？ いつどんな形で終わりがくるのか、それすらわからない不明な未来だけを待ちながら。

拷問だと思った。それ以外の何物でもなかった。

しかしだからといって、ソフィーに他所に行けと、そう言うことなんでももちろんできるはずもなかった。

どうすればいいのかわからない。正解なんてものはどこにもありはしなかった。道はたくさんあって、どこにも進みたくなどはないというのに、けれど止まることは許されず。

どうしてなのだろう。

どうして、こう、なってしまったのだろう。

「ソフィーは、どうしたいのさ」

声は自分でも驚くほど、冷たく硬いものだった。

「……どうしたいのかわからないから、聞いているじゃない」

「へえ？」

何てずるい女なのだろう！ ハウルは嘲りたくなかった。実際に笑いが、口から漏れていたのかもしれない。ソフィーは目を伏せ、ハウルとは視線を合わさないようにしていた。それは今のソフィーの癖だった。そうやってすぐに視線を逸らす。

目を逸らしたって、現実なんて何も変わらないんだよ。そう言っただけで仕方なかった。

「わからないから、僕に答えを求めるの？ ねえソフィー、他

でもない自分のことなんだよ。その決定を僕にさせるのは、お門違いってものなんじゃないの？」

「だってあなた、わたしの夫だって……」

「そんなこと思ってもないくせに」

まずい、と頭の中で警鐘が鳴っていた。この会話はまずいと。どこかでこの流れを止めなければ、きつとひどいことになるだろうとわかっていた。

どうしてかソフィーを傷つけたくてたまらなかった。傷つけて、ぼろぼろにしてやりたいと思った。それはきつと、八つ当たりというものなのだろう。彼女を傷つけることなんて、本当であればもつとも許せない行為だというのに。

おかしい。自分は、おかしい。ハウルはそれに気づいていた。いつからなのか。ソフィーを失うかもしれないと、そう思い始めた日から、歯車が狂い始めてきている。

「……ごめん」

言い過ぎたことに対しての言葉のつもりだったが、本当は違うような気がした。そんなことではなく、もつと他の何か。けれどそれが何であるのか、ハウル自身にもわからない。

「ただ、僕が言いたいのは……確かに僕はあなたの夫だけど、でもあなたはそれを覚えていないだろう？ それを責めたいわけじゃなくて、ただ、ソフィーがしたいようにすればいいと思ってるんだ。自由にしていいんだよ。夫だってことで、僕はあなたを縛り付けたくないんだ」

紛れも無い本心と言っているだけなのに、どうしてそれがここまで安っぽく聞こえてしまうのだろう。言い方が悪いのか、それとも——これは本当の本心ではないのだろうか。

「何なら、離婚したっていい」

今のこの状況において、夫婦であるということが、唯一の自

分達の繋がりだと思っていた。けれど同時に、今の自分達の何が夫婦なのだろうとそうも思う。

「ソフィーの好きにすればいいんだ」

それはソフィーの自由意志を尊重しているようで、決定権を全て彼女に委ねているだけのような気もした。

ただ退院の話をしていただけなのに、どうして離婚なんて話が出てくるのかわからないと、ソフィーの顔は正直にそう言っていた。ハウルに恋をしているわけでもないソフィーは、別段ショックを受けているわけではないだろう。ただ驚いて、そして戸惑っている、ただそれだけ。

ソフィーの変わらない反応に、それは十分予想していたものだというのが、痛みを覚えている自分がいて、どうしてこうなんだとハウルは吐き気を覚えた。形だけでも嫌がってくれればいいのにと、そんなことを思ってしまった。

「……ハウルは、どうしたいの？」

「どうしたいって？」

おずおずと問いかけられ、ハウルはその問いにどう答えればいいのかからなかった。

「わたしと、どうしたいの？」

「……それは」

もしソフィーが、「わたしにどうしてほしいの」と問いかけてきたのなら、ハウルはすぐさま何かしら答えることができただろう。きつと、彼女からすれば冷たいと思われるような答えを返したはずだ。

けれどソフィーは、そう問いかけてきたわけではなかった。どうしたいの、と。それはハウルの意味を尋ねてきているものだった。

どうしたい。どうすればいいのかなんてわからなかった。し

かし、どうしたいのと聞かれれば、そんなことは。

それは十分に残っている、そしてこの先も消えることはないだろうと思う彼女に対する愛情ゆえのことでもあって。今まで通りの日々をと、そう渴望する心と。もしかしたらその内に、記憶だって戻るのではないかと希望を持って。そうはならずとも、それでもただ傍にいてくれればいいと。

「ああ、そんな思いが、ただただ混ざり合って。」

「——ソフィーと、一緒にいたいんだ」

例えば彼女が記憶を無くしても。自分のことなど、すっかり忘れてしまっても。そんなことは関係なく、ただひたすらに共に居たいとそう願う。

それは今のソフィーにとっては、迷惑なだけなのだろうと想っていた。嫌われてはいないだろうが、好かれていとも思えなかった。だからハウルはいつだって、熱心にソフィーの元に通いながらも、どこか一線を引いてソフィーを見ていた。

「わたし」

ソフィーは、目を伏せてなんかいなかった。

少し痩せた顔を上げ、ハウルを、真っ直ぐに見つめていた。

「あなたが望むことをしたいわ」

どうしてソフィーがそんなことを言ってくれたのか、ハウルはわからない。ただの同情だったのかもしれない。夫と名乗る、周りの人もそう言うハウルに、哀れみを覚えていだけなのかもしれない。ソフィーは情にほだされやすい性格をしているのだから。根本的な部分は何も変わってはいない。その可能性は十分にあった。

それでもそんなことは関係ないとハウルは思った。同情なんかではないと思った。例えばそれでもいいと思った。

ただ大事なのは、ソフィーがそう言ってくれたという、それ

だけだった。ハウルにとつては。ただ、それだけ。

抱きしめたいと思ったけれど、今はまだ、それはできなかった。変わりに繋いだままの手を、両手でぎゅっと握り締めた。改めてその手の小ささを感じて、胸の奥が熱くなった。

「……僕達の家に来てくれる？」

懇願するように、言った。

ソフィーは言葉ではなく、小さな笑顔で、頷いた。

「珍しいこともあるもんだね」

机の上に積み上げられた色々な物の中から、とりあえず元のしまい場所がわかる本を数冊手にとりながらマイケルは呟いた。呟きはだれに向けたものでもなかったが、この場には今マイケルの他にはカルシファアしかおらず、火の悪魔という身分に関わらず案外律儀な彼は、定位置である暖炉の中に鎮座しながら、マイケルの独り言にもきちんと返事を返してきた。

「少なくとも、おいらがハウルと出会ってから、あいつの口からあんな言葉を聞いたのは初めてだね」

「ってことは、初めてなんじゃない？」

何せこの家において、カルシファアが一番ハウルと付き合いが長いのであるし、その上カルシファアは長いこと契約で暖炉に縛り付けられていたのだから。

言われずともわかってはいたことだが、改めて師のすごい一面を見てしまったようで、マイケルは何とも言えない気持ちになった。

「……あのハウルさんが、掃除をしようだなんて」

思い返してみても到底信じられる言葉ではなかった。もし聞いたのが自分一人であつたのなら、マイケルは自分の耳を疑つたことだろう。けれどその場にはカルシファーもいた。マイケルはその瞬間、確かに、カルシファーと目を合わせたのだから。

そう言つたハウルは、居間に溢れていた自分の私物を両手いっぱい抱え込むと、階段を上つて自室へと入つていった。時々たま音が聞こえてくるところからすると、悪戦苦闘して様々なガラクタを、どうにかしまおうとしているのだろう。

「どうして、いきなり掃除なんて始めるんだらう」

「わかつてるんだらう？」

それはそうだった。言われなくともわかつている。それでもあの瞬間には理解できず、すぐさま「どうしてですか？」とマイケルはハウルに尋ねたのだが、ぬるぬる交わすことが上手い師匠は、言葉を濁して階段を上がつていったのだ。

あの掴み所のない魔法使いを動かせるのは、世界で一人だけだった。それはきつと、あの五月祭から。

「……ソフィーさん、帰ってくるんだね」

手にした本を本棚に戻しながら、マイケルはカルシファーに背中を向けたままそう言つた。

「嬉しくないのかよ？」

「そうじゃないよ」

間違つてもそんなことではないと、マイケルは声音を強めてそう言つた。ソフィー。母のような姉のような、言葉では上手く表すことができないけれど、それ以上に家族だと思つてゐる大事な人。

ソフィーの意識が戻つたあの日から、マイケルも何度か見舞

いに行つた。一人で行くことはなく、大抵はマーサと一緒にだつた。マーサとマイケルを見て、ソフィーは初め戸惑つたようだったが、妹と名乗る可愛らしいマーサの様子に、いつも持ち込まれるチェザリーの美味しいケーキに、すぐにソフィーも打ち解けた。マーサは執拗にソフィーに何か思い出したことがあるのか等といったことを聞くことはなかった。親しい友人を訪ねるかのような態度で、いつもにこにこ優しい笑顔を浮かべ、ソフィーの病室の扉を叩いた。だからこそソフィーもマーサには笑顔をを見せていたのだろう。そして、そのマーサにいつも同行するマイケルに対しても、ソフィーは好意的だった。

思い出した最近のソフィーの様子は、いつだって優しくな顔な顔を浮かべ、マーサの冗談に笑い、楽しみにケーキを食べているというのに、どうしてかマイケルの胸にはツキンとした尖つた氷のような痛みが走つた。それはソフィーの前では決してみせない、けれど時々浮かべるマーサの泣きそうな顔が脳裏にこびり付いて離れないからなのだろうか。それとも——それとも、自分を見るソフィーの目が、以前とはどこか、変わってしまったからなのだろうか。

掃除の途中ではあつたけれど、どうしても動きたくない気分だ、マイケルは本棚に頭をぶつけながら、じつと足元を見つめた。自分にできることなどは何もないような気がした。無力感に襲われてしまったかのような。

ハウルは一体どんな気持ちなのだろうと、マイケルはそれを考えた。今日もずいぶん長いこと風呂に入り、そしてソフィーの見舞いに行き、帰ってきてすぐに掃除をすると宣言したあの師匠は。何を思い、何を感じながら、今生きているのだろうか。

辛いのは自分だけではないとわかつてゐる。実の妹のマーサの方が、旦那であるハウルの方が、ずっとずっと自分より辛い

思いをしているのだろうと容易く予想はできる。けれどいくら、自分と比較をして考えたところで、だからといって自分の辛さが半減するわけでも何でもなかった。感情の重みを比べたところで、結局は何も変わらないのだから。

『今日も来てくれたのね。ありがとう』

ぽつかりと時間が空いた、しばらく前のある日、花畑に行つてソフィーが好きだと言っていた花を摘んで、それを持ってソフィーの見舞いに行つた。声は全く変わらないのに、どこか他人行儀に感じられる言葉を受け取つて、マイケルはどうしようもないほど泣きたくなつた。

だからだろうか。一人で、ソフィーの元に行きたくないのは。どうしようもないくらい泣きたくなつて、けれど上手く泣けないから。

ハウルは毎日のように病院へ出かけていて、それを見ると余計に行き辛くなつた。ソフィーがまだ眠っていた頃、見舞いに行くようにと諭した自分が、まるで遠い人のおようだった。そして同時に自分の愚かさにも気がついて愕然とした。それは漠然とした愚かさだった。

どんどんどんどん、嫌なことばかり思い出しているような気がした。まるで何かに急ぎ立てられるように、心ばかり焦っているのに、実際にできることなどは何もなくて。焦燥感ばかりが身を焦がす。

本棚から頭を離して、ああ掃除をしなければと、マイケルは何とか意識を戻そうとした。

「ハウルさん、どうして魔法で片付けないんだらうね」

些細なことから何まで、面倒だと言つては魔法で片付けるような人だというのに。そうしてそんな場面を目にする度に、何でもないような顔をしながら使う魔法が、自分にはまだとても

使えないものだとかわたり、マイケルはハウルの魔法の才能に感服した。その使い道は色々あれだったけれど。

「魔法で掃除すると嫌がるからだろ」

嫌がるのがだれかなんて。

それはもちろん。

「……ソフィーさんのことばっかりだね」

「何だよ、ほつとかれて寂しいのかよ？」

けけけつとからかうように笑う声が返ってきた。そんなじやない、とマイケルは首を横に振つた。放つておかれることに寂しさを覚えるような年ではない。それに良くも悪くも、マイケルは一人になることに慣れていた。だからこそ感じる寂しさというものもあつたけれど。

「僕はどうすればいいのかな」

「何がだよ？」

「だから、ソフィーさんが戻ってきたら」

目についた本の順番を揃えながらマイケルは言つた。確かに聞こえているはずだというのに、カルシファアの返事は無い。どうしたのだろうと振り返ると、暖炉の中、暖かい光りに自身を燃え上がらせながら、意味ありげな視線を送ってきている火の悪魔がいた。

その瞬間、自分がどれだけバカなことを言つたのかということに気づいて、マイケルは今すぐこの場から逃げ出したくなつた。カルシファアは何も言わない。それが一番辛かつた。けれど言葉では何も言わずとも、その視線が何よりも雄弁に語っていた。

片手で口元を覆つて、マイケルは足元を見た。二階で聞こえる物音に、ああハウルさんごめんなさいと、マイケルは胸中でそう呟いた。謝らずにはいられない気持ちだった。

消えてしまいたいというのは、多分こんなことを言うのだらうと、まだまだ大人になんてなりきれない心でそう思った。

「また騒がしくなるな」

そんなマイケルの気持ちちがわかったのか、マイケルの呟きはさらりと流して、まるで世間話をするかのような声音でカルシフアーは言った。また騒がしく。なればいいと切に思う。また騒がしい日々が始まるのなら、それは何て何て幸せな。

「……なるように、がんばらないとね」

待っているだけではダメなのだ。何ができるのかなんてことはわからない。それでもきつと何か、できることはあるのだろうと思った。自分にしかできない何か。

元には戻れなくとも、それでもここで共に寝起きをして、食事をとって、笑って、居られることができれば——それだけでも、それは大きな支えになるような気がした。

「とりあえずは、片付けないと」

以前から少しずつ片付けてはいたものの、それではハウルの汚し癖には到底敵わなかった。けれど今は、汚す当の本人が片付ける気になっているのだから。

二階の物音に耳を済ませる。ガラクタが一気に雪崩れを起こしたような音が聞こえて、マイケルは口元に小さな笑みを浮かべた。

「ここまで来ると、実際に長かったのか短かったのか、よくわからないんだ」

手を引きながらそんなことを言うハウルは、苦笑めいた笑みを浮かべていた。ハウルが言う「来る」というのが、実際の距離ではなく今までの時間だということは、その声音からソフィーにもすぐにわかった。

「ソフィーはどう？」

尋ねられても、いつものことで、よくわからなかった。見慣れない風景を眺めながら、ただ、首を横に振る。

「ずっと病院にいるのは、退屈だとは思ってたけど……」

自分の今までの人生の始まりは、あの病院で目覚めたその瞬間からであり、そうして今までの時間を過ごしてきたのもそうだった。それ以外の時を、場所を、ソフィーは知らない。かつては知っていて、今はそれを忘れているだけなのだ——何度そう言われようが、ソフィーは心から納得などはできなかった。嘘だと思えない『自分の記憶』が他人の口から語られる。それは何とも形容のしがたい気持ちだった。思い出すだけで、胸の奥にどくどくと鈍い痛みが走って行く。

「本当に、馬車を使わなくて良かったの？」

ソフィーの表情が曇ったことに気づいたのか、ハウルはすぐさま話題を変えた。わざとらしくない態度で、本気で気遣う素振りを見せるハウルに、ソフィーはゆっくりと頷いた。意識して、小さな笑顔を浮かべて。

「大丈夫。いつもあなたは歩いて来てくれてたんでしょ？」それに、マイケルだって」

「そりや、僕達はね。だけどソフィー、あんたは——」

その後が続く言葉を聞きたくなくて、ソフィーは強い口調で言った。

「わたし、平気よ。身体はどこも悪くないって、ハウル、あなたも知ってるでしょう？」

「もちろん、知ってるよ」

思いの他素直にハウルは頷いた。けれどその声音が、すぐさま「だけどね」と続けそうなことを悟ると、ハウルが口を開く前にソフィーは畳み掛けるようにして言った。

「わたしはちゃんと、自分で無理をしないようには気をつけているつもりよ。もつとも、無理をしたくてもできなかったのが今までの生活だけだ。だからね、今日からは病院ではなくて、あなた達と一緒に暮らすわけでしょう？ お荷物になんてなりたくはないし、それに、早く家までの道ぐらいいは覚えたいもの」だからソフィーは、病院から家までの間を馬車で移動することを拒んだ。ハウルが自分を気遣ってくれているのは痛いほどにはよくわかる。けれど過度な心配性だと思えなかった。病人扱いされることにも嫌気が差していた。

「……頑固なところは変わってないね」

呆れたように笑ってハウルは独り言めいた呟きをもらしたが、ソフィーはその呟きに、ますます胸の奥の痛みが大きくなるのを感じた。それがどんな種類の痛みなのか、ソフィーにはもうわかっていった。記憶を失う前の自分。それを考えるだけで、こんなにも。

退院したことを素直に喜べないのは、だからなのかもしれない。いや、きっとそうなのだ。普通の病氣と違って、退院したからそれで終わりというわけではないのだから。何も終わってわけではなく、むしろここからが本当の始まりなのかもしれないとさえ思う。終わりなどはだれにもわからない。もしかした

ら、無いのかもしれない。

一生このままなのかと、考えただけでソフィーの背筋に寒気が走った。それは体中に伝染して行き、奥底から次々と震えに襲われた。怖かった。過去を思い出さないことよりも、そうして、誰でもない人生を歩む自分が怖かった。

「ソフィー、寒い？」

心配そうな声に、そうではないと答えるよりも早く、もう一枚上着をかけられた。見ると、それはハウルの羽織っていたそれだった。

「これじゃ、あなたが……」

「僕はいから」

有無を言わせぬ声だった。でも、とさらに言葉が続けようとしても、それはハウルの深い笑みに飲み込まれてしまった。

ずるい、とソフィーは思った。具体的には、何がどうずるいと思ったのかは、自分でもよくわからない。けれどなぜか、ハウルを見ていて、そう思わずにはいられなかった。

「もうすぐだよ」

明るい笑顔でそう言われ、ソフィーは黙って頷いた。きっと何を言っても、ハウルは聞きはしないのだろう。先ほどハウルは自分のことを頑固だと言ったが、それはハウルもそうだろうとソフィーは思った。もっともそんなこと、言えるはずはなかったのだけれど。

「ここはキングズベリーだよ。僕の勤め先もここ。まあ、今は自主的に休職中だけだ」

ハウルは笑いながら言った。休職中というのは、毎日自分を見舞いに来てくれたことからよくわかる。一瞬ソフィーは、自分の所為かと、そんな気に陥ったが、けれどハウルが心底から「休職中」なことを嬉しがるそぶりだったので、そんな気も

一瞬で消え失せた。それはいいことなのかどうなのか。

「僕はキングズベリーがわりと好きなんだけど、あんたはあんまりそうじゃなかったな。賑やか過ぎて嫌なんだってさ」

「あんまりそんな感じは……しない、けど」

賑やか過ぎだなんてことは思わなかった。好きか嫌いかはよくわからない。好きになる要素も嫌いになる要素も特に見つからなかった。

「ここは中心部からはずいぶん離れた所なんだよ。王宮の近くになれば賑やかなもんだよ。今度連れて行ってあげる。ああ、でもあんたには、ここよりもがやがや町の方がいいかな。あんたの生まれ育った町だからね」

ソフィーは返事に困ったが、ハウルはソフィーの返事などは別に期待してはいないようだった。ただ言いたかっただけなのだろう。

まるで観光案内をしているかのように、ハウルはぺらぺらとキングズベリーについてのあれこれをしゃべっていった。歩きながら、周りの建物についての説明等をするのではなく、ただ自分の思いついたものしゃべりたいことを好き勝手に言っているだけだった。おかげでソフィーは、ハウルの言ったことの十分の一も理解することはできなかった。それよりもソフィーは、道を覚えることの方が大事だったのだ。

ハウルはソフィーの意見を求めるようなことはなかったから、その点はソフィーには楽だった。以前のようにハウルとしゃべることが苦痛に思うようなことはなかったが、それでも何と答えればいいのか迷うことは多々あった。

景色はだんだんと変わり、遠くに高い煌びやかな建物が見えるようになった。あれが王宮だろうか。あんな所で、この人はどんな仕事をしているのだろうか、ソフィーはちらっと隣を

歩くハウルの顔を盗み見た。前を向いてひたすら歩くハウルは、どこを見ているのかよくわからなかった。ただひたすらに口を動かしているハウルは、とても楽しそうなだけけれど、沈黙になるのを恐れているような気もした。いや――。違う。このましく立てるような言葉は、それは、ソフィーに口を挟ませないためなのだ。

「ハウル」

「ああそれでね、そう、あそこにあるカフェ。あそこもなかなかに美味しいんだよ。……つと、間違えた、あそこじゃないよ。あつちかな。あつちの裏かもしれない。うんそれで」

「ねえ、ハウル」

先ほどよりもいささか強く名前を呼んだ。ハウルは一瞬だけ動きを止めると、ソフィーに顔を向けず、ま、ま、何？と小さく声を上げた。

「わたし、あなた達の家のこと、何も知らないわ」

ハウルの口はいつだってよく回っていた。ソフィーがあまりしゃべらない分を補うかのように、いつだって笑顔で口を開いていた。

けれどそのハウルの口から、住む家がどんな物なのか、どんな暮らしをしているのか、そんなことを聞いたことは一度も無かった。どうしてかとそれを今まで不思議に思ったことも無い自分が、今ソフィーは不思議だった。どうして気づかなかったのだろう。

わかっているのは、キングズベリーに家があるということぐらい。それだって、今こうして歩いているのだからそうだとわかったぐらいで、ハウルの口から聞いたことなどは何一つもないのだ。

「マイケルと二人で住んでるのよね？」

「……ああ、うん、まあ、見ればわかるから」

そんなことはわかっていて。それを言われては身も蓋も無い、とソフィーは思った。見る前にはある程度のことは教えてもらい、心の準備をしたいということが、ハウルにはわからないのだろうか。魔法使いというのは、そんなものなのだろうか？

「ほら、ここだよ」

問い詰めようかどうか、ソフィーがしばし悩んでいる間に、どうやら家に着いてしまったようだった。ハウルの指した指の先に、ソフィーは眉を寄せた。それは普通の家だった。普通すぎた。ごくごく平凡なレンガとごくごく平凡な造り。一般市民の家その物だった。

「……ここが、あなたの？」

「そう。どうかした？」

「いえ、べつに」

まさか、平凡すぎる家だから驚いたなどとは言えなかった。豪華な屋敷を期待していたわけではないが、けれどソフィーは、こんな普通の小ぢんまりとした家を想像してもいなかった。何せハウルは王室付きの魔法使いで、いつも着ている服だってそれは見事なものだったのだから。服装と家が一致していないような気がして仕方なかったが、それを言うのははばかられた。個人の自由だと言ってしまったらそれまでなのだし、それにもしかしら、王室付きといってもそれほど給料はよくないのかもしれない。弟子だというマイケルだって、地味な服を着ていたわけだし。

「普通の家だからびっくりした？」

魔法使いというのは、人の心を読む特技でもあるのだろうか。

それともこのハウルだからこそ？

ソフィーはびくっと身体を震わせハウルの顔を見上げた。ハ

ウルは少しおかしそうに微笑んでいた。気分を害したわけではなさそうだった。ソフィーはそれにほっとした。

「大丈夫。後でちゃんと、魔法使いらしくびっくりさせてあげるから」

ソフィーがその言葉について言及するよりも先に、ハウルの扉を開ける方が早かった。「帰ったよ、マイケル、マイケル！」と、うるさく名前を呼びながら。ソフィーはその後に続いて、ゆつくりとハウルの家の中へと入っていった。

すめられた椅子に腰掛けて、ソフィーはわからないように視線だけを動かして家中を見回した。あからさまにきよろきよろとするのは失礼だと思ったのだ。けれどそんなことは、ハウルの前では無意味だったらしい。

「ソフィー。あんたが好奇心旺盛なのは知ってるよ。後で好きに見て回っていいから、今はとりあえず温かいお茶でも飲んで身体を暖めておくれ。寒い中歩いて来たんだから」

寒い中歩いてきたおかげで、これ以上顔が赤くなることはないのが救いだ。俯いたソフィーの前に、ハウルのいれてくれたお茶が置かれた。

「好きに見て回っていいの？」

自分が好奇心旺盛なのかどうかはわからなかったが、これから住むことになる魔法使いの家に何があるのか、それは確かに気になった。今までの間で知ったハウルの性格からして、怪しい呪術めいたことはやらないと思うのだが、どうなのだろう。か。「そりゃもちろん。ここはあんたの家でもあるんだから。どの部屋だって、好きに見てくれて構わないよ。ああでも、マイケルの部屋だけはちよつと遠慮してやっておくれよ。年頃の青少

年だからね。女性に見られたら困る本とかがあるだろうから」

「なっ、そんなのありませんよ！」

自分の分のお茶をいれたマイケルは、遅れてソフィーから見て斜め右の席に腰掛けながら、顔を真っ赤にして声を上げた。根がまっすぐで正直そうな子だとは思っていたが、それは当たっているようだった。

「照れなくてもいいじゃないか、マイケル。男ならだれだって、おまえぐらいの年にこっそり友達と一緒に見たりするものさ。そうやって男同士の友情を深め合っていくんだから」

「でたらめ言わないで下さいよ、もうっ！」

真っ赤な顔で怒鳴ると、マイケルはお茶を一気にぐいっと飲んだ。けれどいれたばかりのお茶は熱かったのだろう、「あちっ！」と慌てて口を離す。その一連の動作を眺めていたソフィーは、思わずぶつと吹き出してしまった。ソフィーが吹き出したのを見て、マイケルはますます赤くなる。笑っては気の毒だと思いつつも、ソフィーは手で口元を隠して、くすくすと笑うのを止められなかった。この少年がずいぶん可愛く思えたのだ。弟がいたらこんな感じなのだろうか。病院に見舞いに来てくれた時よりも、ずっと距離が近づいたような気がした。今のたったこれだけで。

「ああそうだ、マイケル。ずっと忘れてたけど、そろそろ魔法の勉強を見てあげるよ。最後の課題をやったのはいつだったかね。どうせ、もう全部忘れたんだろう？」

「……全部、ではないですけど……」

「じゃあ半分ぐらいは覚えてるってことにしてあげるよ。それでいいかい？」

からかうように笑ってハウルは言った。マイケルは、先ほど怒鳴った勢いはどこへ行ったのか、居心地が悪そうに視線をぐ

るぐるあちこちに彷徨わせている。恐らくはハウルが言うように、最後にやったことなど全部忘れてしまっているのだろう。

そこを見抜いている辺り、やはりハウルはれっきとしたマイケルの師匠なのだ。知ってはいたが、実際にハウルがマイケルに何かを教えているところなどを見たことはなく、ソフィーは不思議な気持ちで二人を見ていた。魔法使いの師弟は、一体どんな繋がりを持っているのだろうか。

机の上には、何十冊もの本が積み重なっていた。邪魔にならないように端に避けられている。どれもこれも分厚く、覗く黄ばんだ紙面が、その本の古さを物語っていた。

「見てもいいよ。そこにあるのは安全な本だから」

ソフィーの向かい側に腰掛けたハウルが、ソフィーの視線に気づいてにこやかな笑顔でそう言った。また行動が読まれている。何だか調子が悪くなつて、誤魔化すためにソフィーはお茶に口をつけた。初めて味わう味だった。美味しいけれど、何の味なのかわからない。

「……そこにあるのはつてことは、ここ以外には、安全じゃない本もあるつてこと？」

「目敏いね、ソフィーは。この場合は、耳聴いっていいべきなのかな」

楽しそうに言つて、ハウルもまたグラスを口に運んだ。ハウルのだけはお茶ではなく、どうやら酒のようだった。「寒い時にはブランドーが一番だね」と言いながら。

「魔法には色々種類があつて、それに安全も安全じゃないも無いんだ。魔法はあくまで純粹な魔法で、人間達が勝手に自分達に都合の悪いものを安全じゃないとか言ってるわけだからね。何事も使いようによつては薬にも毒にもなるつてことさ」

ハウルの言葉の意味はよくわからなくて、ソフィーは何だか

納得がいかなかった。魔法の論理を聞きたいわけではなくて、ただ安全なのかそうでないのか、この家に何か危険な物があるのか、ただそれが知りたいだけだというのに。

魔法使いというのは、皆このように、まるでぐらかすような話し方をするのだろうか。ソフィーが悶々と考えながらお茶を飲んでいると、呆れたように口を開いたのはマイケルだった。「そんなこと言つて、ハウルさん。仮にも王室付きの魔法使いなんですから、うっかり僕に上級の魔法書を渡すようなこと、もう二度としないで下さいよね。間違えた呪文を完成させちゃつて、あの時はどうなるかと思いましたよ」

ぎよつとソフィーは目を見開いた。上級の魔法書がどれぐらいの物なのか、そうして一体マイケルがどうなったのかはわからないが、それでもそれは大変なことではないのだろうか。

「あれ、そんなこともあつたつけね。まあいいじゃないか。結局それを収めたのだから僕なんだから」

「しつかりして下さいよ、本当に。薬にも毒にもつて言いますけど、あれは間違いなく、僕にとつては大毒でしたよ」

憤慨してマイケルは言うが、ハウルはというとお気楽なもので、そんなマイケルの様子に楽しそうに笑っているだけだった。魔法使いというだけあつて、普通とはどこか違うとは思っていたが、恐らくは弟子の危機であるう事柄でさえも笑つて済ませるのだから、本当に大した人であるらしい。それもまた自信の織り成す技なのだろうか。

お茶を飲みながら、ソフィーは今、自分が別段緊張していないことに気づく。ここに来るまでの間の方が、よっぽど心拍数は高かった。どうしてだろうと考えて、彼らの様子が当たり前

に普通であるからだと気がついた。

「お帰りなさい、ソフィーさん。外は寒かつたでしょう？」

家に入ったソフィーを見るなり、マイケルは微笑んでそう言った。まるで家族のだれかが買い物に出かけていたかのような気安さだった。退院おめでとうございますなんて、そんな仰々しい言葉もなかった。それがソフィーには不思議で、けれど嬉しかった。戸惑いもしたけれど、それでもついいつられて「ただいま」と言ってしまう程には。

この居心地の良さは、マイケルがいるからなのだろうとソフィーは思った。ハウルのことと嫌いではないし、むしろ好きな方なのだろうと思う。毎日のように見舞いに来てくれていた心優しい青年を、嫌う理由などどこにも無い。けれど二人きりでいれば、何を話せばいいのかとやはり戸惑ってしまう。それはハウルだけではなく、大抵だれと居てもソフィーはそうだった。例外は、末の妹だというマーサぐらいのものだろう。無邪気に甘えて明るい声で話すマーサは、ソフィーにとって気安く話せる貴重な相手だった。

ここに居るのがハウルだけでも、マイケルだけでもいけないのだ。ハウルとマイケル、お互いに馴染んだ二人がいるからこそ、こんなにも場はソフィーにとって優しくなる。相手をしなければ、せつかく居てくれるのだから何か話さなくてはという、自己内での一種の強迫観念にも似た思いが無くなるのは、とても楽なことだった。

これなら、何とか、やっていけるのかもしれない。何の希望も無かったが、それでもソフィーの気持ち的にはだいぶ楽になっていた。ほっと息をついて、ソフィーは自然に、先ほど見ていた本を一冊手にとってみた。

ずっしりと手に重いその本は、古びた深紅の表紙の、それだけで重圧感を感じさせるには十分すぎる物だった。こんな立派な本、街中の本屋ではそうそうお目にすることはできないだろ

うと思わせるような。中をばらばらとめくってみる。読めない言葉が山のようにあって、いかな読書好きのソフィーでも、これを読んでみようとは思わなかった。

「魔法使いって、すごいね」

世辞のつもりでも何でもなく、ソフィーは心からそう言った。「マイケルも、この本が読めるの？」

ハウルが読めることはわかりきっていたが、自分よりも年下のマイケルがこんな難解な本を読めるとは、ソフィーにはわからずに信じがたかった。

案の定、マイケルは驚いたように首を振った。

「まさか！ 僕にはそんな上級の本は読めませんよ。僕が読むのは、もっと薄くて読みやすい本です。そんな本を片手間に読めるのはハウルさんやサリマンさんぐらいのものです。僕は見習いですし、それに、あんまり才能も無いんです」

後半、マイケルは申し訳無さそうに、少々罰が悪そうな表情でそう言った。謙遜しているわけではなく、心底からそう思っている顔だった。そんなことないとソフィーは思わず言いたくなったが、自分はマイケルの魔法の才能などは何も知らない。ついハウルに視線をやると、ハウルは肩をすくめた。

「才能があればいいってもんでもないけどね。魔法なんて努力によるところが大きいもんさ。まあ確かにおまえは、幻術を使ったり何か道具を発明したりなんてことには向いていないけど、薬草を扱った魔術の腕はまあまあだと思うよ」

「え、いえでも、僕はそんな……」

「良かったじゃない。師匠であるハウルがそう言うんだから、間違いないじゃないの」

どうしてかソフィーは、マイケルに卑屈な態度をとってもらいたくなかった。自信を持ってもらいたかった。弟のような親

近感を覚えたからなのかもしれない。それに、マールサと彼がいるところは、とても微笑ましかった。ソフィーは二人と一緒にいるところが好きだったのだ。

マイケルは照れたように笑いながらも、ちらちらと隣に座ったハウルのことを気にしていた。まるで、何か都合の悪いことでもあるかのように。ソフィーはハウルを見たが、ハウルは先ほどと同じ笑顔を浮かべたまま、ブランドーを舐めていた。普通の様子だった。やはり弟子となると、いつも師匠の顔色を伺っていないとはいけないのだろうか。先ほど怒鳴っていた様子からは、とてもそうは思えなかったけれど。

手にした本を元の位置に戻しながらも、ソフィーは指に埃がついていることに気づき、さりげなく仕草で埃を振り払った。けれど、そうして振り払った埃は床に落ちるのだ。そう思ってた床を見ると、部屋の隅に埃が溜まっているのがわかった。気になってあちこち見回すと、物が散乱しているのはわかっていたが、どうにも埃っぽい。精神的な意味ではここは居心地が良かったが、現実的な意味合いでは、生憎とそうは言えないようだった。

「どうしたの、ソフィー。トイレなら一階のあの部屋だよ」

ハウルの言葉は、珍し克的を射ていなかった。ソフィーはわずかに悩んだ。単刀直入に聞くのは、あまりにも失礼というものだろうか。自分の見舞いに来てくれたいた所為で、時間が無かったのかもしれない。けれどこれから一緒に暮らすことを考えると、とても黙っていることもできそうにはなかった。

「あの……その、失礼なんだけど……どうして、掃除、してないのかしら」

読んだ本は出しっぱなし、使った皿も置きっぱなし、ソファの上には服が脱ぎ捨てられていたし、部屋の隅で埃はダンス

を踊っているし、暖炉には灰が溜まっているし——次から次へと浮かび上がってくる。もうこれ以上は止めようと、ソフィーのそれは懸命な判断だった。あまりまじまじと見たい光景ではない。妙な虫でも湧いていそうだ。

ハウルとマイケル、二人の師弟は、きょとんとした顔で見詰めた。ソフィーの不躰な問いにも、怒った様子はなかった。ただ驚いているような。どうすればいいのかわからず、ソフィーはびくびくと二人の言葉を待った。

「掃除、してないって思うかい？」

「え、ええ、あの……ごめんなさい、失礼なんだけど」

家に来てそうそう、こんな失礼すぎる台詞を言うことになるとは、ソフィーはとても予想してはいなかった。家はある程度大きく、そうして使用人の何人かはいるものとばかり思っていたのだ。王室付きというハウルの地位から、ソフィーはそんなハウルの生活を想像していた。

「いや、いいんだよ、べつに。でもおかしいな。数日前から掃除はしてたんだけど。ねえ、マイケル？」

「ああ、はい。珍しく……というか、初めてハウルさんから、掃除しようなんて言葉を聞いて」

二人の言葉に、ソフィーは愕然として目を見開いた。これで掃除をしたというのだろうか。いや、二人が言うからには事実なのだろう。嘘をつかなければならない理由も無い。けれどだというのなら、どこをどう掃除したのかソフィーは聞きたかったが、かといって、それを聞く勇氣はソフィーには無かった。マイケルの言った言葉に、とても嫌な予感を覚えたので。

「これでもずいぶんキレイになったんだよ。こうして三人で座ることができるようになったし、障害物に邪魔されることもなくなかったしね。本だって溢れかえっていたのを片付けたんだよ」

「……そ、そうなの」

つまり以前は、椅子に座ることもできず、歩こうにも障害物に邪魔をされ、今以上に本が溢れていたのだらう。恐ろしい光景だった。ソフィーには想像することもできなかった。

「えっと、あの……それは、あの、お疲れ様で……ごめんなさい、わたしが来るからよね、掃除してくれたのって。なのにごめんなさい、わたし、すごい失礼なこと言っちゃって……」

やはりあんなこと、言うべきではなかったのだ。今更後悔したところで遅い。ソフィーは身体をちこませて俯いた。

「いえ、いいんです、気にしないで下さいソフィーさん。多分ここって、キングズベリー一汚い家だと思うんで」

「あの、そんなことは……」

否定をしたかったが、そうもできなかった。それにしても、いくら自分を慰めるためだとは言え、仮にも師匠の家をそこまて言うなんて、一体マイケルは立場が弱いのかそうでないのか、ソフィーには全くわからなかった。そしてこうまで言われたというのに、全く気にした素振りもないハウルも不思議だった。

「……迷惑じゃなかったら、あの、わたし、掃除しちやダメかしら？ 良かったら……明日からでも」

本当は、今晚ぐっすり眠るためにも、今すぐにでも掃除を始めたというのが本音だったが、それではあまりにも彼らに失礼すぎるかと思い、ソフィーは譲歩して明日と言った。それでも失礼なことを言っていることに変わりはないかったが。

ソフィーの申し出に、ハウルは驚いたようだった。目をわずかに大きくし、けれど次の瞬間には嬉しそうに笑った。

「ああ、もちろん。ソフィーが掃除してくれるのなら、こんなに嬉しいことはないよ」

「そう？」

ハウルは自分に気を使ってくれているわけではなく、本当に嬉しいようだった。家がキレイになるのがそんなに嬉しいのなら、どうして自分で掃除をしようと思わないのか、ソフィーは不思議に思ったが、そこはきつと魔法使いだからだろう。ソフィーは納得のいかないことは、全て「魔法使いだから」と片付けている自分に気づいたが、それ以外に考えられることがないのだから仕方ない。

「じゃあほら、ソフィー、家を案内するよ。」と言っても、この他は二階に寝室があるだけで、案内するまでも無い小さな家なんだけどね」

ハウルはぐいっとグラスの中身を飲み干してから立ち上がった。ハウルの機嫌が妙にいいのは、ブランドーを飲んだからだろうかとソフィーは考えた。

次の日ソフィーは、日が昇る少し前に起き出した。何の物音もしない。かすかに聞こえるのは、壁にかけられた時計の針の音だった。まだハウルもマイケルも寝ているのだらう。一人だけ早く起きても仕方ないとは思ったが、一度目を開けてしまうと、二度寝をする気にはなれなかった。それに病院での退屈な生活の所為で、今は自由に動き回れることが嬉しかった。数ヶ月を病院のベッドの上で過ごしていたソフィーには、見慣れない今の光景も新鮮だった。

「……こんな処で寝ることになるとは思わなかったわ」

ソフィーは階段の下で眠っていた。そこにマットを引き、即

席のベッドにして一夜を明かしたのだ。思ったより寝心地は悪くはなかった。むしろぐっすりと眠ってしまった。

昨日家の案内をされた時、二階には明らかな女性の部屋があった。ハウルに言われるよりも先に、ソフィーはここが自分の部屋なのだとわかった。以前の自分はここで生活をしていただと。

「ここが、ソフィーの部屋」

「そうみたいね」

カーテンも家具も落ち着いた質素な物で、それは今のソフィーが見ても気に入る物だった。きつと今新たに自分が家具を買いおうとしても、これと似た物を選ぶだろうと思う程には。自分で買った記憶は無いのに、自分の趣味に合う物が置かれ、そうして生活していた空気があるというのは、何とも言い表すことのできない感情を伴うものだった。

漂う埃っぽさが、自分の空っぽの時間をそのまま表しているようにも感じられた。どこか泣きたくなった。自分は記憶を無くしたのだという、理解しているはずのそれを、改めて突きつけられているような気になった。ソフィーは少し泣きたくなった。それがわかったのか、ハウルは黙って階段を下りて行った。優しい人だと思った。泣く時間を与えてくれたのだということがわかっていたが、ソフィーは泣くことはしなかった。じつくりとその部屋を眺め、そうしてあることに気づくと、すぐさま階段を下りて行った。マイケルは出かけていた。マーサの所だ。「ねえ、ハウル。わたしの部屋、ベッドが無かったんだけど、どうして？」

昨日のことを思い出してみて、ソフィーはあれほど馬鹿な問いはなかったと、今更ながらに顔を赤くした。ハウルも困っているようだったが、まさか答えないわけにもいかず、苦笑しな

がら口を開いてくれた。

「僕とあんたは夫婦だから……あんたは、僕の部屋で寝てたんだよ」

忘れていたわけではなかった。けれどそれは他人事のような記憶であり、気を抜けばすぐさまソフィーの頭から抜け落ちてしまうことだったのだ。顔を真っ赤にしたソフィーに、ハウルは慌てて言葉を続けた。

「もちろん、今のあんたに僕の部屋で寝るなんてことは言わないよ。ごめんね、僕もうっかり失念していて、ベッドを買いのを忘れていたんだ。明日にでも買いに行くから、今日はちよつと違うところで我慢してくれないかな」

心底申し訳なさそうに言うハウルに、ソフィーは慌てて「ええ、もちろん。何でも構わないわ」と早口で言った。早くこの会話を終わらせたい一心だった。

そうしてハウルが用意してくれたのは、この階段下のベッドだった。まるであらかじめ用意していたかのように、悩むことなく即席のベッドを用意してくれた。ハウルは階段下で寝かせることを何度も謝ってくれたが、寝心地は悪くなかったし、階段の下で眠るだなんて、何だか隠れ家にいるような気がして、ソフィーはちっとも気にしてなんかいなかった。ベッドなんて高い買い物をしてなくても、ここで十分だと思えるぐらいには。

「……わたしって、けっこう強かだったのね」

病院にいた間には、考え付きもしないようなことだった。この家にいると、わくわくすることが多いような気がする。今日はひたすら掃除をする予定だったが、それすらも今のソフィーにとっては嬉しいことに他ならなかった。あの退屈すぎるほどの日々を味わった身には、どんな雑用であろうとも、やるべき事があるというのは嬉しかった。無気力に過ごす日々こそ、心

に影を落とす日々は無いとソフィーは実感した。

手早く着替えて、ソフィーは階段下から抜け出した。時計を見る。外はまだ薄暗かった。上着を羽織ながら、吐く息が白かった。近くにあった薪を手にすると、ソフィーは何本か暖炉に投げ入れた。火はすぐに大きくなり、部屋中が温かくなった。その間の時間があまりに早かったから、ソフィーはこれも魔法なのだろうかと思いをかき混ぜてしまった。この家は一見普通ののだが、やはりそこかしこに魔法の気配を感じるような気がする。それとも、ハウルが魔法使いだと知っているから、そう思うってしまうのだろうか。

「まあ、いいわ。早く暖かくなってくれたら、動きやすいもの」
そうは言っても、ソフィーには特にすることもなかった。掃除は確かにソフィーを待ってはいたが、まさか家の住人が揃って寝ている間に始めるわけにもいかない。時計を見る。きつとあと少しでハウルもマイケルも起きてくるだろう。

暖炉の前に立ったまま、ソフィーは辺りを見回した。

「……朝食でも作ろうかしら」

思わず零れ落ちた呟きに、一瞬遅れて、ああそうだとそれがいとソフィーは思った。無意識の呟きだった。昨夜の夕飯はハウルが作ってくれたのだが、ベーコンエッグにパンとチーズだけで、お世辞にも美味しい食事だとは言えなかった。けれどそれも、男性だから仕方ないのだろう。

壁にかかっていたフライパンに手を伸ばし、ソフィーは自分が勝手に食事など作っていいのかと小さな不安を覚えた。けれどハウルは、何度も「あんたの好きにしてくれていいんだから」と言ってくれていた。

「……それにわたし、ハウルの奥さんなのよね」

かつての自分が、彼のどこを好きになって結婚したのかはわ

からない。親切で優しい人だとは思う。だがとても、自分の夫だとは思えない。けれど確かに夫婦だったのなら、当然食事の支度は自分がしていたのだろう。なら、今だって食事を作って悪いとは思えなかった。むしろ、それぐらいやるべきなのだろうとすら思えた。

「ええ、そうよ。食事の支度ぐらいしないと。ハウルにもマイケルにも申し訳ないわ」

自分に言い聞かせるように言うと、ソフィーはフライパンに伸ばしていた手を引く込ませ、置きっぱなしだった鍋を掴んだ。まだ二人は起きて来ないのだから、先にスープから作り始めようと思ったのだ。食事は熱い物を食べてもらいたい。

適度な水を入れて、ソフィーは暖炉の炎の上に鍋を置こうとした。その時だった。

「……ソフィー。おいらを使う気かい？」

どこから声が聞こえてきたのか、ソフィーはわからなかった。聞いたことの無い声だった。空耳かとも思ったが、違ふ。じつと、自分を見つめてくる二つの瞳があった。

暖炉の中、それは、今ソフィーが鍋を置こうとしている火そのものだった。赤かった火が様々な色になる。あつという間に、それは青緑色の炎になった。どうして火がそんな色になるのだろう。炎はゆらゆらと揺れて、そこに浮かんだ模様が、ソフィーにはまるで人の顔のように見えた。

ソフィーは心臓がばくばく鳴るのを感じた。今までしゃべる炎など見たことはなかったし、想像したことすらなかった。どうしよう。どうすればいいのだろう。鍋を持ったまま固まり、ソフィーは炎から目を逸らすこともできずに、必死になって考えた。炎は、薄暗い部屋の中で不気味に明るく光っていた。思わずソフィーはぶるっと身体を奮わせた。ハウルを呼んだ方が

いいのだろうか。暖炉にいつの間にか、しゃべる炎が居ると、ハウルに教えた方がいいのだろうか。

そこまで考えて、ソフィーはふと気づいた。仮にも王室付き魔法使いのハウルが、例えばいつの間にか自分の家に侵入してきた正体不明の炎に気づかないなんてことが、果たしてあるのだろうか？ 何の根拠も無かったが、ソフィーはそんなはずないと思った。となればこの炎は、決して悪い物ではないのだ。むしろ、ハウルが気づいてここに置いているのなら、この炎もまたこの家の一員ということになるのではないだろうか。

ソフィーはそう自分に言い聞かせると、鍋を持った手に力をこめながら、口元に笑顔を浮かべた。笑うことによつて余裕ができたのか、この炎がそれほど怖い存在にも見えなくなってきた。

「ええ。ハウルとマイケルのために、スープを作りたいの。もちろんわたしも食べるけど。あなたに協力してもらいたいんだけど、嫌かしら？」

「おいらは悪魔だぜ」

「悪魔？」

まじまじと、ソフィーは揺らめく炎を見つめた。にやつと炎が笑ったような気がしたが、よくはわからない。

「悪魔って、暖炉にいるものとは思わなかったわ」

「おいら、ここが気に入ってるんだ。何せ長年いたからね。つい癖になっちゃった」

「他の悪魔も、みんな暖炉に住んでるの？」

「さあね。他の悪魔がどうしてるのかなんて知らないし、知ってたって、そう簡単に教えてやるもんか」

その声音が、まるで小さな子供が「秘密なんだから！」と自慢げに言っている時のものに似ていたので、思わずソフィーは

小さく笑いを漏らしてしまった。

「ねえじゃあ、素敵な暖炉の悪魔さん。わたし、これからキャベツとベーコンのスープを作ろうと思ってるんだけど、ベーコンはお好きかしら？」

「おいら、燃やせるものなら何でも好きだよ。嫌いなのは水だね。おいら消されちゃったらたまらないもん」

「それなら、スープを作る協力をしてくれたら、あなたにベーコンをあげるわ。それでどうかしら」

期待をこめて見下ろしながら言うと、悪魔は「いいね」と嬉しそうに言った。悪魔がベーコンでつれるとは思わなかったから、ソフィーもそれには喜んだ。

「あんたはスープを作るし、おいらはベーコンが食べれるし。後はあんたがお湯を吹きこぼしたりしないでくれれば、言うこと無しだね」

「大丈夫よ。ちゃんと見てるから」

持ったままだった鍋を、ソフィーはそつと悪魔の上に置いた。悪魔は大人しく鍋の下敷きになっていた。鍋の横から、ちろちろと炎が覗いている。お湯が沸くまでの間に、ソフィーは皿に乗っていたベーコンを細長く切り、キャベツも食べやすい大きさに切っていった。まな板の上に乗ったそれを、ぎゅっと鍋の中に入れていく。お湯はぐつぐつと言っていたから、キャベツもベーコンもすぐに煮えるだろう。約束通り、ソフィーは鍋が吹き零れないよう、きちんと見ていることにした。

「ねえそういえば、あなた、名前はあるの？ それとも、悪魔って名前は無いの？」

「あるよ。おいらはカルシファアさ」

「そう、カルシファア。いい名前ね」

ソフィーも次いで名乗ろうとして、一番初めに、カルシファ

ーから名前を呼ばれていたことを思い出した。

鍋をかき混ぜながら、今は表情の見えないカルシファーに向かって、ソフィーはゆっくりと問いかけた。

「カルシファー。あなたはわたしを知ってるの？」

「知ってるよ」

カルシファーの返事はそれだけだった。自分とカルシファーが、以前はどんな関係だったのか、だからソフィーは何も掴むことはできなかった。以前もこうして料理をしていたのだろうか。聞いてみようかとも思ったが、カルシファーが答えてくれるかどうかわからなかった。

見つけた調味料で味付けをしていると、ふいにカルシファーが小声で言った。

「……お帰り、ソフィー」

ソフィーは手を止めて、鍋の下のカルシファーを見た。表情はわからない。胸の奥がつんとした。お帰り。昨日マイケルに言われた時にも思った。どうしてこんなに切なくなるのだろう。申し訳なさとも違う、今まで味わったことのないその感情。

「ただいま、カルシファー」

水滴が一つ。

鍋の中に、落ちて行った。

だれに起こされるともなく起き出したハウルは、それからしばらくの間ベッドの上でぼうつと時間を過ごしていた。目覚めはいつも悪かった。低血圧というわけではないが、どうして心地良い目覚めはやってこない。ベッドの中で、ひたすら脳が活性化するまでの時間を待つ。いつになっても、頭の中が震がかったような感覚が付きまとう。頭を振って、ハウルはベッド

から降りた。

着替えるのも面倒だった。冬は何もかもが億劫になっていけない。それを言うのなら夏もそうだった。我儘と言うのかもしれないと自嘲気味な笑みをもらして、一番手前にあった洋服を引き寄せて手早く着替えた。

吐く息が白くて、冬だと実感して、何をそんな今更な、と時の流れに遅れている自分をあざ笑う。朝はどうしてこんなに頭の回転が遅くなるのだろう。階段を下りながら、ブーツの立てる音がやけに大きく耳を貫いた。そうして違う音も。

ごとんと、大きな音が鳴った。階段が終わり、床に足を置いた時に。まるで自己主張の音だった。

「……あ、ハウル、おはよう」

振り返ったソフィー、ソフィー、ソフィー。

ソフィーが暖炉の前で鍋をかき混ぜていた。髪を一つにまとめて、木べらで鍋をかき混ぜていたソフィーは振り返った。そうして言った。ハウル、おはよう。ハウル、おはよう。おはよう——。その声がずっとハウルの頭の中でリフレインしていた。何度も何度も。

それは切望していた声だった。

「あの、早く目が覚めちゃって……それであの、朝食、作ってただけ……迷惑じゃ、無かったかしら」

おずおずとそんなことを問いかけてくるソフィーに、何を馬鹿なことをとハウルは笑い出したくなった。

朝一番に起きて朝食を作っているだなんて、それは当たり前のことだった。ソフィーのいる当たり前の日常だった。幸せな日々が再現されているかのようなこの瞬間。ハウルはまるで錯覚しそうになった。ソフィーはここにいる。そうして食事を作っている。何も変わらない日常だと。何も無かったのだと。

その夢に身を委ねることができれば、それはどれほど幸せなことだったのだろう。夢でもいいから見たいと望まないわけではなかった。けれどそれを望んだ瞬間にも、全ては終わってしまふとわかっていた。

捕まっただけじゃない。

誘惑に負けた瞬間、その刹那、全ては無くなるのだ。

「迷惑だなんて、そんなことあるはずないだろう？」

ハウルは笑顔を浮かべた。努めて笑顔を浮かべた。ソフィーのこんな様子を見ることが、何よりも幸せだと思えた。

「久しぶりにソフィーの手料理が食べれるなんて嬉しいよ。

僕は料理が上手いわけじゃないからさ。でもソフィー、食事の作り方は覚えてるんだ？」

「ああ、そういえば……」

ハウルに言われて初めてソフィーはそれに気づいたようだった。無意識に料理を始めていたのだろうか。だとしたら、それはずいぶんとソフィーらしいと思った。昨日、掃除をしてもいいかと言った時にも思った。確かにソフィーなのだと実感して、それがハウルには嬉しかった。

「意識してないけど、そうね、覚えてるわ。前もわたし、こうしてやってたのかしら？　だとしたら、身体がその時の習慣を覚えてるのかしらね」

ソフィーはふふつと笑った。自分が何かを覚えていたというのが、真つ白な彼女には嬉しいのかもしれない。けれどハウルは、純粹にそれを喜ぶことができなかった。

料理なんて。思っただけじゃないとわかっていても、それでも広がる屈折した思い。

料理なんて。料理なんて。そんなものは何一つ覚えていなくて良かった。彼女の手料理が食べれなくとも、それでも、ソフ

イーが今までの自分との思い出を、一つでもいいから覚えていてくれることの方がずっとずっと大きかった。

望んでも仕方のないことだと、わかっても。

ハウルはぎゅつと拳を握った。ソフィーにはわからないように。顔には笑顔を浮かべたまま。鍋をどかされ、カルシファアと目が合った。カルシファアはいつも通りに見えた。このソフィーを前にして、あの火の悪魔は何を思っているのだろう。

「カルシファアが、よくかかんでくれたね」

「お礼にベーコンをあげるって言ったら、ちゃんと協力してくれたわ。優しい悪魔なのね」

「買収かい？」

つい、ハウルの声は小馬鹿にしたような響きが混じってしまった。自分はずいぶん長い時間をかけてソフィーと会話ができるまでに至ったというのに、この短い時間でそれを成し遂げてしまったカルシファアが憎らしかった。

しまったとハウルは内心で悔やんだが、ソフィーはハウルの声音に混じった他の色には気づかなかったのか、変わらぬ笑顔のままだった。それに安心すると同時に、以前の彼女ならば気づいたはずだと、そう思ってしまう自分は何て情けないのだろう。

「どうしてカルシファアのこと、教えてくれなかったの？」

ソフィーの声には、咎めるような響きは無かった。ただ純粹に、不思議がっているようだった。

「僕はだれにだって、カルシファアを紹介するようなことはないよ。この家に来た奴は、カルシファアに気づいて仲良くなるか、怯えるか、それとも気づかないかのどれかなんだ。そういうことになっている」

「そう。……わたしは、カルシファアと仲良くなったことにな

るのかしら？」

後半は、当の本人に向けられているものだった。皿から一枚、生のベーコンを手で取ってカルシファアの口の中に落としながらソフィーは尋ねた。

「そうだね。あんたがおいらをこき使わないって約束してくれるのなら、そういうことにしてもいいかもね」

「だれかあなたをこき使ったりするの？」

「ソフィーの後ろにいる男に聞いてみるんだね」

カルシファアは美味しそうにベーコンを食べながら言った。ソフィーは振り返ってハウルを見る。まじまじとしたその視線に、そういえばいつからか、まっすぐ見てくれるようになったなど、ハウルはそんなことを考える。

「ハウル。あなた、カルシファアをこき使うの？」

「ちよつと頼み事をする、そいつはすぐ嫌な顔をするんだ。大袈裟なんだよ」

「嘘言うなよ！ 朝から晩までおいらをこき使ってるくせにさ。ハウルが風呂に入るだけで、おいらもうくたくたになるんだからな！」

暖炉から飛び上がるようにして言ったカルシファアは、身体がぐっと大きくなり、ソフィーは驚いたようだった。けれど怯えている様子は無い。順応能力が高いね、とハウルは胸中で呟いた。

「おまえはとくにする仕事もないんだから、それぐらいで文句言うなよ。ほら、カルシファア、風呂に熱いお湯を送って。朝食の前に一風呂浴びたいんだ」

「ほら、すぐそうやってこき使うんだ！」

カルシファアの文句はいつものことだったから、ハウルは気にせず浴室へと向かって行った。扉を閉める前に、ソフィーの

視線を感じて振り返る。ソフィーは戸惑ったように自分を見ていた。浴室から顔だけ出した格好で、ハウルは言った。

「風呂から出たら朝食にしたいんだ。もう少ししたらマイケルも降りてくるだろうから、待つてくれる？」

「ええ、わかったわ」

ソフィーはこくりと頷いた。笑顔を返して、ハウルは扉を閉めた。このもやもやとした不快感を、今はとにかく洗い流してしまいたかった。

それからしばらくの間、ソフィーは家中を掃除することで日々を過ごしていた。確かに掃除をする場所は多々あったが、それよりも少し掃除に精を出すと、すぐさまハウルが「無理をしちゃダメだよ」と休憩に誘うのだから、掃除はなかなか進まない。大丈夫、とソフィーは言おうとしたが、ハウルが心底から自分の身を案じてくれていることはわかっていたし、それにハウルだけでなくマイケルまでもが、同じような視線で見ていることには気づいていた。ここは彼らの言うことに大人しく従っていた方がいいようだと思ふき、ソフィーはある程度の掃除をすればお茶を飲み、時には昼寝をしようと思ふことすらあった。確かに身体は、まだ長時間の労働には耐えられないようだった。あれほどの間病院のベッドの上で過ごしていれば、それも当然なのだろうか。

それにソフィーは、全ての掃除を終わらしてしまうことを恐れてもいた。掃除が終わってしまったら、次に何をすればいいのかわからない。退屈な時間が訪れることをソフィーは恐れていた。訪れるそんな時間は、いつだってソフィーに余計なことばかりを考えさせた。思い出したくても思い出せない、過去の自分、そうしてそんな自分と繋がりのある色々な人のことを。ハウルのことを。

昨日までに家中の埃をカルシファーに燃してもらい、溜まっていた洋服を洗い、カーテンを洗い窓ガラスを拭いた。床も磨き食器も全て片付け、そうして一通りやることは全てこなしってしまった。

そうした掃除の合間に、ハウルはソフィーを色々な所へ連れて行った。生まれ育ったというがやがや町。マーサの働いてい

るチェザリーにも顔を出し、そこでケーキを買った。キングズベリーでは、他の町とは違ったその賑やかさにソフィーは驚いた。近くから見た王宮の輝きにも。ハウルは自分の職業柄、王宮の中にも入れると言ったが、ソフィーは丁寧にその申し出を断った。あまりの人の多さに酔いそうだった。眩し過ぎて目が痛い。

ソフィーはハウルに連れられて出かけるようになるまで、一つの扉から様々な場所に行けることを知らなかった。とつてを回して扉を開けるだけで、その先に広がる光景は変わってしまう。目を丸くして、何度も何度も扉を開けるソフィーを見て、ハウルはおかしそうに笑っていた。あらかじめ教えてくれないのが悪いんじゃないのと、ソフィーはわずかに唇を失わせた。

「どうしてこんな、ややこしい真似をするの？ 色々な場所に同時に存在してるの？ それとも、色々な場所が一つに繋がっているの、どっち？」

ここにきてソフィーは、ハウルがはじめ自分に向かって言った、好奇心旺盛という言葉は嘘ではなかったのだということを知った。一度不思議に思うと、どうしてもそれが気になって仕方がないのだ。

ハウルは笑って答えた。

「どっちでもあるし、どっちでもないっていうべきだね。好きなように思っていればいいさ。だって便利だろう？ こうしておけば、マイケルは気軽にマーサに会いにいけるし、僕だって仕事に行きやすいしね」

ソフィーが尋ねても、それについてハウルが明確な答えを返してくることは少なかった。ほとんどが曖昧な答えばかりで、ソフィーはいつも首をかしげていた。魔法使いというのはこれだから！ けれどそれをカルシファーに話してみれば、「あいつ

は昔からあんな感じだよ」というから、あれは魔法使い特有のものではなく、ハウル特有のものらしかった。そしてカルシファアが昔からと言うものだから、カルシファアは一体いつぐらいからハウルと知り合いなのだろうかと、今度はそれが気になった。好奇心旺盛なもの、いい加減にしくはない。

いつものように朝食を食べ、やることも無いからと、埃一つない床をそれでもさらにソフィーは箒で掃いていた。退屈だった。軽くため息をついて、何て我儘なことを考えているのだろうかと、ソフィーは自分を戒めた。けれど同時に、いつまでもこんな、ただだらしとした日々が流れていくのかと考えて、ソフィーはどうしようもない気持ちになる。

ちらりと視線を机に向けると、そこでは真剣な顔でマイケルがハウルに魔法の教えを請うていた。ソフィーはマイケルが羨ましかった。彼には早く一人前の魔法使いになるという目標があり、数日に一度、マーサのいるチェザーリに顔を出すという楽しみもある。なんて生活に張りがあることだろう。今の自分とは正反対の存在だった。退屈というのは、たったそれだけで人生の意義を半分にもそれ以下にも減らしてしまう魔物のようだった。ソフィーは何だか泣きたくなかった。

「ああ、ハウルさん、ありがとうございます。やっとわかりました！」

マイケルの明るい声がした。そう言つて、散らばっていた本をかき集めていく。乱雑に机の隅に寄せると（そうするから、物は散らかるばかりで片付きやしないのだとソフィーは思う）、マイケルは慌てて二階へ駆け上がり、上着を羽織り帽子を被ってまた駆け下りてきた。

「あの、ちよつと出かけてきます。いいですよ。ね。マーサの所です。約束してる時間に遅れそうなんです」

必死に時計を見ながら言うマイケルに、ソフィーはにこやかに微笑みながら、「ええ、もちろん」と言った。マイケルは安心したように、「じゃあ、行ってきます！」と駆け足でドアから出て行った。

「お土産に、チョコレートのケーキを買ってきてくれるといいんだけどね」

読んでいた本から顔を上げて、ハウルは小さく微笑みながらそう言った。この前、二人でチェザーリに行った時にも、チョコレートがくるくると巻かれたケーキを買っていたことを思い出す。チョコレートが好きなのかしら、とソフィーは思った。整った顔と似合わないような気がして、何だか不思議な感じだった。大人の男の人は、甘い物など食べないような気がしていたのだけれど。

「マイケルとマーサは、本当に仲がいいのね」

箒を動かしながらソフィーは言った。二人きりの部屋の中、前よりも居心地の悪さを感じることはなかった。ハウルがそんなこと、何も気にしていないというのがわかったからなのかもしれない。些細なことを気にしているのは、いつだってソフィーだけなのだ。

「何たって将来、十人子供を作るらしいからね」

「なあに、それ？」

「マイケルが言っていたんだよ。『マーサが、十人子供を欲しいって言うんです。どうしましょう、お金がたくさんかかりますよね』って。苦労してきた所為か、妙にあの年で現実的なんだから！」

ハウルは思い出して笑っていた。ソフィーは目を丸くした。どうしてマーサが十人も子供を欲しがるのはわからないが、それではマイケルもさぞかし大変なことだろう。けれどそんな

二人のやり取りすらも、想像すると微笑ましくて、あの二人にはぜひとも幸せになつてもらいたいとソフィーは思った。

ハウルは笑つた後、また視線を本に戻して行つた。ソフィーはハウルが読書をしている姿を何度も目にしていた。暇さえあれば、ハウルは本を片手にソファアーに腰掛けていた。仕事をしているのかとも思ったがそうではなく、ハウルはただ暇だからそうしているようだった。

ハウルも退屈なのだろう。それはそのはずだった。長いこと仕事にも行かず、毎日を家の中ばかりで過ごしているのだから。ただ申し訳ないと思つた。これが彼の義務なのだとしたら、そつちの方がよっぽど気が楽だった。決してそうではなく、彼はただの善意で、自分を心配して傍にいてくれるのだから――申し訳ないと、そう思うことこそが余計なものだとはわかつて、それでもソフィーはそう思わずにはいられなかった。彼が与えてくれる想いの十分の一も、自分が返せないことがただ辛かった。不当だと思つた。気持ちがちつとも釣り合っていない。

重かつた。

「ねえハウル。仕事、行つていいのよ？」

どんな顔をすればいいのかわからなかったから、ソフィーはハウルに背を向けて、一生懸命床を掃いているふりをしながらそう言つた。ハウルが本を閉じたことが、音でわかつた。さりげなさを装つた言葉だったが、そんなことはハウルには見抜かれていただろうとソフィーにはわかつていた。

「僕はあんたの傍にいたいんだよ」

「……ええ、それはね、嬉しいのよ」

自分のことを想つてくれている人がある。それは純粹に嬉しいと思う。それでも申し訳なさは消えはしない。

この気持ちを、どういえばハウルに伝わるのだろうかとソフィーは悩んだ。自分が悪いのだとソフィーはわかつていた。ハウルはただ自分のことだけを考へてくれている。見返りなどは求めない。それをただ受け入れ、ありがとうと言つて微笑むだけで、きつと彼は喜ぶのだろう。ソフィーはそう思つた。けれどもできない。ソフィーにはそれができないのだ。ハウルの気持ちを丸ごと受け止めることは難しかった。理解はしても否と叫ぶ心がある。

ハウルのことは好きだと思へるようになっていた。いい人だと思う。掃除嫌いという点において、そして問いかけた質問に曖昧な答えを返すというところでは眉を寄せたが、けれどそれぐらいのことで嫌えるはずもない人だった。とてつもなく優しい人だと思つた。だから辛かつた。

「嬉しいけど、嫌かい？」

どんな顔でハウルが問いかけてきているのか、ソフィーにはわからなかった。振り向くことができなかった。彼の顔を見てしまつたら、とたんに謝つてしまうであろう自分がいることをソフィーは知つていた。

箸の柄をぎゅつと握つた。言いたいことはきちんと伝えなければならぬと思つた。そうしなければいけないと、だれに言われたわけでもなくそう思つた。

「……あのね、あなたの気持ちは、本当に嬉しいのよ。良くしてくれているのがわかるもの。だけどね、その、わたしの所為で仕事ができないのつて……やつぱり、嫌なのよ」

「そんなこと、気にしなくていいって言つてるだろう？僕は元から仕事なんて好きじゃないんだ。休めて清々してるぐらいなんだから」

ハウルのその台詞は嘘ではないのだろう。嫌なのならどうし

てその仕事に就いているのかはわからないが、ハウルがけつこ
うな面倒臭がりであることはわかっていた。だから掃除も嫌
いで、だから仕事も嫌いなのだろうか。

「だけど、困ってる人はいるはずだわ」

自分の所為でハウルは仕事を休み、自分の所為でどこか困
っている人がいる。自分がここに存在しているだけで、一体ど
れほどの人が苦勞しているのだろうか。筆頭がハウルだというこ
とは考えるまでもなかった。自分の見えないところで、ハウ
ルがどれだけ思い悩んでいるかなんて。

「そんなこと、気にしないでいいんだよ」

ハウルがそう言うだろうことはわかっていた。気にしないで
いい、好きにしていいい、それはここで暮らし始めてから、もう
何度も何度も言われた言葉。

わかってはいるようでわかることのできないその言葉。

「できるわけないじゃない……だって、そんなの！」

「僕が、あんたと仕事、どっちを選ぶと思ってるの？」

「そんなことじゃないのよ！」

とうとうソフィーは振り返った。いまだソファアの上に座っ
ているものだと思っていたハウルは、思ったよりも至近
距離にいたことに驚いた。あと一歩で触れられそうなその距離。
けれど触れることのないその大きな近距離。

平行線だ、とソフィーは思った。どこまで行っても交じること
とはないのだろうか。自分はハウルの気持ちを受け入れること
はできないし、ハウルは自分の気持ちを受け入れることはでき
ないだろう。

どうしてなのだろうと、ソフィーは悲しくなった。自分達の
間にある程度の好意があることは間違えようもないというのに、
どうしてそれが上手く交わらないのだろう。

どれだけの時間が流れたのかはわからない。何でもない会話
だというのに、柄を握る手にじんわりと汗が浮かんできた。

ソフィーはふと考えた。今の自分だからいけないのだろうか
と。それならば、それならば――

「前のわたしなら、あなたが仕事に行かなかったら、どうして
いた？」

前のわたしが、とソフィーが聞いたのは、これが初めてのこ
とだった。まるで意地を張っているかのように、ソフィーは以
前の自分がどうしていたのかと、そうハウルやマイケルに尋ね
ることはなかったというのに。

けれどソフィーは思ったのだ。自分ではダメなのだと。ハウ
ルには『記憶を無くす前のソフィー』でなければダメなのだと。
「……きつと、烈火のごとく怒り狂ったと思うよ」

搾り出すようにして呟いたその声に、自分はもしかしてとん
でもなく残酷なことをしてしまったのではないのかと、ソフィ
ーはそう後悔した。

ハウルが愛したソフィーの顔で、ソフィーの声で。そうして
彼に前のわたしはどうしていたと、そう尋ねることは――ハ
ウルにとつては、拷問にも等しいことではないのだろうか。

浮かんだその、絶対的な可能性を否定するかのよう、ソフ
イーは無理やり顔に笑顔を浮かべた。きつと引ききつっているで
あろう笑顔で、ハウルを見つめた。

「じゃあ、わたしも怒ればいいのかしら。そうしたら、あなた
は仕事に行ってくれるのかしら？」

どうしてここまで、自分がハウルを仕事に行かせたいのかわ
からなかった。理屈ではなかったのかもしれない。自分がいる
所為で、彼に日常生活を妨げるようなことをしてほしくなかつ
たのかもしれない。ソフィーにもよくわからない。

時計の音と、それに連動するかのようなカルシファアが薪を燃やす音が大きくなる中、折れたのはハウルの方だった。

「——わかった。あんたがそこまで言うのなら、僕はまたつまらない仕事に戻ることにするさ」

それは望んだはずの言葉だというのに、どうしてか痛くソフィーの耳には突き刺さった。彼が本当にそれを望んではないのと知っていたからかもしれない。彼は栄えある今の職業を、心底煩わしいと思っているようだった。

ソフィーが顔を歪めていることに気づいたのだろう。ハウルは軽い笑顔を浮かべた。何でも無いというかのように。

「気にすることは無いよ。そろそろ潮時だとも思っていたんだ。サリマン……ああ、同僚で、レティーの旦那さんだけだね。そういったら、いい加減仕事に復帰しろって催促されていたしさ。いいんだよ、ソフィーがそこまで言うのなら、僕も安心して仕事に戻る事ができるしね」

嘘だ、とソフィーは思った。何を根拠にそう思ったのかはわからない。それでも今のハウルの言葉を、そのままそっくり信じることはできなかった。

自分を傷つけないためにハウルは平気で嘘をつく。

それは大した嘘ではないのかもしれない。人によっては、社交辞令だと言って済ませてしまう類のものなのかもしれない。けれどソフィーにはそうすることはできなかった。

ただ痛かった。それを、上手くハウルに伝えることもできなかった。何が悪いのかもわからない。全て自分が悪いような気さえした。

「明日から仕事に戻るよ。今日はもうそんな気にはなれないからさ。その代わり、今日はこれから僕に付き合ってくれないかい？ 美味しいレストランがあるんだ。二人で行こう」

笑顔で誘いをかけてくるハウルに、もちろん断る理由なんて無かった。この人はたっくさんの好意を示してくれる。その気持ちを返さなくてはならないと思った。

頷いて、視線を感じて暖炉に目を向けると、鎮座していたカルシファアと目が合った。黙って見つめるカルシファアが何を言いたいのか、ソフィーはわからなかった。

「ソフィーを義務感で傍に置かせるのは、どうかと思うな」

暖炉の前を通りかかった時、ふいにそんな声が聞こえてきた。真夜中のことだった。ハウルは足を止め、無表情に暖炉の中を振り返った。青く燃えるカルシファアの目だけが、暗闇の中でらんらんと輝いていた。

「……別に僕は、義務感でソフィーを傍に置いているわけじゃないさ」

「馬鹿。逆だよ」

わからないのかとその悪魔の目が問う。ハウルは首を振った。ソフィーが義務感で自分の傍にいるだなんて、そんなことは認めたくなかった。認められるはずがなかった。

「言っておくけど、僕は無理やりにこの家にソフィーを連れてきたわけじゃない。ソフィーの意見を聞いた。彼女の意思を尊重したんだ」

「尊重した気になってるだけじゃないのかよ？」

どうしてこの悪魔は、耳に痛いことばかりを言ってくるのだろう。まるでその光景を見てきたかのように。おまえに何がわ

かるのかと、そう罵倒することは簡単だった。それはていどのいい自己満足に過ぎなかった。

「ソフィーのおまえを見る目、まるで、召使が主人の命令に従ってるみたいだぜ。一々顔色伺ってさ。ハウルの言うことならなんでも叶えなきゃならないってさ」

「それで僕にどうしろって!」

カルシファーが何を言いたいのかわからなかった。それで自分にどうしろと言うのだろう。できることなら何でもしてきているつもりだった。ただ待つしかないとわかってるから、彼女を責め立てても仕方ないとわかってるから、だからそうしているつもりだった。

これ以上カルシファーは何をしろと言うのだろう。

「そんなの自分で考えるんだな」

「……何だよそれは」

無責任なことこの上ない悪魔だと思った。その思いは顔にそのまま出ていたのか、「普段のおまえだってこうだろう? ソフィーの質問にはぐらかしてばっかださ」と容赦なく言われた。返す言葉なんてなかった。いつだって、この悪魔には。

「ただ、今の状況は、ソフィーにはよくないって言ってるんだよ。ソフィーが一日に何回ため息をついてるのか、おまえだってずっと見てるんだからわかってるだろう?」

これ以上、カルシファーの言葉を聞いていたくなかった。ハウルは足早に暖炉の前を離れた。今はもう暖炉から自由に離れることのできるカルシファーは、追ってくることはなかった。

そうして明けて翌日から、ハウルはまた以前のように王宮へと仕事に向いて行った。ソフィーの作った朝食を食べてソフィーに見送られて家を出て、それはまるで以前と同じような朝の風景だった。扉を開けた瞬間の外の冷気が見に染みて辛かつ

た。

唐突に職場に姿を現したハウルにサリマンは驚き、けれど何かを言うわけでもなく、「仕事がたくさん溜まってるぞ」とそっけなく言うだけだった。まるで昨日もそうしていたかのように以前の日常はごくゆるやかに始まって行った。何とも不思議な感覚だった。

つまらない紙つぺらを見ている間中、ずっと早く家に帰りたいと、そのことばかりをハウルは考えていた。家に帰りたくて帰りたくて仕方がなかった。ソフィーの顔が見たかった。以前のように抱きしめられなくともキスができなくとも、それでもあのぎこちない笑顔でも、お帰りなさいと言われることがただ嬉しかった。切なさに胸が締まるあの笑顔。

「あれ、この魔法式、見たことがないけどどうしたの?」

王宮の周りに張り巡らされた結界の魔法式の一覧表に見たことのない物が混じっていた。書き間違いだろうかとサリマンを振り返る。

「どこだ?」

指差した先のそれを見て、サリマンは軽い笑顔で「ああ」と頷いた。どうやら書き間違いの類ではないようだ。つた。

「おまえが休んでいる間に新しく発見された式を利用してみたい。こうすることによって、ハプロワプスの第三条と第四条の式が短縮できる。効率的だと思ったが、どうだ?」

ハウルは言われたことを頭の中で考えてみた。浮かべた式に今のそれを当てはめてみる。いくつかの難解な式が頭の中を駆け巡っていったが、そんなもの、ハウルにとってはどうということもなかった。数秒沈黙した末に、「ああ、いいね」と小さく呟いた。自分がいなくてもどうにかなるんじゃないかと思いい、それはべつに悔しくも何ともなかった。ただ呆れた。自分の存

在する価値なんて、どこにも無いような気がして仕方なかった。何のために今生きているのかと問われれば、それは。

……まだ、彼女が生きているから。ただ、それだけのために。

「失礼します」

唐突に扉が開かれた。追加の仕事を持ってきた部下だった。見た瞬間に心臓が跳ね上がった。持っていた書類がばさっと床に落ちて行った。

「ハウル？」

訝しげなサリマンの声が遠くに聞こえた。大丈夫だと答えようとしたが、声は言葉になっただけでなかった。

扉が開きそうして入ってきた男が、また何を言い出すのかとそれが怖かった。あの時のように。あの時のように。手紙を持って来るのではないかとそれが怖かった。

馬鹿げているとハウルは笑った。そんなことを、数ヶ月も前のことを、どうして今更になって怯えているのかと自分自身を嘲りたくなった。サリマンは何もわかってはいないのだろう。眉を寄せ、やってきた男から追加の書類を受け取っている。日常の風景だった。自分だけがそこにいない。

心臓が、ただ、うるさかった。

日々は何事も無く流れて行った。良くも悪くもならなかった。相変わらず景色は雪に覆われていた。それでも確かに流れる時間に、ただ焦りと、そしてどうしようもないという思いだけが蓄積されていった。

ハウルは仕事に戻ってから、極端にソフィーと接する時間が短くなっていた。朝食を食べて、そうして少し休憩すればもう家を出て、夕飯前に帰ってこれることもあったが、日によって

は夜中に帰ってくることもあった。その場合、当然だがソフィーは先に休んでいた。ベッドを買おうと言ったハウルに、いらないと答えたソフィーは、初日と変わらず階段下で休んでいた。自分がいない間、ソフィーがどうしているのかと心配になつて、それとなくマイケルに尋ねた。

「ソフィーさんですか？ 掃除して、買い物に行つて、食事を作つて、いつも通りですよ。カルシファアともよくおしゃべりしてます。マーサやレティーさんもよく訪ねて来てくれますからね」

安心すると同時に物足りなさを覚えた。自分はこんなにもソフィーのことばかりを思っているのに、彼女はそんなこととはないのだと知った。当然のことだろうと思いつつも、自分ばかりが馬鹿のようで、やりきれない思いばかりが胸に込み上げた。

その日は久しぶりの休日だった。休むつもりなどは無かったが、サリマンが気を使って用意してくれた休日だった。「レティーが心配しているからな」と言うサリマンに、「あんたも十分素直じゃないね」と返しておくことは忘れなかった。

「今日、お休みなのか？」

いつもよりだいぶゆっくりした時間に降りてきたハウルに、ソフィーは驚いたようにわずかに目を大きくしてそう尋ねてきた。そういえば昨日、今日は休みだということをソフィーに告げることを忘れていたかもしれない。以前だったら、待ち遠しかった休日を、そんなころと忘れようなどとはなかったというのに。

ソフィーは日常の中でハウルを起こすことはしなかった。そんなことを自分するのはお門違いだと思っているのかもしれないし、思いついてすらいらないのかもしれない。起こされずと

も毎日決まった時間に起きることのできる自分を、ハウルは今のソフィーと暮らし始めてから初めて知った。

「うん。休みなんだ。久しぶりにゆつくりすることができるよ」いつもの習慣でテーブルへと目を走らせる。普段であれば、ハウルが降りてくる頃にはその上には温かな朝食が用意されていた。しかし今日はハウルの起床が遅かったため、その上には何も無かった。

「あの、降りてこないから、ハウルの分はまだよそってないの。ちゃんと作ってあるのよ？」

ハウルの視線に気づき、慌てたようにソフィーは言った。どうしてソフィーがそんなに慌てるのかハウルはわからなかった。しかしカルシファーに言われた台詞がすぐさま脳裏に蘇ってきた。召使が主人の命令に従っているみたい。ああ確かにそうだなとハウルは心の中で苦笑した。ソフィーはいっただって自分に遠慮しているばかりで、今だって気遣わしげな視線で見上げてきている。どうして気づかなかったのだろうと問いかけ、気づきたくなかったからだとわかった。

なんて、愚かな、自分。

目隠しをして見た世界なんて、そこにどれだけの価値があるのか自分が一番よくわかっているだろうというのに。

「ご飯、食べる？」

「……うん」

浮かべた笑みは力無いものだったのかもしれない。ソフィーは首をかしげたが、すぐさまスプーンでも入っているのだろう、鍋に向かっていった。「カルシファー、かがんでくれる？」と優しくげに言うソフィーの声を聞きながら、ハウルは自分の席にいた。鍋をかき回すソフィーの背中を、ただ見ていた。

あの背中を最後に抱きしめたのはいつだろうかと、ハウルは

ぼんやりしながら考えた。いつのことだか思い出すことはできないのに、抱きしめた感覚だけが嫌にリアルに思い出せた。特別背が低いわけでもないのに、抱きしめた背中が小さかった。そして温かかった。後ろからすっぽりと自分の両手の中に彼女を閉じ込め、頭に顎を乗せるのが好きだった。彼女の匂いを全身で感じた。幸せだった。

今もやろうと思えば、それをすることはできるのだろう。数歩歩けば触れることのできる距離にソフィーは居る。彼女は嫌がりはいないだろう。拒絶してはいけないと自分に言い聞かせているのだから。抱きしめることは簡単だった。その簡単さが難しかった。

ふと視線を感じた。鍋の下敷きになっているカルシファーだった。何か言いたげな視線で自分を見つめている。余計なことは言うなと、ハウルは瞳だけでそう釘を刺した。

手早くソフィーはベーコンエッグを作り、パンを切り、熱々のスープと新鮮なサラダを出してくれた。変わらない味だった。それに喜びを感じると共に、まるで別人が作ったかのようにまるきり違った味だったら良かったのにと考えた。

「こんな中途半端な時間に食べて、お昼は入るの？」

「その時はその時さ」

食べたい時に食べて、食べたくなければ食べなければいい。不健康だとは思ったが、だからどうしようとも思わなかった。

自由に生きることと無茶をすることは別だと、この年にもなれば嫌になるほど身に染みてわかる。けれどそれとこれとは別だった。頭では理解している。ただそれだけのことなのだ。

「ハウルはいいよな。休日だからってのんびりできてさ。おいらの仕事は全く無くなる日なんてないもん！」

暖炉の中から恨めしげな声。ハウルはカルシファーのこの手

の台詞を聞く度に、契約は解けたというのに戻ってきたのはおまえの方だろうと思う。嫌ならどこへなりとも行けばいいのだと言いたくなる。言ってしまったこともある。

「そうね。食事を作るにはあなたの力が必要だし、お風呂にだって入りたいものね。三食をパンとチーズだけで済まして、だれもお風呂に入らなければ休めるでしょうけど」

「それだけでもダメだぜ。大体、おいらがこの城を作ってるんだし、動かしてるのだっておいらなんだから。ま、最近是用事も無いから、ずっと同じ所で止まってるけどね」

「お城？ 動かしてるって、何を？」

ソフィーの目を丸くしてのその質問に、「何だよソフィー、知らないのかよ？」とカルシファーもまた目を丸くした。二人の視線は、示し合わせたようにハウルに向けられた。ハウルはパンをかじっているところだった。飲み込んでから、「改めて言う必要も無いと思ったからね」と答える。

「どうということなの？ この家、扉の他にも、まだ何か仕掛けがあるの？」

「仕掛けとかね。ソフィーはまだ行ったことがないけど、あの扉は荒地にも繋がってるんだ。そこなら城を見ることができよ。動いている所もね」

食べかけのパンを皿に置いて、ハウルは「行くかい？」とソフィーに尋ねた。食事を続ける気にはなれなかった。ソフィーが頷かないはずは無いともわかっていた。

「いいよ、行こう」

食べかけの食事はそのままに、扉まで歩いたハウルは、後に続いているソフィーを振り返って軽く指を鳴らした。現れた厚手のコートをソフィーに羽織らせてから、扉のとつてを回した。「カルシファー、僕らが外に出たら、適当に動き出して。戻る

時には呼ぶから。あんまり遠くには行くなよ」

「ちえっ。そうやっておいらをこき使うんだからさ！」

「それがおまえの仕事だろう？」

自分に課せられた役目ぐらいいはきちんとまっとうしてもらいたいねと、素っ気無く言って、ハウルは扉を開いた。

「これがお城なの？」

吹き付ける風の冷たい荒地に降り立ち、大きな城を見上げてソフィーは言った。とても驚いているようだった。それがいい意味なのか悪い意味でなのかなんて、ハウルにはすぐにわかることだった。

「そう、これが僕らの城さ」

「どうしてお城なんて作ったの？」

「ちよっと厄介な人達から逃げる時、空飛ぶ城があれば便利だと思っただ」

「ちよっと厄介な人達って？」

まるでソフィーの質問は永遠にも続くように思われて、ハウルは困った。「もう昔の話さ」とだけ言って、この会話はもう終わりであることを告げた。ソフィーはそれ以上つつこんで聞いてくることはしなかった。

「城っていうぐらいいだから、もつと豪華絢爛な様を想像していたかい？」

少し意地悪な問いかけだった。ソフィーは寒さで赤くなった顔で、「そんなこと……」と小さく言った。嘘なんてつく必要はないのにとハウルは思った。そんなことをしたって無駄なのだから。その顔を見れば、今ソフィーがどんなことを考えているかなんてすぐにわかる。

「この城の見てくれは、悪くて良かったんだ。悪名高い魔法使いハウルの城だったからね。そう簡単にやって来られても困ったしね。……あんた以外は」

「え？」

強いソフィーの眼差しにぶつかって、ハウルは自分がしゃべりすぎたことを知った。「何でもないと強く言って、ソフィーに背を向けて歩き出した。ソフィーが後についてくることは聞こえてくる足音でわかっていった。

沈黙の中、吐く息は白く濁ってすぐ消えた。ここには雪は降っていないかった。がやがや町に降ってここに降らないわけはないのだから、きつと恐らくは魔法の力が影響しているのだろう。詳しく考えることは面倒だったし、どうでも良かった。

「ほら、花畑」

コートの中ポケットに手をつつこみながら振り返れば、俯いて歩いていたソフィーが上げた顔と目が合った。ハウルはくいつと顎でその先を示した。釣られるようにソフィーは視線を動かし、そうしてすぐさま両目を大きくさせた。

「すごい！　こんなに花が……どうして？　冬なのに、こんなに。これもあなたの魔法の力なの？」

「始めはサリマンだったけどね。今は僕。それに、あんたの力でもあったんだよ。毎朝話しかけながら花を摘んでいて――」

ハウルを追い越し、寒い冬空の下咲き乱れている花に近寄って触れていたソフィーは、くるりと振り返ってハウルを見つめた。喜びと、戸惑いの混じったその双眸。

「わたしの力って？」

「……言ってなかったっけ？」

言っていないことが多いことはわかっていた。ほとんどはソフィーには話していない事柄だった。聞かれないことには答え

ない。聞かれてもはぐらかすことはよくあった。

「聞いてないわ」

思いの他強い声音でソフィーは言ったから、ハウルは軽く息を吸い込んで笑顔を浮かべて言った。

「あんたには言葉の力があるんだよ。あんたは魔女なんだ、ソフィー。あんたが力を込めて話しかければ、話しかけられたものには命が宿る。でもそんなこと、あんたには関係ないようだったけど。力の制御ができないんだ。それにソフィーは別に気にしてはいなかったし」

「……わたし、魔女なの？」

ああ、と小さくハウルは頷いた。ソフィーはこれをどう受け止めるのだろう。気になったが、ソフィーは小さく「そうなの」と呟くだけだった。特別何かを感じたわけではなさそうだった。ハウルは拍子抜けした。

「ここの花を摘んで、あんたは花屋をやっていたんだよ」

訪れた沈黙を居心地が悪いと感じ、ハウルは珍しく聞かれる前に以前のことをしゃべっていた。花に視線を戻していたソフィーがまた振り返る。「花屋？」心底驚いているようだった。魔女だと告げられた時よりも驚いているようで、ハウルにはそれらの方が不思議だった。

「そう、毎朝、ここの花を摘んでね。マイケルと二人でやっていたんだよ。僕もたまに手伝うことはあったし。季節を問わず色々な花が咲いているからね。すごく繁盛していたんだよ」

ハウルは思い出していた。ソフィーが花屋の女主人として働いていた時のことを。忙しい日々を楽しんでいたかのような彼女は、花屋で働いている時が一番楽しそうだったような気がする。キレイな花に囲まれ、やって来た客との世間話に弾んで、時たまそこにはソフィー目当てに通う若い男もいたりして、そ

うして不機嫌になる自分を見てソフィーは呆れたように笑って。目を瞑らずとも夢は容易く彼を浚って行った。彼女が呼ぶ声が聞こえることがある。幻。わかつていながらもそれに縋り付きたくなる時があった。

「あんたさえ嫌じゃなかったら、花屋を開いてみないかい？」

気づいた時にはハウルはそう言っていた。遊びに連れて行くことはあっても、ハウルがソフィーに何かをしてみないかと提案したことは初めてだった。ソフィーもそう思っていたのか、見開いた眼差しでハウルを見ていた。

「花屋をやると忙しくなると思うんだけど、でも前のあんたは楽しそうだったから……今のあんたもそうだとはいえないけど、でも、どうだろう。やるとなればマイケルは喜んで手伝ってくれるだろうし、僕も休日には手伝うから」

以前の生活を取り戻そうとしているわけではなかった。ただどうしてか、ハウルは、ソフィーにはそうしている姿が一番いいのではないかと思った。日々流れる時間の合間に彼女がため息を何度もついていることは知っていた。花屋はそのいい気分転換になるのではないかと思った。

「どうかな」

考え込んでいるのか、ソフィーは高く伸びた丈の葉を撫でながら、じつと立ち尽くしていた。

「ソフィー」

彼女が黙って考え事をしている様は、ハウルにはいつも恐怖の対象となった。いつここから出ていくと、そう言われるかと考え怖かった。そんなことはあるわけないとは思いつつも、そう言い切れるだけの根拠などは何も無かった。

「そうね」

ゆっくりと、まるでその手つきは、撫ぜる葉を愛しんでいる

かのようですらあった。

「いいかもしれないわね」

振り返ったソフィーは笑っていたから、そのことにとりあえずハウルは安心した。

「まあ、ソフィーちゃん。あなたもう大丈夫なの？ 怪我はもういいの？ まあなんて久しぶりなのかしらね！」

という言葉を、ソフィーは花屋を始めてからというものの、もう何度も何度も耳にしていた。ソフィーはその度に「ええ、はい、すっかり」と当たり障りのない言葉を返していた。ソフィーには相手がだれだかさっぱりわからないというのに、やって来る人々はソフィーのことをよく知っているようで、中年以上の女性にはよくちゃん付けで呼ばれるのがどうにも居心地が悪かった。

ハウルは近所の人々に、ソフィーのことはただの怪我で入院していたと話していたようだった。記憶を無くしたんだなんてことは言っていないようだった。嘘をついているようで心苦しかったが、余計な心配をされるのは確かに嫌だったから、ソフィーも適当に話を合わせていた。大抵の人々は「良かったわ。お大事にね」と言い去っていくだけだったから、苦労するようなどこともなかった。それにマイケルがほぼずつと傍にいてくれ、ソフィーが困っている時にはタイミグ良く口を挟んできてくれたし、客が去るといつもどんな人なのかを教えてください。あるいは会話の最中、さりげない態度で、例えば「アニータさん、パン屋さんて朝早いから大変ですよ」等と言ってくれるので、ソフィーはそうやって町の人々の顔を覚えていった。

「マイケルは、本当にいい子よね」

売り物の花の丈を揃えながら、思わずソフィーはそう呟いた。花屋を開いてからもう一週間以上になる。だんだんとソフィーも仕事に慣れてきて、開店前の仕度は自分一人で大丈夫だからと、マイケルには魔法の課題をやってもらっている。

花屋をやりだしてから、ソフィーの生活には一気に張りができた。確かに忙しくはなったが、それは今のソフィーには何よりも喜ばしいことだった。朝起きて、朝食の準備をして食べ終えたらすぐに荒地に花を摘みに行く。朝の荒地は寒かったが、それでも毎日咲き乱れる花々を見ながら歩くのはとてもいい気分転換になった。たつぷりと花を摘んで店に行き、何とか準備を終えた頃にはもう開店の時間だった。冬のこの時期、普通であれば花屋に置ける花などはほとんど無い。だというのに、色とりどりの花が置いてあるジェンキンス生花店にはたくさんの人が押し寄せた。その中には復帰した女主人会いたさのためにやって来る人もいた。ソフィーはあちこち対応に追われ、肉体的にも精神的にも疲れたが、それでもやることもなしに暗鬱とした日々を過ごすことに比べれば、それこそ天と地ほどにもかけ離れた生活だった。

「だけど、あんなにいい子なのに、マイケルには本当に悪いことをしちゃっているわね」

朝の花摘みから昼間の客相手、それから数日置きの買い物まで、何から何までマイケルを付き合わせてしまっていることが申し訳なかった。もちろんソフィーは何も言っていない。マイケルの方から何かと手伝ってくれているのだ。その心遣いは嬉しいし、本当に助かってもらっているのだが、これではマイケルの自由な時間などはほとんど無いだろう。花屋を開いてからというものの、マイケルは一度もマーサに会いに行っていないのではないだろう。

マイケルに時間をあげたかったが、一人で何時間も客の相手をするのは、今のソフィーには少々まだ不安があった。

「マイケルには悪いけど、もう少しの間は手伝ってもらわないといけないわね」

けれど、それももう少しの間だけだ。もう少しして、一人でも何とかできるぐらいに慣れてきたら、適度にマイケルにも時間をあげなくては。自分の所為でマイケルがマーサに怒られるようなことがあつては大変だった。

「あんたもマイケルを見習って、しつかり働いてちょうだいね。そう、キレイにしゃんと咲いてちょうだい。そうしたら立派な紳士が、きつとあんたを買って行ってくれるでしょうよ」

バケツに入ったヒナギクに話しかけてから、ソフィーは辺りを見回した。大体の準備はこれでいいだろう。もう少しすればマイケルが来て、そうして店は開店の時間を迎える。

「本当に、働き者な男の子だわ」

自分はこれに楽しさを感じているからいいものの、マイケルはそうではない。彼のやるべきことは魔法の勉強であつて、花屋の手伝いではないはずだ。それを思うと本当に申し訳なさが込み上げてきた。マイケルのことを思い出しながら、ソフィーはふと、花屋を始めるきっかけになつたハウルのことも思い出していた。

「あの人が花屋を始めたらどうかつて言つたくせに、一番被害を被つてるのはマイケルだなんて、何だか割りに合わない話よね」

ソフィーはだんだん、自分のハウルに対する印象が変わつてきていることに気づいていた。初めはただ優しい人だと思つていた。今でもそれは変わらない。お土産と言つて渡される甘いお菓子を食べる度に、あの人はどんな顔でこれを買ってくるのだらうと思うと、とんでもなく優しい人なのだと身に染みて思う。

「だけど、ただの優しい人じゃないみたいね」

立派な薔薇の花びらをつつきながらソフィーは言つた。

「こつちの質問にちつとも答えてくれないのは、どういうわけなのかしら」

それがソフィーにはさつぱりわからなかった。一日も早く記憶を思い出すためにも、以前の生活を細かく知ることが必要だろうと思うのに、ハウルはちつとも話してはくれないのだ。おかげでソフィーは、以前の自分がどんな人物であつたのか、いまだによくわからない。好きなように食事を作つて掃除をしているが、果たしてこれでいいものなのだろうか。

「わたしが知っている『ソフィー』のことなんて、がやがや町で生まれ育つて、二人の可愛い妹がいて、キングズベリーが苦手なこと、それに花屋をやつていたことぐらいよ。仮にも自分のことだつていうのに、これでいいのかしらね？」

ちつとも良くない気がしたが、いくら問いかけてもハウルはさらりと流してしまうのだから仕方ない。カルシファアが昔からハウルはこうだと言つていたから、あれはハウルの性格なのだろうか。人の質問に答えない性格だなんて、一体どんな性格悪なのだろうかとソフィーは思う。

自分のことはさつぱりわからないが、マイケルのことなら詳しくなつていた。両親を亡くして偶然ハウルの家にやつてきたこと、成り行きで弟子になつたこと、マーサと出会つた時のこと、誕生日には毎年カルシファアが花火を打ち上げてくれること。後半になるにつれて、マイケルはだんだん照れたようにしやべり続けていた。それが可愛くて楽しくて、ソフィーは「もっと話して。あなたのこと知りたいわ」と続きをねだつた。どうしてかマイケルは赤かつた顔をもつと赤くさせた。

客が引いた時間にはマイケルと他愛もない会話をするのが常で、そこでソフィーは、マイケルが鶏肉のパイ包みを好きなことを知り、今日の夕飯のメニューはもうそれに決まつていた。

いつものお札に、夕飯ぐらいは好物を食べてもらいたかった。
「……美味しいって言ってくれるといいんだけど」

パイ生地はもう昨日のうちに作っていたから、今日の花屋の仕事が終わってからでも、十分夕飯には間に合うはずだった。作るのは初めてだけれど、作り方はわかっていたから、きつと以前に作ったことがあるのだろう。体が覚えていたのだ。

時計を見る。開店時間が迫っていた。と、店の方ではない扉が開く音がした。振り返れば、そこには馴染んだマイケルの顔。

「すみません、ソフィーさん。もう準備終わりましたか？」
「ええ、大丈夫よ。準備ぐらいなら一人でもできるわ」

任せちゃってすみませんと恐縮するマイケルに、「やることがあるんだから、仕方ないでしょう？」とソフィーは優しく微笑んだ。マイケルが店のドアにかかった札を「open」に変えると、すぐさま客がやってきた。ソフィーは元氣良く「いらっしやいませ！」と声をかけた。一日が始まるのが、何だか楽しみになっていた。

「今日はまたずいぶんと、おいらをこき使う気みたいだな？」

ソフィーがカゴから取り出した今日の夕飯の材料を見て、カルシファアはげんなりしたようにそう呟いた。長時間鍋の下で大人しくしていなければならぬからだろう。

「昨日パイ生地を作ったでしょう？ あれの余りをあげるから、大人しくしてちょうだいな、カルシファア」

夕方まで花屋を開き、簡単に後片付けをしてから夕飯の準備

にとりかかると、どうしても急がなくてはならなくなる。慣れた手つきでジャガイモの皮を剥いてゆく。

「いいかしら？ カルシファア」

「嫌だって言ったらどうなるんだい？」

「うっかり手が滑って、この鍋に入った水がかかっちゃうかもしれないわね」

「それはうっかりとは言わないだろうっ！」

騒ぐカルシファアにくすくすと笑いながら、ソフィーはおとなしくかがんでくれたカルシファアの上に鍋を置いた。まさか本当に水をかける気なんて無かったが、カルシファアを黙らせるにはこれが一番のようだった。

ジャガイモを茹でている間に、ソフィーは次々に他の材料も切っていた。メインの鶏肉を食べやすい大きさに切り、にんにくにブロッコリーも同じように。しばらくしてジャガイモが茹で上がり、それをフォークで潰す間に他の材料も茹でていく。気づくとソフィーは鼻歌を歌っていた。

「何だってソフィーは、わざわざこんな面倒な料理を作るんだよ。たまにはおいら、パンとチーズだけでもいいと思うね」

「この寒い中、そんな冷えた食事なんて嫌よ。温かい物を食べてぐっすり眠りたいじゃないの。それにこれ、マイケルの好物なんですって。聞いたら作ってあげたくなるじゃないの」

「へえ、マイケルの？」

軽く潰したジャガイモの入ったボールを、邪魔にならないよう隅にだけながら、ソフィーは「ええ、そうよ」と頷いた。マイケルは今は自室にいる。当人が傍にいたら、少々気恥ずかしくて言えない台詞だった。

「だって、いつもががんばってくれてるじゃない。わたしのために、気を使ってくれているのがわかるもの。これぐらいのこと

しかできないけど、喜んでくれるのならって思ったのよ」

カルシファアの声音に、どうしてか自分がいけないことをしているかのような気持ちにさせられて、言い訳のようにソフィーはそう言った。何も悪いことなどしていないというのに。

「べつにソフィーが何をしようが、そんなことおいらに関係ないけどね」

「関係ないけど、何？ 何が言いたいの？」

鍋の下で、今カルシファアがどんな顔をしているのかはわからない。どうにも居心地が悪くて、ソフィーは「カルシファア」と強い口調で名前を呼んだ。

「ソフィー、ハウルの好物は知ってるのかい？」

観念したかのように言われたカルシファアの言葉は、ソフィーには意外な、意外すぎるものだったから、思わずソフィーは目を丸くしてカルシファアを見つめてしまった。とは言っても、鍋の下から、ちらちらと覗いている部分しか見ることはできなかったのだけだ。

「ハウルの？ 知らないわ」

「へえ」

それだけで、カルシファアは何も言わない。居心地の悪さは、ますます大きくなるばかりだった。自分は何か間違ったことをしているのだろうか？ ただマイケルの好物を作っているだけなのに？ 首を傾げつつも、ソフィーは口を開いた。

「聞いたことはあるのよ。わたしが食事を作り始めてすぐの頃。何か好きな物があるのなら作るけど、って。でもハウルはいつものようにはつきり答えてくれなかったもの。ソフィーが作ってくれる物なら何でも好きだよって」

ハウルがソフィーの問いにはつきり答えてくれないのはよくあることだった。どうしてなのかはわからないが、だからあま

りにいつものことなので、ソフィーは気にすることはなかった。実際、ハウルはソフィーの作った食事なら何でも笑顔で食べてくれたから、あの言葉は嘘ではなかったのだと思っただ。

けれどカルシファアは、まるでそんなソフィーを責めているかのようなだった。声だけだからよくわからない。鍋をどければ、その表情からももう少し詳しいことがわかるのかもしれない。けれどソフィーは鍋をどかすことはしなかった。

「義務感で作った料理なんて、そりゃ何を食べても同じだろうからね」

「……え？」

一瞬、言われた言葉の意味がわからなかった。

空気がぴんと張り詰めて、鍋が静かにぐつぐつ言う音だけが聞こえた。次の瞬間、とんでもなく失礼なことを言われたのだと気づき、ソフィーは何と言いつ返しいいのかすぐにはわからなかった。

義務感で作った料理だなんて。

「——わたし、そんなこと、してないわ」

だれに作れと言われたわけでも、作らなければいけないのだと、そう思ったわけでもない。

「じゃあ、何でソフィーは料理を始めたんだい？」

「だって、そんな、わたしが作るのが当然だと思っただし……ハウルだって、親切にしてくれてるのよ。それぐらいやらなきゃ」

「やらなきゃいけない。そう思っただら？ ならそれは義務感でもんじやないのかい？」

「そんなこと」

無い、と言いたかった。言い切れたかった。けれど言うことはできなかった。まるで唇が凍ってしまったかのように。

静かな部屋の中で、聞こえてくるカルシファアのくぐもった

声だけが全てだった。お湯の沸騰している音と、自分の心臓の音が、ただうるさい。

「おいらはずっとここでソフィーの様子を見てるけど、料理をしている時のソフィー、ただ黙々と仕事をしてるっただけだ。今みたく、楽しそうに作ってるってなんて、おいら見たことないね。食べてもらいたくて作ってる料理なんて、今のそれが初めてなんじゃないのかよ？」

「……そんな」

悪魔であるカルシファーが、どうしてこんなにも人の感情の機微に敏感なのか不思議だった。自分ですら気づくことのないかったそれに、どうしてカルシファーは気づいているのだろう。

告げられた言葉に、ソフィーはどうすればいいのかわからなかった。そんなことはないと言いたい気持ちとは裏腹に、ああそうなのかもしれないと、言われた言葉を素直に飲み込んでいる自分がいた。わかっているのだ。

ハウルが親切にしてくれればしてくれるだけ、申し訳なさを覚える自分がある。ソフィーにとってハウルはどこまでも他人で、最近やっと慣れてきたとは思っても、それでも彼の与えてくれる想いと釣り合いがとれるわけでは決してない。

罪悪感はいっだってこの身に付きまとして離れない。

「だって、わたし……」

カルシファーにそう言われてしまえば、これからどうすればいいのかわからなかった。自分のしていることが否定されてしまった。元から何も無い自分が、少しだけ手にしたやるべきことが無くなって行く。

ただ呆然とするだけのソフィーに、カルシファーも申し訳ない気持ちを感じたのかもしれない。悪魔にそんな感情があるのかどうかかわからなかったけれど。

「今みたいにさ、ハウルにも、食べてもらいたいって思った時に、あいつに何が好きなのか聞いてみるよ」

そうすりゃ、きつと答えてくれるだろうからさ。

言われた言葉にソフィーは躊躇いながらも頷いた。ハウルが本当に本音で答えてくれるのか、自分が義務感などではなくそう思える日がくるのか、それが不安ではあった。

「ハウルの奴、本当はピーマン嫌いなんだぜ」

内緒話のような心地良さを伴った囁きに、ソフィーは「まあ」と目を丸くした。だって今までソフィーが作った料理で、ピーマンも含め、ハウルが残した物などは無かったのだから。

その日、ハウルの帰宅は早かった。ここ最近はやい日が続いてきたから、てっきり今日も遅いのだとばかり思っていたソフィーは、だから夕飯前に帰ってきたハウルを見て少し驚いた。

「早いね」

と、思わず言ってしまった、あの言葉は失敗だった。にこやかに歩いてきたハウルの足が一瞬止まり、浮かべた笑みが白々しく見えた瞬間だった。

「僕が早く帰ってきたら、悪いかい？」

まるで冗談のような問いかけだったが、それが冗談ではないことはソフィーにはすぐにわかった。わかつて慌てた。

「違うの、そうじゃないの。ここ最近ずっと遅かったから、少し驚いただけなのよ」

それは本当だった。ハウルは気にした様子もなく部屋に戻って行った。夕飯だということがわかっていたのか、すぐに降りてきてくれたからソフィーはほっとした。怒らせたのではないかと不安になったのだ。

数日ぶりに、三人で囲む食卓だった。焼きたてのパイ包みをテーブルの上で切り分ける。ほくほくとした湯気が上がっていて、香りだけなら大成功といえた。

「味、どうかしら」

味見のすることのできない料理だから厄介なのだ。ソフィーはマイケルの反応が気になった。彼のために作ったのだから、彼に喜んでもらえなければ意味が無い。

スプーンも持たずに、ソフィーはマイケルが食べるのをただじつと見ていた。マイケルはソフィーが見つめていることに気づきながらも一口パイ包みを口に頬張り、よく噛んで飲み込んであら、「美味しいですよ、ソフィーさん」と満面の笑顔で言ってくれた。ソフィーはほっと息をもらした。素直に嬉しいと思った。

「これ、僕の好物なんです。作ってくれて嬉しいですよ」

「ええ、知ってるわ。だから作ったんだもの」

にこにこと笑いながら言うソフィーに、マイケルは「え？」と首をかしげた。自分よりも背は高いのに、いつだってさりげなくソフィーをフォローしてくれているのに、そうした表情はまだまだ子供のそれだった。

「覚えてないかしら？ この前ぼろつと言ってたのよ、マイケル。マーサの話をしている時だったかしら。僕が好きだって言ったら、マーサが頑張って練習してくれてるんですよ。だから今日はあなたのために作ったのよ？」

「……あ、ありがとうございます」

真正面から言われるのは照れ臭かったのか、マイケルは顔を赤くして俯いた。食べることに集中したように見せかけながら、隣のハウルの様子をちらちらと伺っている。ソフィーもスプーンを持ち上げながらハウルを見た。カルシファーからハウルは

好き嫌いが激しいと聞いていたが、やはりいつものように、ハウルは文句一つ言わずにパイ包みを黙々と食べていた。その様子からは、ハウルがそれを気に入っているのかそうでないのか、ちつともわからなかった。

美味しそうに食べてくれるマイケルを見るのは嬉しかった。作った甲斐があると思った。こんな風に毎日料理をすることができれば、彼らも喜んでくれるのだろうか。そうだったらいいのにとソフィーは思い、他にはどんな物が好きなのかとマイケルに尋ねた。答えている間も、マイケルは何度も何度もハウルの様子を確認していた。どうしてそんなことをするのか、それがソフィーには不思議だった。

ソフィーが買い物に行こうとすると、よほどの用事が無い限り、マイケルも付いて来てくれた。あまりに付き添いをしてくれるものだから、ハウルにそのように言われているのかとも思ったが、マイケルは困ったように笑って言った。

「いえ、あの、そうじゃないです。ハウルさんは、人に命令するようないことはありませんから。僕が勝手に心配してるだけなんです」

マイケルはそう言って、「でも、ソフィーさんが嫌なら止めますから」等と付け足すものだから、ソフィーは慌てて「そんなことあるわけじゃない！」と声を上げた。いつも来るがやがや町の買い物通り。数人の人がソフィーの声に振り返った。

「あの、だから……」

つい大声を上げてしまったことが恥ずかしかった。自分でもどうしてなのかわからない。ソフィーが困って視線を巡らしていると、荷物持ちをしてくれていたマイケルは、小さな笑顔で「なら、良かったです」と言った。それで何もかも良くなつてしまつて、ソフィーも微笑んだ。気持ち良かった。

改めて認識するまでもなかったが、ソフィーは自分が、この少年にけっこう好意を抱いていることに気づいていた。マイケルの自分に対する態度はごくごく自然で、ソフィーの言葉にも戸惑うようなことは無いから、以前もこんな間柄だったのだろうか。協力して花屋をやり、他愛無いことを話し、お昼を食べて買い物に行つて。

家族みたい、とソフィーは思った。家族。記憶を失つたソフィーには、家族という概念が無いと言っても良かった。教えられた知識として、ファニーが自分の義母で、実の両親はもう他界してしまつていること、可愛い二人の妹は、それはもう自分に懐いてくれて心配してくれていることを知っている。二人とも忙しいだろうに、それでも暇を見つけてはしょっちゅうのように顔を出してくれる。以前はレティーに、「どう、姉さん。何か思い出した？」と会う度に聞かれ、何も思い出すことのないソフィーはレティーに会うのが気詰まりだったのだが、最近ではそのようなこともなく、純粹に会うのが楽しみになつていたのだ。

けれど二人を可愛いとは思つても、家族だとは思えなかった。二人はそれぞれ別に生活する環境を持ち、たまに来てはおしゃべりをして帰って行く。顔立ちもそんなに似ているとは思えなかったし、ソフィーにとつてはレティーは友達のような感覚で、マーサは自分を慕ってくれる年下の近所の子のようなイメージだった。姉さんと呼ばれ返事はするものの、どうしてもどこか

腑に落ちない。

「どうしたんです？」

急に黙り込んだソフィーを心配して、マイケルが顔を覗き込んできた。年の割りに長身なマイケルは背を曲げて。何だか初めて会つた時よりも、また身長が伸びたような気がした。

「うん。マイケルつて、何だか家族みたいだと思つて」

こんなことを言われれば、純真なこの少年はまた照れるのだろうかと思つたが、そうではなかった。マイケルは一瞬驚いたように目を見開き、けれど次の瞬間には嬉しそうに微笑んだ。

「以前のソフィーさんは、僕らのことを家族だつて言つてくれましたよ」

マイケルの言うところの僕らというのがだれを指すのか、瞬間、ソフィーにはわからなかった。数秒考え、ハウルは夫だったのだから家族なのは当然で、後残るのはと考えた末に思い出すのは、当然あの暖炉の悪魔だった。

マイケルとカルシファー。

思い浮かべてみて、うん、とソフィーは頷いた。

「今も家族みたいだと思つていいのかしら？」

返ってくる返事はもちろん。

「喜んで」

ソフィーはその笑顔が、本当に本当に好きだった。

花屋をやっていると楽しいことばかりだったけれど、その中で一つだけ、どうしても慣れることのできないものがあった。

「ああ、もうなの？」

ふと手を伸ばした花は、だんだんとその力を失い、茎もくたつとして何とも元氣のない様を見せてくれていた。ソフィーは

店の中の時計を見る。気づかなかったが、そろそろ夕方に差し掛かる時間だったのだ。この時間にもなれば、朝は美しくぴんつと咲き誇っていた花がこうなってしまうのも無理は無い。そうわかってはいながらも、ソフィーはどうしても花の元気の無い様を見るのが嫌だった。当然の摂理だとはわかってはいるのだが、見ていられなくて悲しくなってきたしまうのだ。

「ねえ、可愛いお花さん。もう少しだけがんばってちょうだいな。そうしたら仕事帰りのご主人が、あなたをキレイな奥さんに買って行ってくれるでしょうから」

そうやって声をかけると、心なしか花が元気になるような気がするのだ。気のせいかもしれないが、一度思うと本当にそうなっているような気になって、いつからかソフィーは暇さえあれば花に話しかけるようになっていた。花以外の色々な物にも上手く行かず困っているような時でも、不思議と声をかけると上手くいくことがあるのだ。ソフィーは癖のように色々な物に話しかけていた。

いつもならだれもない時、こっそり呟くだけなのだが、今は店内にはマイケルがいた。マイケルはカウンターに座ってラッピング用のリボンを切りながら、ぶつと小さく吹き出した。

「なあに、マイケル？」

いきなり笑い出したものだから、ソフィーは驚いた。

「いえ、やっぱり、ソフィーさんはソフィーさんなんだなって思ってた」

「どういうこと？」

以前の自分と比較されているらしいことはわかったが、どうしてそうされるのかわからずソフィーは内心で首をかしげた。そんなソフィーに、マイケルは嬉しそうに言った。

「以前のソフィーさんも、そうやって色々な物に話しかけてい

たんですよ。口調も言ってることも全部同じです」

「そうなの？」

そんなことは思いもしなかった。記憶は欠片も思い出してはいないというのに、以前の自分と同じことをしているというのが、ソフィーには不思議でならなかった。嘘でしょうと言いたくなかったが、マイケルが嘘をつくような子でないことはよくわかってはいる。それでも信じられない気持ちだった。

「だってこうすると、何だか花は元気になるような気がするし、料理だって美味しくなるような気がするんだもの」

言い訳のようにそう呟く、マイケルは「ああ」と頷いた。

「気がするんじゃないくて、本当にそうなるんだと思いますよ。ソフィーさん、自分の言葉に魔力があるって知ってますか？ソフィーさんて魔女なんですよ。物に命を吹き込む力があるんです。だからソフィーさんが話しかけたものには、みんな命が宿ってるんですよ」

「ええ、魔女だっていうのは知ってるけど」

それは以前ハウルから聞いていた。予想もしていなかった言葉だというのに、ソフィーはあまり驚かなかった。ハウルもマイケルも魔法使いで、レティーも魔女だというし、身近に魔法が溢れていたから今更のような気がしたのかもしれない。あるいは、それまでだれも自分に魔法が使えるだなんてこと言い出しはしなかったから、別にそう重要なものでもないのだろうと考えたのだ。

ソフィーは魔法の使い方なんて知らなかったし、使った記憶もなければ今後を使うことなど無いのだろうと思っていたのに、無意識の内に使っていたというのが信じられなかった。けれどそれならば、花が元気になっているように見えたことも納得がつく。他の使い方はよくわからないが、花に元気になってもら

えるのであれば、なかなかいい力であるような気もしてきた。
「わたし、それじゃあ、今までけっこう魔法を使ってきちゃったみたいなんだけど、大丈夫かしら？」

変なことが起きたりはしなかったが、自分が無意識のうちに魔法を使ってしまっていたなんて、それはなかなか大変なことのような気がした。魔法というのは、マイケルのように師匠の下で修行して、そうしてやっと使えるようになるものではなかったのだろうか？

「大丈夫ですよ。前のソフィーさんだって、気づかないうちに魔法を使っていて、しばらくしてからそれに気づいたようでしたし」

「いいのかしら、そんなにいい加減で？」

「まあ、たまには困ったことにもなりましたけど」

ああほらやつぱり、とソフィーが言うよりも早く、マイケルは笑顔を浮かべて言った。

「でも僕達、みんな、ソフィーさんの魔法が好きですから」

そう言われる理由がわからなかった。

以前の自分はどんな人物だったのだろう。

初めて、心底から、ソフィーは記憶を無くす前の自分を知りたいと切に思った。

マイケルとカルシファールと一緒に夕飯を食べ、食後にお茶を飲んでから風呂に入る。その後は、各自が好きなように時間を使って、寝る前のひと時を過ごしていた。

相変わらず階段下で休んでいるソフィーは、自分の部屋があるものの、あまりそこへは行かなかった。一人で二階の自室にいるよりも、カルシファールのいる暖炉の前にいる方がずっと良かった。

「何か縫い始めるのかい？」

昼間の間は散歩に出かけているカルシファールも、ソフィーやマイケルが花屋を終えてからは、ずっと暖炉の中にいてくれた。寒い部屋を暖めてくれている優しいこの悪魔が、ソフィーは今ではとても好きになっていた。初めて会った時、どうしてあんなに怖いと思ったのかわからない。

「ええ。わたしの部屋にね、毛玉と編み棒が置いてあったから。昔わたしがやっていたのね」

縫い掛けの緑のマフラーだった。少し手にして動かしてみると、自然に指は動いて一段編んでいった。やってみると面白くて、ソフィーは暖炉前の椅子に腰掛けやることにした。キレイな深い緑色をしていた。

「だれのだい？」

「べつに決めてはいないのよ。編み掛けだったから、最後まで編んでしまおうと思っただけ」

いい暇つぶしになるしね、と呟きながら、ソフィーはすいすいと指を動かしていった。カルシファールとしゃべりながらでも、こうして指を動かしていきえるのだから、自分はずいぶん編み物をやっていたのだろう。趣味だったのだろうか。

「わたしはあまり緑は好きじゃないけど、そうね、マイケルにだっていいと思うし。まあ、編み上がってから考えてみるわ。何しろこのままじゃ巻けないもの」

「へえ」

カルシファールはあまり興味が無いようだった。自分には関係

のない話だからだろうか。こんな時、カルシファアが火の悪魔でなければいいのにとソフィーは思う。よりによって炎の姿をしているから、マフラーの一本も編んであげることができないではないか。けれどそのカルシファアのおかげで、こうして暖をとることができるのだけれど。

「マイケルは部屋かい？」

「ええ。最近なかなか会えないからって、マーサに手紙を書いてるみたいよ」

二階へ行くこうとするマイケルに、カルシファアのいる暖かなここで書けばいいのにとソフィーは言ったのだが、マイケルは視線をぐるぐる回しながら、でもやっぱり自分の部屋で、と言つて急いで階段を駆け上つてしまった。

「わたし達がいたら、書きづらいうねでしようね」

ソフィーは小さく笑つた。マイケルはどう見ても、女性への褒め言葉がすらすら出てくるようなタイプには見えなかった。きつと今頃、四苦八苦しなから、それでも丁寧なマーサへの手紙を書いているのだろう。後でコアでも差し入れてあげようか。けれど途中で入つては、恥ずかしいかもしれない。本当に可愛い二人だと、ソフィーは何だか微笑ましい気持ちになった。「最近、よく笑うようになったな」

「花屋をやり始めたからかもしれないわ。忙しいけど、やることがあるっていいものね。この寒い中、キレイな花を見てのつて楽しいものよ。買つて行つてくれるお客さんも、優しい人ばかりだしね」

「ふうん。ま、おいらには関係ないけどね」

そう言つて、カルシファアはずぶずぶと暖炉の奥に潜つて行つてしまった。眠たいのかもしれない。けれどこの悪魔が、ソフィーがこうして暖炉の前にいる間は、決して眠つてしまわな

いことを知つていた。カルシファアが眠ってしまったら、部屋の温度は下がつてしまふのだから。それを考えてくれる、本当に心の優しい悪魔だと思つた。悪魔だということが信じられないくなるぐらいには。

「――」

マイケルがいて、カルシファアがいて。花屋は毎日とても繁盛していてやり甲斐があり、談笑しながら夕飯を食べ、温かなお湯につかり、こうした寝るまでの自由な時間。

何て幸せなんだろうとソフィーは思つた。過去の記憶が無いことすら、とっさに忘れてしまうような幸福感だつた。けれどたつた数ヶ月の記憶の中で、幸福と反対の不幸を知っているかと聞かれればよくわからない。

世界は大きくて、ソフィーにはまだまだ知らない、味わつたことのない感情が渦巻いているようだつた。筆頭が恋愛感情だつた。嬉しいと感じ悲しいと感じることはあつても、恋愛感情を感じることは無かつた。それはそう簡単に感じられるものではないのかもしれない。けれどソフィーは感じたかつた。一体どんなものなのかひどくひどく気になった。自分がかつてハウルにどんな想いを抱いていたのか、今となつてはわからないのはそれだけで、それを思い出せば何かが変わるような気がしてゐた。ハウルに対する気持ちを知リたかつた。

「ねえカルシファア。わたしとハウルって、どんな夫婦だつたの？」

カルシファアは眠っているように、ゆらゆらと揺れているだけだつたが、意識まで眠っていないことはわかつてゐた。

「あの人はわたしの……うん、『ソフィー』のどこを好きになつたの？　だつてわたしとハウルって、何も共通点が無いじゃない。係わり合いにならないような人種だわ。なのにどうして

ハウルはわたしを好きになったの？　わたしはハウルと結婚したの？」

「……そんなの、おいらだって知るもんか。おいらは悪魔だぜ？　だれとだれが結婚しようが好きになるうが、そんなのおいらには関係ないね」

「カルシファアー！」

そんなわけあるはずがなかった。だってカルシファアーはこんなにも近い距離にいるのに。自分に優しくしてくれるカルシファアーが、ハウルと『ソフィー』のことを知らないとは思えなかった。どうして教えてくれないのだろう。教えたくない理由でもあるのだろうか？

「ねえ、どうして教えてくれないの？　わたし、『ソフィー』について何も知らないわ。ハウルのことだつてよく知らないのよ。夫婦だなんてとても思えないの。ねえ、わたしとハウルって、本当に結婚していたの？　どんな夫婦だったの？」

先ほど感じた幸せな気持ちもどこかへ掻き消えてしまった。ハウル。あの人のことを考える時だけ、ソフィーは自分が本当はだれなのかわからなくなる。マイケルという時が一番良かった。何も考えずに、ただその時を平穩に過ごしていればいいのだから。だからマイケルというのが好きだった。楽だった。今の自分そのままであればいいことが楽だった。

けれどハウルという時はそうではない。ハウルというだけで、あの緑柱石に見つめられるだけで、どうしてか早く思い出さなくてはいらないと急かされているような気持ちになる。責められているような気にさえ。

そんなことはあるわけがないというのに。彼はあんなにも優しく、自分のことを気遣ってくれて、あんな整った容姿の人が、どうして自分の旦那なのだろうかと不思議に思う。質問に答え

てくれないことが多々あったって、それでもあの人の魅力が損なわれているわけではなかった。よくわからない魔法使い。王室などという、この国一番の場所働いてるあの人は。

「それはおいらが答えることじゃないね。わからないのならハウルに聞けばいいんだよ」

「だってハウルは答えてくれないわ。それに最近、仕事が忙しいからって、いつも帰ってくるのは夜遅いじゃない。朝食を食べる時しか一緒にいないのよ？　これで夫婦だなんて言えるのかしら」

言いながら、自分の台詞がとてつもなく傲慢であることに気づいていた。夫婦。そんなことは思ってもいないくせに、夫婦らしい付き合ひもしていかないくせに、彼のことがかりを責めるのはお門違いというものだろう。

「……カルシファアーにしか聞けないのよ」

思いつめたような自分の声にソフィーは驚いた。自分の出した声だとはとっさに思えなかった程だった。

どうしたのだろう。どうしてしまったのだろう。

カルシファアーも同じことを思ったのかもしれない。眠そうな目を開いて、どうでもよさそうにカルシファアーは言った。

「——騒がしい夫婦だったよ」

ハウルの帰りは、その日も次の日もずっと遅かった。とうとう朝、ソフィーが起きるよりも早く出かけるようになり、丸つき顔を会わさないまでになつてしまった。

「……避けられてるのかしら」

ソフィーはどうしてもそう思わずにはいられなかった。仕事
が忙しいのだという、ハウルの言葉をそのまま信じることで
きない。あんなに仕事に行きたくないという姿勢を見せていた
くせに、どうして今は家にろくに帰ってこないのだろう。ハウ
ルのあまりの多忙ぶりに、マイケルまでもが首をかしげていた。
「珍しいですよ。ハウルさんがあんなに仕事熱心だなんて」
ソフィーは以前のことはわからないが、マイケルがそう言う
からには、ハウルは昔から仕事熱心な方ではなかったのだろう。
それならば何故。

嫌われたのかとソフィーは考えた。嫌われるようなことをし
た覚えはなかったが、いつまで経っても記憶を思い出さない自
分に嫌気が差したのだろうか。もうこの家で一緒に暮らしだし
て一月以上が経っていた。短くはない時間だった。

ソフィーも思い出したいとは思っている。町で買い物をしていて、
知らない人々にこやかに話しかけられる度に浮かび上がる不安
相手の知っている自分のことを、どうして自分が一番わからな
いのかと叫びだしたくなる。それを押しとどめる理性。いつま
で持つのかはわからない。

考えれば考えるだけ暗く沈みこんでいくことはわかっていた
から、ソフィーは意識的に考えないようにしていた。自分のこ
とも、ハウルのことも。お医者さんは無理をしないことが一番
だと言っていた。明日には思い出すかもしれないし、一年後か
もしれないし、——思い出すことは、無いのかも、しれない。

どくんと、心臓が、嫌な音をたてた。

「あ、ソフィーさん、このお茶美味しいですね」

「……ええ？」

嫌な嫌な嫌な音を、マイケルの明るい声が掻き消した。マイ

ケルは何も気づかずにこやかにソフィーのいれたお茶を飲ん
でいた。暖炉の中からは、ぱちぱちとカルシファーが薪を爆ぜ
る音がした。窓の外では雪が降っている。がやがや町でも荒地
でも。

今日は特別寒い夜だったから、暖炉に近いソファの前に小
さなテーブルを運んできて、ソファに並んで座ってお茶にし
ていた。ソファから少し離れた前方に椅子があつて、そのす
ぐ前には暖炉がある。カルシファーの顔も見えて程よく暖かい。
隣に座ったマイケルの笑顔がただ眩しい。

「ああ、それね。昨日来たレティーのお土産なの。キングズベ
リーで今流行りなんですって」

「へえ、レティーさんの。どうりで上品な味がすると思った。
キングズベリーならそうでしょうね」

「まるでわたしが普段買うがやがや町のお茶は、上品な味がし
なくて物足りないみたいね、マイケル？」

「えっ？ いえあのそんなことじゃなくて……っ！」

ソフィーのほんの冗談にも、慌てて顔色を変えるマイケルに
ただ笑って。

笑って。

「ねえ、マイケル」

こんな時間がどうしようもなく愛しいから。

「わたしのこと、好き？」

そんな愚かなことを聞きたくなる。

薪が爆ぜた。部屋の温度は変わらない。マイケルがテーブル
にカップを置いた。その顔は変わらない。冗談にはあんなにも
慌てるというのに、今の顔はただ静かに微笑んでいていた。

「好きですよ」

その声の静かさが切なかった。

互いに恋愛感情などは無いと、わかっていながらも告げられる好きという言葉の重さが胸にそのまま伝わってきた。

自分は何と愚かなのだろう。

わかっていながらもさらにその上に、何十にも愚かさを塗りつけて。ただただ浮かび上がる怖さを恐怖を無くすために、お願いだからその言葉をちようだいとまるでねだる幼子のように。「わたしが、過去を思い出さなくても、それでも好きでいてくれる？」

その怖さはいつだってソフィーの中にあつた。普段は蓋をして見えないようにして、気づかないようにしているだけでいつだってソフィーの中にはそれがあつたのだ。

今はいい。今はまだ皆は優しくしてくれる。『今』はまだ。いつになったら無くなるのだろう。自分は彼らとの共有する思いも何も無い。皆は氣を使つて、自分がいる時には過去の思い出話をするのがなかった。『ソフィー』ならばできる思い出話は、けれど今の『自分』の前ではできないから。

好かれていたのは『ソフィー』

何もできないのは『自分』

——それが、どうしようもない、現実で。

「ソフィーさん」

涙でぼやけて上手くマイケルの顔が見えなかった。聞こえる声はいつもの彼の穏やかなもので、どうして彼はまだ子供だというのに、いつだってあんなにも穏やかに微笑んでいられるのだろうかと思つた。

「僕はソフィーさんが好きですよ。前のソフィーさんも、今のソフィーさんも好きです。変わらず好きで……大好きなマーサの、大好きなお姉さんですから」

おずおずと伸びてきた腕に、ソフィーは微笑んで身体を預け

た。細い少年の体には、けれどしっかりと力がこめられていて、きちんとソフィーの体を受け止めて抱きしめてくれた。

温かった。

人に抱きしめられるのが、こんなに気持ちのいいことだとは知らなかった。

「……マイケルが、本当に弟だったらいいのに」

「……えーっと、マーサと結婚したら、本当にソフィーさんの義弟になりますよ」

「あら、じゃあ、マーサにマイケルに呆れられないよう、がんばつてもらわないとね」

「そんなことないですよ！ 僕の方こそ、マーサにいつ捨てられないかって不安なぐらいなんですから！」

抱きしめられながらどんな会話をしているのだろうか、ソフィーは笑い出したくなつた。きつととてもくだらない、他愛のない会話をしているのだろう。それで良かった。

マイケルとマーサが本当に結婚すれば、それは何て幸せな光景なのだろうと思つた。マイケルはこの家から出ていくだろうが、それでも自分はきつと心から祝福することができたらう。数年後。それぞれ皆、どのような生活をしているのだろう。

ソフィーはこの温かさを胸いっぱい吸い込んだ。マーサに悪いと思つたけれど、姉弟愛だと思つて許してもらふことにした。このことを知れば、きつと顔を真っ赤にして「マイケルのバカ！」と叫ぶであろう小さな少女のことを思い浮かべると、ソフィーは笑えて笑えて仕方がなかった。

「まづい！ おいマイケル、ソフィーを離せ！」

だからどうして唐突に、今までまるで眠っていたかのように沈黙していたカルシファアが、そんなことを叫ぶのかわからなかった。

ソフィーはカルシファアを見て、それからマイケルを見た。マイケルも呆然とした顔をしていたが、それが何かに気づいたように顔色が変わっていった。

次の瞬間、扉が開いた。

「……何やってるの？」

数日ぶりに見たハウルの姿は、いつもと全く変わりなく、浮かべた微笑だつて数日前と何も変わらず同じもので。

ただその声音だけが。

どうしてそんなに冷たい響きを纏うのかと。

「ねえ、何やってるの？」

見つめる翡翠の瞳の色があまりにあまりに深いから、そこに吸い込まれもう二度と出れないような錯覚すら覚えてしまうほどだった。

「ねえ、ソフィー？」

ハウルは笑っていた。

コツンとブーツが音を立てながら、一步一步近づきながら、ハウルはどこまでも笑っているというのに、きつとその笑顔の下では激怒していた。

それがわかってソフィーは。

——あ、ね、ただ、不安だっただけなの。

——わたしはマイケルのこと、弟だと思ってるから。

——何でもないの。家族愛なのよ。

そんな言葉が言えるはずもなかった。言えるわけがなかった。

射竦められたかのように動くことができなかった。いつの間にかマイケルの腕は離れていた。寒かった。怖かった。いつだって笑顔を浮かべているハウルがこんな人だとは思わなかった。だれなのこれは。だれ。

「……あんたは何もわかってないんだっ！」

ぐいっと痛いほどの力で腕を捕まれた。声を上げるよりも先に空間がうねった。「ハウル！」カルシファアの声が聞こえた。それが最後の音だった。

投げ出される体。けれど柔らかい物にぶつかって痛くはなかった。暗くてここがどこだかわからない。やつと目が慣れてきて、ああここは滅多に入らないハウルの部屋だということに気づいた。気づいた時にはハウルが押し掛かっていた。動くことができなかった。息が近かった。

「……ハ、ウル……」

名前をただ呼ぶことが。

どうしてこんなにも難しいのだろう。

「ねえソフィー、どうしてあんたはそうなの」

切なげに呟きながら伸ばされたハウルの腕に、瞬間的にソフィーはぎゅつと目を瞑った。ハウルの顔が見ていられなかった。伸ばされた腕がゆっくりと頬を撫でていくのを、聞こえる荒い息遣いの中で感じていた。

「……何でそうやって拒絶するの、ねえ」

拒絶だなんてしたつもりなどはなかった。

ハウルが何を言っているのかわからない。

「あんたはいつもそうだ。マイケルには嬉しそうに笑うくせに、僕には一度だってそんな風に笑いかけてくれたことなんかないじゃないか！ 僕が嫌ならそう言えばいいんだ。そうしたらいくらだって離婚してやるのに！ 何で言わないの、言ってくれ

ないの、言わないだけであなたの態度はいつだって僕を拒絶してるのに、どうして何も言ってくれないの、ねえ！言葉だけいつも気にかけているようで、その実本当はそうじゃないなんて、そんな残酷なことは止めてくれ。僕はもうたくさんだ！」身動きもできずに、ソフィーは暗闇の世界でハウルの叫びを聞いていた。いつだって本当のことなんて言わない彼の、初めての心からの叫びを。

「あなたが男に抱きしめられてるとこんなんで見たくない！」
迸る想いの奔流は。

重く、重く。ソフィーの心に押し掛かって。

……ああ。

そうなのか、と。ソフィーは全てを悟った気がした。

彼がどうして本音を言ってくれなかったのか、それが今の彼に現れていた。激しすぎる愛の気持ちを、いつだってハウルは身の内に隠していた。秘めていた。必死になって押さえ込んでいた。

自分の想いの激しさをわかっていたから、だからハウルはそれを自分にぶつけないように、いつだっていつだって被った仮面の下に、必死になって隠していたのだ。

優しい人だと思った。よくわからない人だと思った。のらりくらりと交わしてばかりで、何て人なんだろうと思った。色々な面に隠された真っ白な心が、今見えたような気がした。

とても繊細な人だと思った。

上に被さった重さが増して、ソフィーは目を開いた。天井が見えた。胸の上で震えている人がいた。泣き声は聞こえない。泣きたいのを堪えているわけではなく、泣きたいのに泣けないのだらうということがソフィーにはわかっていた。

その、不器用さが。

「——ハウル」

好きだと言えればいいのにと、この時ほど思ったことはなかった。きつとマイケルになら言える言葉を、けれどソフィーはハウルに向かって言うことはできなかった。家族愛の好きという言葉を、彼が望んではいけないとわかっていたから。軽々しく言う言葉は、きつと彼を傷つけることにしかならないだろう。

今のこの気持ちを表す言葉をソフィーは知らなかった。何を言えば、彼を救うことができるのかわからなかった。それだけきつとハウルの心は深いもので、その奥底まで簡単に入り込めるのが『ソフィー』だったのだろう。自分は昔、どうやってそこまでたどり着くことができたのだろうか。

考えようとして、思い出そうとして、すぐさまソフィーはその思考回路を放棄した。無駄だと思ったわけではない。確かにそれもあつただろう。けれどそれ以上に、それではダメだと思つたからだった。

昔の自分はあくまでの昔の自分であり、今の自分ではない。ここにいるのは『自分』なのだから、自分だけの言葉を捜せばいいことだった。

その言葉は、果たして彼に届くのだろうか。

「ねえ、ハウル。わたし……」

想いを色があれば、形があれば。

きつと彼の自分に対するそれは、熱く真っ赤に燃え滾つたそれで、時に黒く染まることもあるようなそれなのだろう。けれどその上に幾枚ものヴェールをかぶせ、普段は穏やかな色を浮かべて心の中にしまつて。

自分の想いは何色だろう。

この、ただの家族でもない、ハウルに向ける想いというのは。「わたし、あなたのこと、もつと知りたいわ」

例えば何を考えているとか、どうして魔法使いになったのかとか、『ソフィー』とどうやって出会ったのか、どこが好きになったのか、プロポーズの言葉は何だったのか。

好物は何なのかとか。

「ダメかしら？」

懇願するようにソフィーは言った。頭を上げたハウルの瞳は、涙に濡れているようなことはなかった。心だけで泣いているのかもしれない。

ハウルは笑った。泣き笑いのような表情だった。それがいやに子供染みて見えて、そういえばこの人の年齢さえ知らないことに、この時初めてソフィーは気づいた。

「僕、あなたの作ったクリームシチューがすごく好きなんだ」

「わかったわ。明日の夕飯には作ってあげる。だから早く帰ってきてちょうだいね」

「ブロッコリーは入れないで」

「ダメ。栄養あるんだから、ちゃんと食べなさいよ」

小さい子みたいな好き嫌いを言うのね、とソフィーが呆れたように言うと、あなたは口うるさい母親みたいだね、と返された。その声音が嫌味っぽかったので、ソフィーはハウルの頬をつまんでやった。笑い声が寝室に響いた。

レティーは夜、扉の開く音には人一倍敏感だった。それは弟子の頃から変わらない彼女の癖のようなものだった。扉が開いて、それが待ち望んだ彼のものとわかると、日ごろの行儀態度などは忘れて廊下を走って行く。弟子だった時に、それで何度師匠である彼から注意を受けたのかはわからない。時刻が遅い時などは、走ったことにブラスして、どうしてこんな時間まで起きているんだというようなことも。

それから少し時間は経って、弟子ではなく奥方となった今でも、それは変わらなかった。いや、レティー本人としては、少しでも落ち着いて、大人の女性にならなければと考えている。彼に釣り合うような、気品に溢れた大人の女性にならなくてはと。だから玄關の扉が見えるようになるところまでは小走りに走り、そこからはゆっくりと歩いて笑顔で出迎えるのだ。そうして浮かべた笑みがどれだけの魅力を持ったものなのか、レティーは正しく評価していた。けれど肝心の彼は、レティーの笑みにうっとりとするどころか、「また走ってきたのかい？ 髪が乱れてるよ」と大人の笑みを浮かべるのだから、どうしてこう彼に対しては上手くないのだろうかいつも思う。けれどレティーは、そんな彼のことが好きなのだから、所詮は惚れた弱みというのかもしれない。

「お帰りなさい、ベン。今日もお疲れ様」

今日のベンの帰宅も、レティーがとくに夕飯を食べ終わった頃になっていた。いつだってベンの帰宅は遅い。週の内、一緒に夕飯を食べることができるのは、それこそ一度か二度くらいだ。結婚した当初こそそれに不満を覚えたものの、他ならぬ夫がその仕事にやり甲斐を感じているのだから仕方ない。妻と

しては、そんな夫を支えることが何よりも重要なことだと思えたのだ。

「ああ、ただいま、レティー。いつも言っているが、こんな時間なんだ、わざわざ出迎えなどしなくてもいいんだよ」

きつとたくさんの書類が入っているのだろう、カバンを受け取って歩き出しながら、ベンは気遣わしげな声で言った。仕事をしている時、ベンの表情はとても真剣で真面目なものになるが、こうした時、その双眸はとても優しい色になっているのだ。背が高くがっしりとした男らしい体躯と、その瞳の色は似つかわしくないようにこれ以上無いほどびったり当てはまるとレティーは思っていた。もちろん、その眼差しをレティーがとても好んでいることは言うまでもない。

「そんなこと言わないで、ベン。あなたときたら、忙しい時は片手でサンドイッチを食べながら書類を見ちゃうじゃない。そうしたらわたしは邪魔をしそうで部屋にも入れないし。こうした時間は、わたしにとつてはとても貴重なものなんだから」

正直な気持ちをそのまま述べただけだったのだが、その台詞は聞きようによつては、ちっとも構ってくれない、いつも仕事ばかりしていると言っているのと同じであった。ベンもそれに気づいたのか、申し訳なさそうに苦笑した。

「今の件が片付いたら、少しはまとまった休暇が取れるはずだ。それまで辛抱しておくれ、レティー」

「あらやだ、ベン。わたし何も、そんなつもりで言ったわけじゃない……」

大人の女性を目指しているというのに、そんな風に我儘を言うようではまだまだ子供ではないか。けれどまとまった休暇という言葉はとても魅力的で、早く今の仕事が終わらないかしらと、そう思ってしまうのも確かだった。

「休暇がとれたら、そうだね。たまにはどこかへ遊びに行くのもいいだろう。レウィンドブリッジは、この季節はとても美しいと聞いたよ」

「あなたと行くのなら、どこだって構わないけれど……ねえでもベン。どこへだっていいのよ、わたし。家にいたって構わないの。あなたがゆつくり休める場所じゃなければ嫌よ」

特別に背が高いわけではないレティーは、特別に背が高いベンと視線を合わせようと思ったら、思い切り顔を上げなくてはならない。ベンはレティーの台詞に驚いたようだった。たまの休日、てっきりあそこへ連れて行ってここへ連れていってと、ねだられるとも思っていたかのようだった。

自然と二人の足は止まって、ベンはまだまじとレティーを見下ろしていた。そんなことは珍しくて、レティーは何か不味いことを言ってしまっただろうかと、そう考えて内心でおたおたとしていた。

やがて、ベンがふつと優しい笑みを浮かべたので、どうやら杞憂だったようだとはっと息をつくことができた。弟子から念願の奥さんになれたというのに、どうしてこんな日常の些細なところで心臓はうるさく騒ぐのだろう。自分はきつと、永遠にこの人に恋をしているのだろうかと考えると、あまりの恥ずかしさに顔が真っ赤に染まってしまいそうだった。

「ええっと、それにね。あまり遠くに行くと、心配なもの。その、姉さんが」

恥ずかしさを隠すために、レティーは慌てて口を開いた。けれど言った言葉は嘘ではなく、それは確かなレティーの本音だった。数日置きにソフィーの元を訪ね、このところすっかり姉が落ち着いたのは知っているが、それでもやはり離れていては心配なことは心配だった。ソフィーは掛け替えの無い人だった

一人の姉なのだ。

「おまえの姉思いは相当なものだね」

「あら。ベンの義兄思いだって、相当なものだと思うけど？」

ベンはずかに目を見開いた。仕事場では見ることができないであろうそんな自然な表情に、今更ながらに嬉しさがこみ上げて、小さな笑みを浮かべながらレティーは言った。

「あなたが今日帰りが遅かったのも、どうせ義兄さんの分の仕事までやっていたからなんでしょう？　また義兄さん、仕事をさぼって帰ったの？　一時期真面目に仕事に出てきていた時もあったやうだけど、やつぱり義兄さんは義兄さんね」

以前であれば、義兄がお得意のサボりでもってその仕事をベンに押し付けたなどとわかった日には、それこそ怒りで顔を真っ赤にして、動く城に乗り込んでいきそうになった程だ。もちろん実際にそんなことができるはずもなく、せいぜいがソフィーにそのことを懇々と訴え、ソフィーから義兄に然るべき対処をとってもらうようにしていたが。もつとも、その方法がハウルには一番効果があると、わかっていての戦法ではあったが。

けれど今はそれは状況が違っていた。義兄がただの面倒臭がりで仕事をさぼる人ではないと知っているからかもしれない。彼のどんな行動も、行き着く先にはたった一人しかいないのだ。

大事な夫と掛け替えのない姉と、どちらを選べるわけでもない。けれど今、今この時は——やつと見え始めてきた希望の光を、消すわけにはいかなかったのだ。

それでも、と、レティーは胸中で小さく呟いた。そうやって黙っているのもあと少しだ。いつになっても仕事をきちんとまっとうしないようであれば、その時にはソフィーに言うしかないだろう。ベンの仕事時間はただでさえ多いのだから。

「一秒でも早く、奥さんの元に帰りたくて仕方がないようだった

たからね」

目に浮かぶようなその光景に、良かった、とレティーは小さく呟いた。良かった、良かった。ソフィーは記憶を思い出したわけではない。それでも、だれに強制されたわけでもなく、ハウルの暮らしを楽しんでいると――それがレティーにはこの上もないほど嬉しかった。ソフィーのことを思っただけで喜んだ。そうして、あの義兄のことを思っただけで安心した。

だってあの人は、ソフィーがいないとダメなのだ。

ソフィーのために生きて、ソフィーのために笑うような人だから。生きることも死ぬこともできないような、そんな時期から立ち直り、そうして確かに太陽の光を浴びることができるようになったのだろう。

きつと今頃は、就寝前のひと時を、二人はきつと笑顔で過ごしているのだろう。その前には、ソフィーお手製の美味しい夕飯を食べていたのだろう。

滅多に夕飯も一緒にできない自分達の生活と比べれば、それは少々複雑なものだった。けれどそれ以上に喜ばしいものだった。これは貸しにしといてあげるわ、と、レティーは心の中で義兄に向かって呟いた。

「ベンもそう思ってくれてる？ 一秒でも早く、わたしに会いたいって」

彼女の夫は、義兄とは違い愛の言葉をそう容易く口にするような人ではなかった。それが、まだ二十歳にもなっていないレティーには少々物足りなくはあったが、だからこそ、時に告げられる言葉にはより一層の言葉を感じて愛しくなった。

「……それは愚問というものだよ、レティー」

やはりこの時も、ベンは困ったように笑うだけで、レティーの望むような言葉を言っただけでよかった。

けれどそれがレティーの愛した人なのだ。そう思えば、そんな言葉さえ胸をくすぐる以外の何物でもなくなっていて、レティーは片手で鞆を抱え、もう片方の手でベンの手腕に抱きついた。

「一体どうしたの？」

驚いたソフィーはそれしか言う言葉が無いようだった。わかっているながらも、ハウルは「ああ、うん、まあ」と濁った言葉しか返すことができなかった。人ごみの中はともかくダメだった。家はダメだと思い、それなら外に出ようとキングズベリーの扉を開けたというのに、人ごみの中を歩く内にどうしても気分は滅入ってしまった。仕方が無かった。どこか落ち着いたカフェにでも入ろうと思っていたのに、瞬く間にそんな気持ちは萎んでしまったのだ。かといってがやがや町も、ソフィーの知り合いがたぐさんいてやりにくい。上手い場所がどうにも無いような気がした。それともこの時だけ、まるで自分の前から隠れてしまったかのように。

馬鹿げている、とハウルは思った。被害妄想もいいところだと。ただ、上手いかわないこの気分を、何かの所為にしたかっただけなのだけれど。

「ハウル、どうしたの？」

繋いだ手の先で、ソフィーの戸惑う声が聞こえる。繋いだ手というよりも、とっさにハウルがソフィーの手首を掴んでしまっただけだった。何かが心に触れて、ここではダメだと思った。魔法使いの勘なのかどうかもわからない。

「うん、やっぱ、ここはダメだ。ダメみたいなんだ」

「ダメみたいって、何が？ 雨でも降るの？」

「ああうん、それに近いかもしれない」

上手く言葉では言い表すことができないけれど、何だか形にならない雨が降りそうな予感——いや、予感とも言えない、ただのハウルの気まぐれとも呼べるようなもの——を感じて、ハウルはただそれに素直に行動したまでのことだった。

けれどそれを、どうソフィーに伝えればいいのだろう。

今日のこの外出だって、目的も何もかもソフィーには告げずに、一方的にハウルが決めたものだった。ソフィーは文句は言わなかったが、ただ訝しげにハウルを見ていた。ハウルの様子がおかしいことに、ソフィーなりに気づいていたのかもしれない。ハウルは強引にソフィーをキングズベリーに連れ出し、そうして今、来た道に戻っているところだった。人ごみの中で、はぐれないようにと自然に手首を握ってしまった。少し強い力で。

「ごめん、帰ろう」

「ええ？」

ソフィーが驚くのも無理はなかった。当然のことだと言えた。ハウルはもう一度「ごめん」と呟いた。ソフィーが文句を言うことはなかった。それが救いと言えた。

ソフィーはそれ以上、ハウルに何かを尋ねることはなかった。聞いても無駄だと思ったのか、ハウルがいつになく真剣に謝ったからなのか、どちらかはわからない。

寒さも吹き飛ばすほどに陽気に談笑しながら歩いてゆく人の中を縫って、ハウルは早足に家へと戻った。扉を開ける。家にはだれもいなかった。けれどいつ、カルシファーやマイケルが戻ってくるかわからない家では、落ち着いて話ができそうにも

なかった。思いついて、ハウルはすぐさま取っ手を回した。

「行こう。あそこが一番いい」

ソフィーが取っ手の色を確認したのがわかった。「花畑で、どうするの？」ソフィーの問いには答えずに、ハウルは扉を回した。とたんに肌にかかる風の冷たさに、髪を乱すそれに、ハウルは目を細めて呪文を唱えた。とたんに二人の周りを囲む空気が暖かくなり、まるでカルシファーが傍にいるかのようにさえた。

「寒いのなら、家の中にいればいいのに」

ソフィーの言うことはもっともだったのだが、ハウルはそうしたくなかった。ゆるく頭を振って、城から少し歩き、暖かそうな日向の地面に腰を下ろした。ソフィーは少し躊躇ったようだったが、すぐにハウルの隣に座り込んだ。

「あのさ」

ソフィーが座ると同時に、ハウルは口を開いた。早く言わなければと、ただそれだけを思っていた。どうしてこんなに自分が焦っているのか、ハウルにはよくわかっていた。それが一層ハウルを落ち着かなく、不機嫌に近い気持ちにさせていた。

「僕、あんたに話さなきゃいけないことがあるんだ」

時期だろうと思ったのだ。

ソフィーは何も聞いてはこない。それならばそれで、わざわざ自分から話さなくともいいかと、そう思ったのは事実だ。けれどすぐさま、そんなわけにもいかないだろうと自分自身を叱責した。今も昔も、ソフィーは好奇心旺盛なくせに、妙に自分を抑えるようなところがあるから、自分からは聞いてこないとわかっていいるのだから。

それならば、言わなくてはならない。

「あんたの過去を——記憶を無くす前、僕とどうやって知り

合ったのか、そこから、色々、今までを全部」

左隣で、小さく息を呑む音が聞こえた。ハウルが言い出すとは思わなかったのだろう。今までそんな素振りはずっとも見せなかったのだから。彼女から何を聞かれたって、それこそいっだって交わしてばかりだったのだから。

「だからその、話そうと思うんだけど……聞く気はあるかい？」

ここでソフィーが否と言ってくればいいのにと、この後に及んでまだそんなことを考える自分がいて、どこまで情けなくなれば気が済むのだろうかとハウルは自分自身にさえあきれ果てた。けれどこうして、話し出す前から、じくじくと身体の芯が痛んでいることも事実だった。

ソフィーの過去は、ソフィーが忘れてしまった記憶は、ハウルと出会った部分から今までは、自分とソフィーの二人の共有する思い出であつたはずだった。

けれどそれは、一瞬の事故で消え失せたのだ。

共有する掛け替えない出会いは、思い出は、ハウルただ一人のものになった。愛してるよと、何度も何度も告げた言葉も、ただハウルの心の中でのみ囁かれるものとなった。

辛いとすら言えなかった。そんなものではなかった。

ソフィーが記憶を無くしたと知った時の絶望と、今の切なさのどちらが重く大きいのかは、ハウル自身にもわからない。何度過去を振り返ってもしかたない。進んだ時計の針は元には戻らない。悔やんだところでどうしようもない。明日を信じて生きていくしかないとかかっている。納得もしたはずだった。けれど思い出を、忘れることのできない数々のソフィーの顔を、言葉を、思い浮かべるだけで心は容易く痛くなる。

隣に座ったソフィーの顔を見ることができなかった。きっと自分は今、どうしようもないほど情けない顔をしているのだから。

う。ソフィーも負けず劣らず辛いのだと、それを支えてあげなくてはならないのだと、わかっているけどこの体たらく。この性根は、きつと死ぬまでこのままなのだろう。ハウルは嘲りを存分に含んだ笑みを浮かべた。自分自身への。

ソフィーの手が、投げ出されていたハウルの左手にそっと重なった。その小さな手を見て、そこからゆっくりと顔を上げて、ハウルはのろのろとソフィーと視線を合わせた。

「ハウルが辛いのなら、無理に話さないで」

立場が全く逆のソフィーは、ハウルの気持ちを完全に理解することなどはできないだろう。二人は対極の位置にいた。忘れた者と忘れられた者。以前はだれよりも近い距離にいたからこそ、今離れた距離もまたその分だけ大きかった。

だというのに、ソフィーはどうしてかハウルの気持ちがわかっていうようだった。その笑みがそう物語っていた。理解しようとは必死に努めているのかもしれない。ああどうしてあんたはそんなにも。ハウルは今、無性にソフィーを抱きしめたくて仕方なかった。

「……気にならないの？ 自分の過去が？」

何て意地悪な問いかけだろうと思ったが、ソフィーは気にした様子もなく、変わらない落ち着いた笑みを浮かべていた。

「気にならないといったら嘘になるわ。でもどうせ、何を聞いたってあまり意味はないわ。自分のことだと人のことだろうと大差ないんだもの」

辛い言葉を、ソフィーは何でもないかのように言っていた。

「過去はとても大事ね。そうした日々の積み重ねが、今の自分を創っているんだもの。でもわたしにはそれが無いわ。でも、だからって、それで全てが終わってしまうわけじゃないと思うの」

ソフィーは顔を歪ませた。自分の気持ちを上手く言葉にできずに、もどかしい思いをしているようだった。

ソフィーは考えながら、ゆっくりゆっくり言葉を探していた。彼女の言葉の力が、当然のようにソフィーを助けているのがハウルにはよくわかった。

「思い出したいと思うわ。あなたとどんな時間を過ごしてきたのか、すごくすごく気になるの。マイケルとも、カルシファールとも、他の、わたしを好きだって言ってくれる人との思い出は、きつととても大事なものだっただろうから。どこかに落としてしまったそれを、見つけたいと思うのよ。傍にあることに気づいたら、わたしはすぐさまそれを拾うでしょうね」

ソフィーは顔に笑顔を浮かべて、両手でハウルの手をぎゅっと握った。まるで繋がったそこから、ハウルに力をもらっているかのように。

「だけどそれには時間がかかるかもしれないって、お医者様にも言われたわ。焦ることが一番ダメなんですって。それはすごく心に負担がかかって、思い出す前にわたしが疲れてしまうからって。わたしもそうだと思うわ。毎日毎日、探し物ばかりしてるだなんて嫌なもの。だってそうでしょう？ 楽しいことはいっぱいあるんだから。地面ばかり見て、這いつくばって落し物を探してるだけなんてもったいないわ。おしゃべりしてお菓子を食べて空を見て、そんなことがしたいもの」

どうしてソフィーはこんなに眩しい顔で笑うのだろうか？ ハウルは思った。ソフィーは何も変わってはいなかった。その笑顔にそれがわかった。

「それにハウルがいるもの」

愛してるなんて言葉は無くとも。

「過去は大事ね。でも、あなたと笑って一緒に過ごせる、今日

と明日とそれから先の未来の方が大事だわ」

ハウルにとっては世界一の、最高の殺し文句だった。

誇らしげに微笑むソフィーに言う言葉が無かった。何を言っても嘘になってしまふような気がした。ただ愛しだけが込み上げた。他には何も無かった。世界中でただ一人、ソフィーだけが全てだった。

彼女が死ねば、きつと自分も死ぬのだろう。

けれどソフィーは生きている。生きて、色々なものを見て、笑ってそして楽しんでるのだから、自分もそうしなければならぬ。ソフィーと同じものを見て笑いたい。死ぬ時は彼女の笑顔に看取られたい。

どこまでなら許されるのだろう。

伸ばした腕にはまだ大きな躊躇いがあつた。

どこまでなら、触れてもいいのだろうか？

「……抱きしめてもいい？」

問いかける声は自分でも驚く程には小さかった。まだ彼女が目覚めたばかりの頃、抱きしめそして拒絶されたことを忘れられるはずはなかった。

それ以来彼は恐れていた。恐れて、決して自分から踏み込むようなことはしなかった。彼女を思っているよりも、自分が傷つくことを望まなかった。ただそれだけ。

ソフィーは目を見開いて、何を言われたのか理解すると、徐々にその頬を赤くした。戸惑ったように視線を彷徨わせてから、ハウルの見つめる翡翠の瞳にぶつかって、決心したように小さく小さく頷いた。

触れれば消えてしまう、儚い夢などではないとわかっていて。それでも腕に力がこもらなかった。ただ優しく抱きしめて、その身体の小ささと、心臓の立てる大きな鼓動の音に包まれた。

「……ソフィー」

泣きたくなるほどの切なさ、体中を駆け巡って心臓に集まっているかのような感覚。腕に少しだけ力をこめて、小さな背中を抱きしめた。ソフィーが抱き返してくれることはなかった。

——ただ、胸にかかる重さが、ほんの少しだけ増したような気がした。

教えてもらわなくてはわからない事実もあるのだと、ソフィーは心底からそう実感した。そうして教えてくれたレティーに、本当に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

「姉さん、知ってる？ 義兄さんてば、しょっちゅう仕事をさぼってるのは知ってたけど、朝だって自由気ままに出勤してくるんだから。ちゃんと定時には来なさいって、姉さんからちょっと言っちゃってくれないかしら？」

漆黒の髪をもった、会うたびに本当に血の繋がった妹なのかと、ソフィーが疑問に思ってしまうほど美しいレティーは、その日ソフィーの焼いたナッツの入ったクッキーを食べながら、不機嫌極まりない顔でそう言った。

「義兄さんがサボってばかりいるおかげで、うちのベンがどれだけ忙しい思いをしているか、姉さん、わかる？」

レティーの言うところのベンという人物のことを、ソフィーはよく知らなかった。入院中、レティーと一緒に何度か見舞いに来てくれたことがあったが、寡黙な人物らしく、穏やかに微笑むだけでとくにソフィーとは会話らしい会話はしなかった。

あまりに長身で年の離れた大人の男性だったので、ソフィーが気後れしてしまったというのもある。けれどいい人だとは思わなかったし、レティーの様子から本当に仲のいい夫婦だということはわかったの、ソフィーはレティーのその台詞を聞いて、心底から驚き、そうして次の瞬間には呆れてものも言えなくなってしまう。

ハウルの起きる時間が、毎朝不定期であることは知っていた。大体はマイケルよりもやや遅れて、ちょうど朝食の準備が何かも終わる頃に降りてきて一緒に朝食をとり、のんびり風呂に入ってから仕事に行く。けれど遅い時は、ソフィーやマイケルが朝食を食べ終わってから、本当に遅い時なんて、二人が花屋の昼休みに昼食を取っている頃に起きてくるのだ。

あまりのハウルの自由気ままな生活ぶりに、ソフィーは一度そんなことで大丈夫なのかと尋ねたことがあったが、ハウルは笑ってこう応えた。

「ああ、大丈夫だって。一仕事終わったし、僕は元々は国王から頼まれた依頼品だけを作っていたぐらいなんだ。めんどくさい仕事は同僚がやってくれてるしね」

ハウルがあまりにはつきりとそう答えるので、ソフィーはそんなものかと思ってしまったのだ。言われれば王室には他にもたくさん魔法使いがいるだろうし、何の問題も起きていない時であれば、とくに仕事も無いのかもしれないと。

ハウルの様子があまりに悠々としていたので、ソフィーはそう信じ込んでしまったのだ。マイケルもカルシファアも何も言わないし、そうでなくとも、だれが王室付きなどという栄えある仕事をサボるなどと考えるだろうか。けれど実際は、ハウルは週に何度も何度も遅刻して、けれどそれを恥じるどころか当然だという顔で出勤していったのだ。

「もう、何を考えているの、あなたって人は！」

レティーが帰ったその晩、ソフィーは笑顔で帰宅したハウルに向かってそう怒鳴った。あまりのことに呆れて声が出なかったのはだいたい前のことで、いざ本人の顔を見ると、それはもう文句が溢れて溢れて仕方なかった。ハウルもいきなりなことに目を丸くしていた。

「信じられない。本当、信じられないわ！ 何を考えているのかしら。それとも、何も考えてないの？ しよっちゅう遅刻して仕事をさぼって、それでよくのうのうとしていられるわね！」
ハウルが何か言うよりも早く、ソフィーは言いたいことを全て言った上で宣言した。その時ハウルは、扉を閉めたばかりのところから立ったまま、まだコートも脱いでいなかった。

「明日からちゃんと毎朝起きること。起きなかったら朝食抜きよ！ 仕事をサボって帰ってくることも許さないわ。そんなことしたら家に入れないから。いいわね？」

まるでそんなことをされたら生きていけないとも言おうかのような顔で、ハウルは文句も言わずにくくくとして頷いた。カルシファーは盛大に笑って、マイケルも隠すことなく笑っていた。

その時のソフィーは、ハウルの仕事に対する信じられないほどの不真面目さと、レティーと、引いてはレティーの旦那への申し訳なさとで目の前がいっぱいになっていたから気づかなかった。自分が、なんて大それたことを言ってしまったのか。

朝食だって自分が勝手に作っているだけであり、この家だって正真正銘ハウルの物であるというのに。

けれどハウルはもちろんのこと、マイケルもカルシファーも異論を唱えるようなことはしなかったし、むしろ後者二人など、ソフィーの行いを当然のもののように受け止めていることが不思議だった。ソフィーは戸惑ったが、徐々に嬉しさがこみ上げ

てきた。この家の中で、自分の立場というものがしつかりとあるような気がして。ただの居候などではなく、きちんと居たいのだと、言葉にされなくとも言われたような気がしたのだ。

初めは戸惑うばかりだったこの家で暮らしにも、今ではソフィーは慣れ切っていた。ソフィーの掃除のおかげで、家中は毎日清潔感に溢れていたし、色々な場所に繋がる扉もとても便利なものだった。キングズベリーのレティーにも、がやがや町のマーサにもすぐに会うことができる。どうしてこんなややこしい真似をしているのかなんて、今ではもう聞くことはもちろん無かった。だってそれは当然のことだったのだ。入院中のあの頃、退院したらうちに来ていいよとレティーに言われた時、額なくて良かったとソフィーは思った。レティーの優しさはとても嬉しかった。けれどきつと、自分は大きなお屋敷の暮らしなどでは満足できなかっただろう。だってそこにはサボリ癖のある魔法使いもいないし、その弟子だって、火の悪魔だっていない。花屋だってすることができない。

ソフィーの言葉が利いたのか、次の日からハウルは、毎日きちんと起きてくるようになった。休日は昼まで寝ていたが、それ以外の日はやはりマイケルよりも少し遅く起きて、椅子に座って準備が整うのを待っていた。「マイケルは毎朝手伝ってくれてるのに。少しは手伝おうって気にならないの？」と声をかけたら、「僕は低血圧なんだ」と笑顔で返された。ハウルはただ寝坊癖があるだけだろう。

「今日は昼には帰ってくるから、昼食を用意しておいて」

ソフィーが朝食の後片付けを終えて、花屋で売り物にするための花を大量に摘んでくるだけの間に、ハウルは長い入浴を終え、仕事に行くとは思えないいささか派手な身繕いを整える。扉の前に立って言うハウルに、見送りに立っていたソフィーは

片眉を上げた。

「サボりの時間まで決めてるの？」

「ひどいなあ！ 今日には本当にその時間で終わるんだって。午前中に会議が一つあるだけだからさ。あんただんだん、性格が悪くなってやいないかい？ とにかくその時間には帰ってくるから、僕の分の朝食も用意しておいてよ。ね？」

「性格が悪くなってるそうだから、うっかり忘れちゃうかもしれないわね」

にこりと笑ってソフィーがそう言えば、ハウルは何とも情けない顔になって、次いで「まったくあんたときたら！」と困ったような笑いを浮かべた。

「わかったよ。仕事をサボってばかりいた僕が悪いんだ。だから今はちゃんと真面目に行ってるだろう？ お願いだから朝から意地悪なことを言わないでおくれよ」

「わかればいいのよ。ちゃんと仕事をしてくれればね。ハウルの分の昼食も作って待ってるわ」

「良かった。ああ、僕あれがいいな。ベーコンの入ったトマトのパスタ。この前も作ってくれただろう？ あれ、本当に美味しかったから。キングズベリーのレストランだって、あんなに美味しい物は作ってくれないと思うね」

大袈裟なことを言うハウルに、ソフィーはやっぱり呆れた。王室にいるのが当然のようなそんな整った顔で言われれば、きつと大抵の女性は頬を染めて喜んだだろう。けれどソフィーは、もうそんなハウルの顔なんて毎日見てきたのだ。言われる褒め言葉にも慣れっこになっていた。

「はいはい、じゃあそれを作っておいてあげる。だからさつさと行きなさい。遅刻常習犯さん」

「本当、ソフィーってばつれないね」

つまらなさそうに言ってから、ハウルはふつと微笑んで、じやあ行ってきました、と扉から出て行った。数秒閉まった扉を見つめていたソフィーは、「さあ、今日も仕事はたくさんね」と楽しそうに呟いて、腕まくりをした。

花屋の仕事は、開店してすぐが一番忙しかった。朝食を食べるハウルを送り出してからの開店になるから、通常の店よりも開店時刻が遅いのも原因の一つなのかもしれない。けれどソフィーは、いくら花屋の仕事が楽しかろうが、無理をして開店時刻を早めるようなことはしないでいいと考えていた。お客さんの中には、もっと早くからやってくれと助かるのに、ともらす人もいないわけではなかったが、ソフィーはそれでいいと思った。無理することを、ハウルや他の二人が望むとは思わなかった。実際、家庭と店の両立で、ソフィーはけっこう忙しい毎日を送っていた。

花屋を開店してすぐに、客商売の家や、きつとこれからデートなのだろうと思えるような男性が、次々と花を買って行った。友人を訪ねて行く人も、迎える人も。どこかの貴族が、わざわざ評判を聞いて召使に花を買いに來させた日なんて、大量の花束を注文していくものだから大変だった。花が足りなくなつて、慌ててマイケルが花畑に走って追加の花を持って来たりすれば、人々は一体どこからこんな見事な花を、しかもこんな短時間で持つてくるのかと口々に尋ねてきた。けれどそれも、ソフィーが「この主人は魔法使いハウルですから」と答えれば、皆はそれなら当然とばかりに大人しくなるのだった。

「この時期は大変ですね。他に開いている花屋さんなんて無いものだから、みんなうちで買っていきますから」

昼が近くなり、やっと一息つけるようになった頃マイケルが言った。忙しさと楽しさで、時間が過ぎるのはあつという間だった。気がつけば、心地良い疲労感だけが残っているのだ。

「ねえマイケル、ちょっと店番を頼んでいい？ 昼の材料を買ってきたいの。今日はハウルが早く帰ってくるそうだから」

言いながらソフィーは、まるでこの台詞では、ハウルの早い帰宅を歓迎しているようだということに気づいて嫌な気持ちになった。どうして毎日顔を会わせている相手だというのに、一々喜ばなくてはならないというのか。無意識に出た言葉だということも厄介だった。

けれどマイケルは、そんなソフィーの微妙な心情にも気づくことはなく、いつもの明るい笑顔で「いいですよ」と答えた。マイケルがそう答えるのはわかりきったことだったから、ソフィーは「ありがとう」と言って家へと戻った。買い物をしてから昼食を作れば、きっとハウルが帰ってくる頃にはちょうど出来上がる頃だろう。マイケルのお腹もすいているに違いない。

「ちよっと買い物に行ってくるわ。帰ってきたらお昼を作るから、協力してちょうだいね」

眠そうに暖炉の中でうとうととしていたカルシファアは、軽く片目を開けた。

「……珍しいね。こんな時間に買い物に行くだなんてさ」

「朝食でベーコンが無くなっちゃったのよ」

壁にかかっていたコートを着て、いつもの買い物籠を手にとって、行ってくるわね、と声をかけてからソフィーはがやがや町に合わせた扉を開けた。キングズベリーの方が高価で美味しい物を買えるのと知っていたが、ソフィーはよっぽどのことが無い限り、買い物でキングズベリーに行くことはなかった。大抵の物ならがやがや町でも買えたし、大体そんな高価な物が、

自分やマイケルの口に合うかどうかはわからなかった。ハウルはどうだかわからないけれど。

最近になって、ソフィーは一人でも買い物に来るようになって。もう大丈夫だと思ったし、実際そうだった。買い物中にそうそう昔話をされるようなことはなかったし、言われた名前に心当たりが無いような場合も、相手の、大方は気のいいおぼさん達も、「まだ新婚なんだから、頭の中が旦那さんのこといっぱいなのも当然だね。何せあんな手のかかる旦那さんなんだからさ」と笑うだけだった。町のおぼさん達にまでそんな風に言われているハウルがおかしかった。

「こんにちは。ベーコンを一本もらえますか？」

馴染みの肉屋に顔を出して、ソフィーはその女主人に向かって言った。ここはご主人と共にずいぶんと恰幅の良い夫婦で、マーサが言った「あそこのご夫婦、毎食にずいぶん立派なお肉を食べてそうよね。商品にはまだ手を出していないようにだけ」という台詞にも、ソフィーは注意をするよりも先に吹き出してしまった程だった。

「おや、珍しい時間に来るね。今日はお店はいいかい？」

「今はマイケルが店番をしてくれてるから。お昼に使うベーコンを買いに来たの」

女主人は慣れた手つきで太いベーコンを一本紙で包むんだ。言われた分を支払って、ソフィーはベーコンを受け取るとカゴに入れた。一気にカゴが重くなる。

「今日はご主人の帰りが早いのかい？ 美味しい物を食べさせてあげなよ」

店を出る際に投げられた言葉に、ソフィーは曖昧に、「ええ、まあ」と答えた。言葉と同様、曖昧な気持ちだった。

ハウルが自分の旦那だということは、知ってもいるし納得し

てもいる。けれどいまだ、ソフィーは自分がハウルに恋愛的な気持ちを抱いているとは思えなかった。恋愛というものがどういふものなのか、知識としては知っていても、感覚的にはわからない。それでも自分のハウルに対する気持ちはそれではないだろうと思っていた。何かこう、恋愛はもっと違った別種の感情だという気がしているのだ。根拠なんて何も無い。ただソフィーがそう思ったというだけだ。けれどそれを言うなら全ての感情なんて、結局はその本人にしかわからないものなのだから。何て不確かなものに左右されているのだろう、人間は。

今の生活に満足している中、わからないものはそれだけだった。ハウル。一緒にいるのが苦痛だとは思わない。怒ることも多くなったが、それでも楽しい嬉しいのだろう。ただ、自分はハウルには恋愛感情は持っていないという気がする。

「……だってそんなの無くていいんだもの」

小さく、小さく、ソフィーは呟いた。隣を通り過ぎた人も聞き取れないぐらい、それは本当に小さな声だった。

そんなの無くてもいい。恋愛感情なんて無くてもいい。だって無くて今はこんなにも幸せなのだ。適度に忙しく充実感があって、日々は楽しく笑って夜は暖かな寢床について。ソフィーはそれだけで満足だった。そこに新たな、追加する気持ちなんて無くて良かった。

「無くていいのよ」

今度はさっきよりも幾分はつきりした声でソフィーは呟いた。皆家で食事をしているのだろう、通りに人はまばらだった。最近ではもう雪も全て溶け、昼間はずいぶん暖かく過ごしやすくなった。それでもまだ、コートを手放せる日は幾分先のようだった。

ベークンの入ったカゴを抱えおして、ソフィーは家路を急

いだ。早く帰って昼食の用意をしなくてはいけない。二人ともお腹をすかしているだろう。ハウルは空腹になると、本当に子供のような顔になって、「ねえソフィー、まだ？ まだなの？」と後ろをちよるちよるしては催促する。今日もそうなるのだろうか。想像してソフィーは笑った。美味しいと言ってくれたパスタは、今日も絶対失敗してはいけないのだから。

「もうずいぶん暖かくなってきたよね。そろそろコートはいらないかもしれない」

夕飯が終わった後の団欒の時間の中で、ハウルはふとそう言った。暖炉前の椅子に座って、ちびりちびりとお酒を飲みながら。ウイスキーとブランドーの違いがソフィーにはわからなかった。ハウルはそう言うと言って、「まあ、ソフィーには縁のないものだからね」と言った。

「じゃあ、数日様子を見て、もう着ないようだったらしまつちやうわね」

ソファーに腰掛け、緑色のマフラーを編みながらソフィーは言った。ずいぶん前に始めたマフラーだったのだが、途中で繕い物が色々入ってきたおかげで、すっかりご無沙汰になってしまっていた。けれどこれも、あと数段で終わってしまう。もうマフラーが必要な時期ではないかもしれないが、中途半端になっているのが嫌なだけだったのだ。

マイケルは風呂に入っているし、ハウルは静かにグラスを傾けているし、実に静かな時間だった。聞こえてくるのは、暖炉

でカルシファアが燃やす薪の音だけだ。

「ああそうだ、ソフィー。僕、明日は帰ってくるのが遅いから。きつと午前様になるだろうな」

「そんなに仕事がたくさんあるの？」

編み物の手を止めてソフィーは尋ねた。午前様になるだろうと、今からわかるような仕事量とはどんなものなのだろうと。そのくせ、ここ最近帰ってくるのが異様に早かったのに。

「仕事っていうか、まあ仕事なんだけども。王室主催のダンスパーティーがあつてね。国王の見栄のために、王室付き魔法使いも着飾って出席しなきゃいけないんだよ。ダンス踊るのなんて好きじゃないんだけどね。何だって魔法使いが、めかし込んだお嬢さん方の相手なんかしなきゃいけないだろう」

ハウルはそれまでちびちびと飲んでいたグラスを、一気にぐいっと傾けた。そうすることで、不平不満まで流し込んでしまおうとするかのように。

ソフィーの脳裏に、着飾ったハウルの姿が浮かんだ。そうしたハウルは、きつと人々の視線を一気に集めてしまうのだろう。王室付きという身分もあいまって、多くの女性がハウルとダンスを踊りたいと望むのは当然のことだろう。そしてハウルは、ここではこうして愚痴を言っても、いざパーティーになれば見惚れるような笑顔を浮かべているのだろう。それは仕事なのだから当たり前のことなのかもしれない。

「王室付きなんだから当たり前でしょ。文句を言うのなら、そんな仕事辞めてしまえばいいじゃない」

ソフィーは自分で自分の言葉に驚いた。自分の言葉にというよりも、その声音のきつさに。

それはハウルも同じだったのか、空のグラスを弄んでいた手がぴたっと止まり、丸くなった目をソフィーに向けた。

「……ソフィー、どうしたの？」

「え、いえ、あの」

どうしたの、と聞かれても、ソフィーにもそんなことはわからなかった。先ほど一瞬間に浮かんだ不機嫌さは今は消え、ただ自分でもわからない戸惑いだけが占めていた。

居心地が悪くて、見つめてくるハウルの視線から逃げたくて、ソフィーはふいっと顔を背けた。

「今、もう少しでマフラーが完成するのよ。最後で失敗したくないから、話しかけないでちょうだい」

「……ああ、ごめん」

素直に謝ってくるハウルに、ソフィーの方こそ謝りたくて仕方がなかった。さっきのあの態度は何だったのだろう。今のだつて褒められたものではない。むしろハウルの方が不機嫌になつてもいいものだというのが、その彼に謝らせてしまうだなんて。自分は一体何をしているのだろう、何を。

気まずさを追い払うためにも、ソフィーは編み物に専念しようとした。ハウルはどう思っただろうか。そんなことを考えていたら網目がわずかに歪んだ。けれど別に平気だろう、何せもう終わりだ。

編み棒を横に置いて、ソフィーは編み上がったマフラーを広げてみた。編み上げた充実感には確かにあつたが、それよりも後を引く気まずさの方が今はずっと大きかった。

「それ、だれかにあげるの？」

おずおずとしたハウルの声だった。先ほどのソフィーの言葉を、マフラーが完成するまで話しかけるなという風に受け取ったのだろうか。

「別に、とくには決めてないけど」

ハウルは何も悪いことはしていないというのに、どうしてそ

んな卑屈な態度をとるのだろう。まるで自分の機嫌を損ねたら、この家から追い出されるとでも思っているかのようだと言いついては、また機嫌は急降下していきそうだった。

ハウルが何か言おうと口を開けたのを見て、ソフィーは先に言った。

「マイケルに似合いそうな色だとは思ってたけど」

「……うん、そうだね」

とたん、がっかりしたように背中を向けたハウルに、これは意地が悪すぎたかとソフィーはすぐさま反省した。ハウルは何も悪いことなどしてはいないのに。

「えっと、でも、マイケルにはあけないわ。マーサが機嫌悪くするかもしれないし。何となく編んでただけだから」

言っても、ハウルは振り返らなかった。自分よりも大きな背中がいじけているように見えて、それはソフィーの気のせいかもしれないなかったが、どうしてか申し訳ない気持ちでいっぱいになった。先ほどの不機嫌さなんてどこかへ行ってしまっていた。

「あの、さっき、何か言いかけたでしょう？ 何だったの？」

努めて優しい声でソフィーは尋ねた。ごめんなさいと言言えればいいのに、それができない自分が本当に馬鹿のようだと思った。

「ハウル」

マフラーを持ったままハウルの傍に行き、後ろから声をかけた。つんつん、と背中をつくと、ハウルは拗ねているのかそうでないのか、よくわからない表情で振り返った。迷っているようにも見えた。

「……あの、嫌じゃなければの話なんだけど」

「ええ」

ソフィーは、ハウルが何を言うのか大体の見当がついていた。

「そのマフラー、僕に比べると嬉しいなって……思ったりしなくもなかったりするんだけど」

思った通りの言葉は、非常にややこしいものだった。

「どっちなのよ」

呆れ返ってソフィーが聞くと、ハウルは頬を赤くした。照れているハウルをソフィーが見たのは、もしかしたら初めてのこともかもしれない。

「さっき、ずいぶん暖かくなってきたからコートはいらないって言ってなかった？」

「うん。コートなんて厚手の物はいらないけど、でもまだ首元は少し寒いと思うんだ。緑って僕の好きな色だったりするし」

ソフィーは自分自身に対して、素直ではないという自覚があったけれど、それ以上にハウルは強かなようだった。

こっちの顔まで赤くなりそうで、ソフィーは乱暴にマフラーをハウルの首に巻いてやった。ハウルの眩しい金髪に、深い緑のマフラーは確かによく似合っていた。まるで初めからこうなることが決まっていたかのように。

「やった！」

子供のように顔を輝かせてハウルは笑った。その顔があまりに嬉しそうだったから、ソフィーの心臓が音を立てた。

大きく一つ。

どくん、と。

今日は天気の良い日だった。洗濯物を干している時、あまり

に空が気持ち良く晴れているものだったから、ソフィーは何となく出かけたくなって、今日は思い切って花屋は休むことにした。

「珍しいですね。ソフィーさんが自分から花屋を休みにしようだなんて」

マイケルは驚いていたが、マーサに会いに行ける思いもしない時間ができたおかげで、ずいぶんと嬉しそうだった。

マイケルが居間で課題をこなしている間に、ソフィーは手早くピーナツバタークッキーを作った。日課の散歩に行けずカルシファアは不満そうだったが、出来上がったクッキーを数枚もらうと喜んでばりばりと食べた。

「ソフィーさん、そのクッキー、少しもらってもいいですか？」

「あら、マイケルの分はちゃんととってあるわよ？」

「いえ、そうじゃなくて、マーサにも持って行ってあげたくて。」

マーサ、ソフィーさんの作ったお菓子が大好きですから」

そう言って照れ臭そうに微笑むマイケルの表情がソフィーは好きだった。マーサのことを話す時、マイケルはいつも見ている方が嬉しくなってしまうような微笑を浮かべる。

「マーサは幸せ者ね」

もちろん、マイケルの頼みを断る理由なんてなかった。あの可愛らしいマーサが喜ぶと知ればそれはなおさらのこと。

少し時間が経って冷めたクッキーを、戸棚の中から取り出した小さな袋に数枚つめ、可愛らしいリボンで口を縛って机に置いた。マイケルは嬉しそうに「ありがとうございます」と言った。

「わたしもちよつと出かけてくるわね」

マイケルの分を残し、後のクッキーも同じように袋につめながら言うと、課題を終えて本を片付けていたマイケルは少し目

を見開いた。

「どこにですか？」

「レティーの所。マーサの所には、ほら、がやがや町だからよく顔を出すんだけど。キングズベリーにはなかなか行けないでしょう？ だからちよつと行つてこようかと思つて」

ソフィーがそう言うと、マイケルは穏やかなその顔に、けれど若干不安そうな色を浮かべた。どうしてだろうとソフィーは思い、すぐさまこの優しい少年が考えそうなことに思い至って安心させるような笑顔を浮かべた。

「大丈夫よ、そんな心配しなくて。何度かレティーの家には行つてるもの。それにもし迷つたつて、サリマンさんの屋敷はどこですかつて人に聞けばいいだけなもの」

それでもマイケルは何かを言いかけたが、少しの後には軽い笑顔を浮かべた。

「そうですね。すみません、何か過剰な心配をしちゃつて」

「ううん、いいのよ。ありがとう」

マイケルがそんな心配をしてくれることが、ソフィーは素直に嬉しかった。何しろここで生活を始めてから、些細なことから何まで全てマイケルが面倒を見てくれたのだ。ちよつと買い物に行くのだって、迷惑な顔一つせずにつき合ってくれていたのだから。

「あの、でも、寄り道しないでまっすぐ行つて下さいね」

クッキーをカゴに入れ、上着を羽織つたソフィーにマイケルは続けてそう言うものだから、ソフィーは思わず首を傾げてしまった。

「ねえ、マイケル。もしかしてわたしつて、すごい方向音痴だったりするのかしら？」

だからマイケルがそこまで心配するのだろうか。それならば

納得が行くと思っただのだ。

「……ええっと、すごいとまではいきませんが……まあ、少し人より道に迷いやすかったというか……」

マイケルのその言葉が、自分にとっても気を使ってくれているのだということは、素直な彼の表情からソフィーはよくわかっていた。自覚は無かったが、自分はそれほどまでに方向音痴なのだろうか。言われても腹立たしい思いではなく、新たに知った事実にただ驚いた。

「わかったわ、まっすぐ行つて、まっすぐ帰ってくるわね」

こんな時ふと、いつになれば、自分はだれにも心配されずに生活を送ることができるのだろうかと思ふ。ソフィーは思う。自分一人で全てを成し遂げられる日はいつ来るのだろうか。けれどそれは、決して義務等で心配してくれているわけではない彼らに対して、あるいは失礼な感情なのかもしれない。それでもソフィーは放っておいて欲しいと、時たま無性に思ってしまう。

「行ってくるわね」

だからこそきつと、気分転換というのは必要なのだろう。

ソフィーは思つて、笑顔を残して扉を開けた。

それはがやがや町では決して見られない、都会特有の喧騒の中でのことだった。

どこに居ても、見つけられるのだろうかと思ひに思つた。

それともそれは、相手が彼だからなのだろうか。あの目立つ彼は、どこにいてもその自身の輝きを曇らせることはなくて、だからこそ今もソフィーの目にその姿を焼き映すのだろうか。

ハウル、と、声をかけるべきなのかソフィーは迷つた。こんな街中で彼を見かけたのはこれが初めてだった。人ごみの中、

数人先に見える後姿が、ハウルでない他のどれかであるなんてことは無いと思つた。あんな派手な服に身を包む人をソフィーはハウルの他には知らなかったし、けれどそれ以上に、直感的にあの後姿はハウルだとソフィーには考えるまでもなくわかっていた。

ハウルによく似た後姿を見つけ、思わず進路を変え、それが彼だと確信しても、ソフィーはそれ以上の行動に出ることができなかった。王室で仕事をしているはずの彼が、どうして昼間に街中を歩いているのかはよくわからないが、それでも仕事であることに違いはないだろう。

声をかけるべきか、このまま元の道に戻つてレティーを訪ねに行くべきか。自分でもどうしてそこまで思うぐらいソフィーは悩んで。

ふと、その視線が止まった。

慣れない人ごみの中で、今までは見えなかった。彼の隣を、豊かな金髪の巻き毛を揺らした女性が歩いている。談笑する彼の横顔は笑顔を刻んで、家で見えるものとはまた違うその笑顔にソフィーの胸が鈍く軋んだ音を立てた。

思わず足は止まった。急に足を止めたソフィーにぶつかった通行人は遠慮無しに舌打ちをもらした。ほとんど反射的に謝罪の言葉を短く呟き、のろのろと足を動かしながら、ソフィーの視線はハウルから、その隣を歩いている女性から離れなかった。ただ、泣きたかった。理由も無しに涙が流れそうになつて、それを堪えると鼻の奥がつんと痛んだ。カゴを持つ手に力が入った。

あれはきつと仕事仲間の女性なのだろう。すぐさまそう思つた。……そうであればいいと思つたのかもしれない。

ここに来て唐突にソフィーは理解した。いつからか、ハウル

を自分だけのもののように思っていた。彼を笑わすことも喜ばすことも、彼の行動も全て自分に繋がっているような、そんな錯覚さえ抱いてしまった。そんなはずはないというのに。いくら自分とハウルが夫婦だとしても、彼には彼の世界があり、それはソフィーを中心に回っているわけではないというのに。

「……っ」

羞恥が一気に顔中に集まったような気がした。無意識の内とはいえ、何て思いついていたのだろう。彼の優しさを、自分は何て傲慢に受け止めていたのだろうか。

ハウルを呼びたかった。今すぐにでも、ごめんなさいと謝ってしまいたかった。彼には一体何のことかわからないかもしれない。それでもソフィーは謝りたいと思った。勝手な自分を許してもらいたかった。そしてそれと同時に、もう顔を合わせることができないとも思った。今すぐ逃げてしまおうか。こんな思いついた自分を、もう二度と彼に見てほしくなどなかった。

浮かんだ涙に歪んで彼の姿がぼやけて見えた。それでも、彼の顔が振り返り、吸い込まれるような翡翠の双眸がしっかりと自分の瞳を捉えたように思えたのは、それは決してソフィーの思い込みなどではなかった。

「――」

周りの喧騒から、その瞬間だけ、瞳が合わさった瞬間だけ、切り離されたようだった。

時間が動き始めたのと同時にソフィーは踵を返して走り出した。彼に見られた。ハウルに見られた。自分のこんな、真っ赤になって涙を浮かべた顔を、ハウルに見られてしまった！

「ソフィー！」

名前を呼ばれたような気がした。けれどそれは気のせいだった。

たのかもしれない。この喧騒の中で、彼の声だけがそんなにはつきりと耳に聞こえてくるわけがない。それでもソフィーはその声から逃げようとした。何人もの人にぶつかった。謝る暇もなかった。ハウルが追いかけてくるかどうかもわからない。仕事中であれば、きつとそうであるから、自分のことなど放って仕事を優先させているかもしれない。そうであってほしい。

ハウルに捕まることが怖かった。顔を見ることが怖かった。自分が何を言ってしまうのかソフィーにはわからなかった。何を考えているのかも。言葉はただぐるぐると頭の中を回るだけで、ソフィー自身にもわからないこの感情の渦巻きを、とてもハウルに言えるはずはなかった。

会いたくない会いたくない。忘れて欲しい。忘れてはくれないだろうか。どこを走っているのかもわからない。人ごみの中を避けてソフィーは唐突に道を一本曲がった。細い小道。裏通りのどこかだろうか。どこでもいいと思った。だれにも会いたくない、話したくない、ハウルにはハウルにはハウル！

「ソフィー！」

声は、錯覚などではなかった。腕を掴まれる。引かれる強い力に、到底逃げられるはずもなかった。ああ、と息を吐く。どうして、どうして、どうして。追ってなど来なくて良かったというのに。放って置いてくれた方がずっと良かった。

「ソフィー、ねえ、何で逃げるのっ？」

ハウルの声は、ただ存分に戸惑いと驚きを含んだものだった。それも当然だった。きっと彼には何もわからないことだろう。キングズベリーの街中で、どうしてこんな風に自分が逃げ出しているのかなんて。

「大体、どうしてあんたがこんな所に……ああ、まあそれはいいとしても。ねえ、何で逃げるの？ ソフィー、あんたどうし

たのさ？」

どうしたの、と。そんなことを聞かれたって。

立ち止まって、ソフィーは唇を噛み締めた。言葉が何も浮かばなかった。何を言っても形にならないような気がしたし、一度口を開けばとんでもないことになってしまうような気もした。頭の中が真っ白だった。心臓の音が大きく、いつもよりも早く血が血管の中を流れていくかのようだった。

——どくどく、どくどく。耳のずっと奥に、そんな深く沈んだ音をただひたすらに立てながら。

「ねえ、ソフィー、どうしたの？」

ハウルはただ心配しているだけなのだろう。ソフィーにもそれはわかっていた。そのことにありがたさを感じ、それと同じぐらいの申し訳なさと、そしてそれ以上のよくわからない感情にソフィーは支配されていた。

何も言えない。何も、わからない。

「ソフィー」

切ないようなハウルの声音に、自分がどうしようもないほど悪いことをしているような気にさせられた。ハウルの声音はそんな力に満ちていた。それも彼が魔法使いだからだろうか。それとも、彼がハウルだからなのだろうか。

掴んだ手をハウルは引いた。逆らえるわけもなく身体は容易くハウルに向けられた。片方の手で顎を持ち上げられた。目を伏せるのは卑怯な気がして、ソフィーはハウルの顔を見上げた。彼の驚きに染まった顔を。

「……どうしたの？」

同じ台詞でも、先ほどよりも具体的なそれだった。どうして泣いているのかと、問われている内容はすぐにわかって、答えることはとても難しかった。

自分でもよくわからない——いや、わかっている。だからこそ言えない。言いたくない。自分のこんな愚かな思い込みを、彼に話して呆れられるような光景は見たくなかった。

そんなことになるぐらいなら、何も話さない方がよっぽどマシだと思った。それでいくら彼を不機嫌にさせようが、呆れられ見捨てられるようなことになるのとは比べれば。

「ソフィー、話して」

それでも彼の声音は、どこか従わざるを得ないような響きを纏って。言葉はじんわりとソフィーを絡め取っていくように。

「……だ、って」

話そうと口を開くと、浮かんでいただけの涙が盛り上がり、そのまま静かに頬を流れた。気づいたハウルの指がそれを拭った。触れた指の温かさに、余計に涙は刺激されたかのようにだった。

「あなたが……さっき、女の人と歩いてて……」

言った言葉に、どつと感情が胸の中に溢れた。

ハウルが女性と一緒にいることが嫌だった。嫌だと思う自分が信じられなかった。ハウルは自分だけのものと、そんな愚か過ぎる思い込みにいつの間にか浸っていた自分。そんな自分知らなかった。今初めて見つけたそんな自分が。

どうしようもなく、嫌だった。

「何でもこんなこと思うのかわからないの！ わたしいつの間にか、無意識の内にあなたのこと独占していたみたいで……ごめんなさい、ごめんなさい！ こんな自分がすごく嫌なの。わたしどうして、こんなに汚くなってるの……」

何も変わることもなく過ぎる日常の中で、他人同士が家族のように暮らし、それだけで十分すぎるほどには満足していたはずだというのに。知らぬ内に食欲になっっている自分がいた。それ

に今まで気づくことすらせずに、さも当然のように受け止めて
すらいただなんて。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

思い上がりも甚だしいと、彼に笑われるぐらい良かった。
ハウルに呆れられたり、あるいは——嫌われてしまうことが、
今はただ怖かった。それ以外には何も無かった。

「ごめんなさい……！」

謝ることしか今はできないと、ソフィーはそう思った。
だから。

「ソフィー」

俯く彼女の顔を上げさせたハウルが、どうしてそんなに、泣
きたいのを堪えるかのような顔で笑っているのか、ソフィーに
は何もわからなかった。

「あんたって、何でそう相変わらず鈍感なんだろう」

ソフィーが何かを言うよりも先に、ハウルの腕が背中に戻っ
た。すっぽりと腕の中に包み込まれ、ハウルの心臓の音が大き
く耳に響いた。わずかに早鐘を打っている、心安らぐその音を。

寄りかかるものが欲しかったソフィーは、考える前にその胸
に身を持たれかけた。今まで訪れた時たまの、どこか遠慮がち
な抱擁とは違い、しっかりとソフィーの身体を包んでいた。

その温かさに、目眩がした。

「僕はいつだってあんたのことを独占したいと思ってるんだよ。
正直マイケルに笑いかけるあんたを見るのだって辛いんだ。
笑うのも話すのも、ソフィーの相手をするのは僕だけでいいっ
て思っちゃうんだ。そんな自分を、とても子供っぽいとは思っ
てどね。だってしょうがないだろう？　それが恋ってものなん
だからさ。奇麗事だけじゃ生きてけないさ」

頭の上から響く声は、そのままソフィーの胸にまで響いてい

くようだった。ハウルの言葉にただ驚き——ああそうなのか、
と、ソフィーはまるで当然のようにそれを受け入れている自分
に気づいた。戸惑いよりも、安堵の方がずっとずっと大きかつ
た。

——答えはいつだって、すぐ傍にあったのに。

どうしてそれに気づかなかったのだろう？　見つけることが
できなかったのだろうか？

「わたし、ずっとずっと、あなたのことが好きだったのね」

すんなりと、そんな言葉が、ソフィーの口から零れ落ちた。

いつからなんてそんなこと、きっと考えるだけ無駄なことな
のだろう。始まりも終わりもわからない。それがきつと恋愛と
いうものだろうか。

「やっと気づいてくれたの、ソフィー？」

「わたし、鈍感だそうだから。仕方ないでしょう？」

見上げたハウルの双眸は子供みたいに光って。

徐々に近づく顔にソフィーはそっと目を閉じた。人間とい
うのは不思議だと思った。教えられなくとも、どのタイミングで
目を閉じればいいのか、どうして知っているのだろうか。

ハウルと交わすキスの味は、涙に濡れて少ししよっぱかった。

心地良いベッドの中で、朝のまどろみを楽しみながら、決まった時間に聞こえてくる足音を聞くだけで幸せを感じることができた。本当に現金だなと笑いながら、ハウルは毛布を頭の上まで引つ張り上げた。

明るいノックの音。「ハウル、朝よ」と、いつものように愛しい声が聞こえた。けれど返事はしない。してはいけない。ハウルはベッドの中でじつと身を潜めた。やがて扉が開いて、足音はもうすぐそこまで近づいて来ていた。

「ハウル、朝よ、起きて。もう朝食の用意もできて……」

言葉の途中でハウルは顔を出し、そのまま揺さぶっていた腕を軽く引つ張った。とたんに倒れこんでくる小さな身体を受け止めて、ハウルはこの上も無く幸せそうに微笑んだ。

「おはよう、ソフィー」

ああ今日も何て素敵な朝なんだろうねと、ご機嫌のまま続けようとした言葉はソフィーの怒鳴り声にかき消された。

「ハウル！ いきなり何するのよっ！」

顔を真っ赤にして叫ぶソフィーは、依然妻と言うよりかは可愛らしい初心な恋人といった様子で、けれどハウルはそれに物足りなさを感じるわけではなく、そんなところが可愛いのだとそれはそれで満足していた。

「そんなに怒らなくたっていいじゃないか。ちよつとした冗談なんだから。ねえ？」

「朝っぱらからふざけるのは止めて！」

「じゃあ夜ならいいの？ でも夜だと、おふざけじゃ済みそうになくなっちゃうような気がするんだよね」

「ハウルっ！」

顔を真っ赤なリング色に染め上げて、ソフィーは声高に叫んだ。ソフィーの腰に手を回したまま、ハウルは思わずくつくつと咽を鳴らした。そうやって一タムキになる姿が可愛くて、ついついそんな冗談を言ってしまうのだと言えば、一体ソフィーはどんな反応をするだろうか？

「ねえ、このまま一緒に二度寝しない？」

「嫌よ、男の人のベッドで寝るなんて」

平静を装って言った台詞ではあったが、そう言うソフィーの頬は依然赤いままだ。自分で言った言葉を多大に意識していることがわかって、ハウルは浮かべた笑みが引きそうにはなかった。

「もう、ほら、いい加減にして！ 朝ごはんが冷めちゃうわ」

「今日の朝ごはんは何だい？」

「チーズの入ったオムレツ。だから、ほら！」

これ以上やってはソフィーの機嫌を損ねることになるだろう。声音の微妙な変化にそれを感じて、ハウルは大人しく手を放した。とたんにソフィーはぱつと離れて行く。真っ赤な顔で視線をハウルと合わそうとしない様子が、本当に可愛かった。

「早く着替えて降りてきて！」

「わかったよ。チーズが柔らかいうちに美味しく頂きたいからね」

太陽の香りのする毛布をかけて眠り、キレイに洗濯のされた洋服を着て、そうして朝から愛しい人の作った温かな朝食を食べる。

ああ、それは。

——何て何て、贅沢なことなのだろう。

ベッドに腰掛けたまま、ハウルはその温かさに酔いしれた。一階からソフィーの呼び声が聞こえてくるまで、そうして窓の

外の小鳥の囀りに耳を傾けていた。

「今日は仕事が進みなんだよ」

これ以上嬉しいことは無いと言わんばかりの声音でそう言ったハウルに対して、朝食の食器を洗っているソフィーの反応はとても冷めたものだった。

「あらそう、良かったわね」

「何だい、僕がせっかくの休日だったのに、あんたは喜んでくれないの？」

がくつと機嫌を悪くして、ハウルは子供のように唇を尖らせた。けれどソフィーは、ハウルの機嫌をとるところか振り返りもせずに言い放った。

「あなたのその台詞、昨日から何度も聞いてるのよ。いい加減聞き飽きたわ」

「だって久々の休日なんだよ」

休日というものの有り難さが、ソフィーにはわからないのだろうか。わからないのかもしれない。何せ記憶を無くす前も無くした後も、変わらず毎日それこそ朝から晩まで働きっぱなしなのだから。そんな姿を見て、ソフィーらしいと安堵する反面、そんなところぐらい少しは変わっていてもいいのにと、そう思ってしまうのはとても勝手なことなのだろう。

「休日なら休日で、あなたはゆっくりしていればいいわ」

「ソフィーはゆっくりしないの？ 今日花屋も定休日だろう？」

「花屋の仕事は休みでも、わたしの仕事は休みにはならないの。食事は作らなきゃいけないし、掃除だってあるんだから。家事に休日なんて無いのよ」

その台詞を言う間にも、ソフィーは忙しく手を動かし、次々と皿をキレイにしていく。この季節、まだ水は冷たいだろうに、当然のことだがそれに文句を言うようなことはない。

「……ソフィー、本当に変わってないね」

その台詞も声音もやっていることも、何から何まで以前の彼女と全く同じで、同一人物だからそれは当然なのかもしれないかったが、ともすればハウルはつい錯覚してしまいそうだった。その度に軽く頭を振る。

こんな会話に付き合っていられないとでも思ったのか、ソフィーは返事をすることもなくただ黙々と皿を洗って行った。椅子に腰掛け食後のお茶を飲みながら、ハウルはその後姿を眺めていた。

「ねえ、ソフィー」

何かを聞きたいと思った。以前とあまりに変わらなさ過ぎる日常の風景だったから、思わず記憶が戻ったのではないのかなんて、そんなことを聞きたくなってしまう。

バカげていると胸中で呟いて、ハウルは代わりに違うことを言った。いつもの笑顔を浮かべて、頬杖を付きながらソフィーを見上げた。

「午前中の家事が終わったらさ、どこか出かけようよ」

「どこかって？」

前掛けで手を拭きながら、ソフィーはまるでハウルの返答次第だというような視線を投げかけてきた。

「どこでもいいよ、ソフィーが楽しめる所なら。がやがや街の公園に散歩に行ってもいいし、キングズベリーで食事をしてきただっていいし。たまにはほら、デートでもしようよ」

デートという言葉に、うつすらとソフィーの頬が染まった。自分でもそれがわかっているのか、ふいっとそっぽを向いて必

死にそれを隠そうとしている。例えばソフィーのどんなところが好きかと聞かれたら、それはもう言い切れないほどの数が浮かび上がるけれど、確実なこんな照れ屋なところだとハウルは言うだろう。愛すべきソフィーの美点だった。

「ソフィーが嫌ならいいんだけど」

意地っ張りなソフィーは、こちらがあまりに強く誘いを書けると、妙な意地を張ってあれこれと用事を作り出してしまふのだ。はつきりと誘いをかけ、けれど決して押し付けられないことが大事だとハウルはわかっていた。

「でも僕は、できればソフィーと行きたいんだけどな」

自分がこうして浮かべる笑みに、ソフィーが弱いことは知っていた。けれどソフィーが浮かべる笑みに自分は弱い。つまりそういうことなのだ。恋愛なんてそんなもの。

笑顔で見つめてハウルはソフィーの返事を待った。照れて前掛けをしわくちやにしているソフィーの様子を眺めていた。

「……洗濯物干して、簡単に箒をかけた後なら」

予想通りのソフィーの返事に、ハウルは笑顔で残りのお茶を飲み干した。洗濯物を手伝って、早く二人で出かけるために。

ハウルの隣を歩くのは、いつだってソフィーにある種の緊張を強いることだった。ハウルと町を歩くだけで、周りの人々の視線が痛いほどに向けられるのがわかる。ハウルはそんなことは気にしないのか、いつだって素のままに行動できるのだから、ソフィーからすればそれは本当に羨ましい限りの話だった。今

だってそう、にこやかな笑顔を浮かべて、子供のように楽しそうに笑っている。そうしてふいに、髪の一房を手にとって口付けなどをしてくるのだから、ソフィーは真っ赤になるどころの騒ぎではなかった。街中だということがわかっていろいろなか、ハウルは。

「だって、真っ赤になるソフィーが可愛いからさ」

怒って怒鳴りつけるソフィーに、ハウルは懲りた様子もなく笑ってそんなことを言う。

可愛いと言う言葉は、何度言われたって慣れなかった。それほどまでに自分に似つかわしくない言葉も他には無いだろうと思えてしまつて仕方ない。一体自分のどこがそんなに可愛いと言うのだろうか。ソフィーは心底それを不思議に思っていたが、まさかそんなこと、面と向かってハウルに聞けるはずもなかった。ハウルはどうせまた笑うのだろうか。

「ねえほらソフィー、あれあれ！」

「……今度は何よ？」

ハウルと一緒に歩いていると、時間の割りにちっとも先に進まなかった。並ぶ店や露店にすぐさま目を留めて、ハウルは十歩歩けば止まってしまうのだ。

今回またハウルが指差した先に視線を向け、そこに先ほども見たようなアクセサリーの飾られたウィンドウがあるのに、ソフィーは軽いため息をついた。

「さっきも似たような店を覗いたじゃないの。あんたって、本当に光り物が好きね」

その声には、まるでカラスと同じね、という響きが存分に含まれていた。ハウルもそれに気づいたのか、そんな、でも言うかのような表情になった。

「いいじゃないか、ちよっと店を見て回るぐらい。何か気に入

ったのがあったら、あんたに買ってあげようと思ってるのに」

他の女性であれば素直に喜ぶようなハウルの台詞にも、ソフィーは目を輝かすどころか嫌そうに眉を寄せるだけだった。

「いらないわよ、そんなの。興味も無いし、つけるような場所もないでしょ。お願いだから無駄遣いしないでちょうだい」

ハウルの趣味にとやかく口を出す気はなかったが、それが自分にと回ってくれば、ソフィーははっきりそう言わないわけにはいかなかった。そうでなければ、ハウルはきっと自分の気に入ったものを次から次へと買ってくるに違いないのだから。

「あんたって、本当可愛くないなあ！」

先ほど可愛いと言った口で、呆れ切ったようにハウルは言った。都合のいい口ね、とソフィーは胸中で呟いて、「可愛くなくて悪かったわね」とそっぽを向いた。

確かに自分の言い方が可愛くないことは自覚しているが、それでも家計の財布を握る身としては、そうそう紐を緩くするわけにはいかなかった。

最近になってハウルの尋常でない浪費癖を知ってから、それもおさらだった。王室から月に一度、けっこうな額の給料を貰っているはずなのだが、毎日の買い物をしているソフィーの手には何も入ってこない。別に財布が苦しくなったわけではなく、ただハウルの給料はどうなっているのだろうとふと思議に思い尋ねてみると、ハウルは少し申し訳なさそうに、けれどあっさり「あー、ごめん。使っちゃったんだ」と言ったのだ。あの瞬間の驚きは、ソフィーにはとても言葉にはできなかった。

「そんなとこぐらいは、変わってくれてもいいってのにね」

どこか疲れたように、さりげなさを伴って言われた言葉はソフィーの胸にわずかな痛みを与えてくれた。変わって——変

わって——どんな風に、どうやって？

「あなた、そのマフラー、もう暖かくなっただから、いい加減にするの止めたら？」

わずかな胸の痛みから話を逸らしたくて、ソフィーはハウルが首に巻いたマフラーに視線を向けた。先日ソフィーが仕上げた緑色のマフラーをハウルはいたく気に入って、仕事に行く時も出かける時も、いつでもそのマフラーを首に巻いていた。

「だってこれ、気に入ってるんだ」

子供のような純粹そのものの笑顔だった。その笑顔を見るだけで、ソフィーはもう何も言えなくなってしまう。どれだけの力を秘めた笑顔なのか、ハウルはわかっているのだろうか。

巻いたマフラーに触れて、ハウルは満足そうに微笑んだ。次々と花が咲き始めるこの季節、マフラーは少々場違いだったが、ハウルはそんなことは気にしないのだろう。

「あんたって本当、編み物とか好きだよな」

「……そう？」

嬉しように微笑むハウルに対し、ソフィーはそれしか言うことができなかった。

見上げたハウルの視線がソフィーの瞳にぶつかり、その瞬間ソフィーは唐突にそれを見た。ハウルの視線の先を、確かに見たような気がした。

彼がいつだって見つめているものを。

彼はそれに気づいているのだろうか。ハウルは、自分の見つめている先をわかっているのだろうか。見つめているソフィーを通り越し、自分が真に欲しているものをわかっているのだろうか。

言葉ではなく瞳だけで全てがわかった。それはどんな言葉よりも雄弁に、ハウルの全てを語るものだった。

ソフィーは何も言う言葉もなく、そっと目を伏せて唇を噛み締めた。彼には聞こえない声で、どうしてと小さく呟いた。ハウルは瞳に、ただ、映りたかった。

ハウルが仕事を終えて家に帰った時、居間にはもうだれもいなかった。ソフィーもマイケルも寝てしまったのだろうか。この時間だ、無理は無いと思いつつも、それでも浮かぶ若干の寂しさを理解して、ハウルはふっと苦笑した。朝もいつものように見送られ、毎日顔を合わせているというのに、たったこれだけの間離れているだけで、もうこんなにも寂しくなる。

「……まったくなあ」

この病気は治りそうにないなとハウルは笑った。元より治す気なども無い。

マフラーを外し、いつものようにソファーに投げながら、まだ部屋の中に暖かさが残っていることに気づいた。暖炉の中のカルシファアはもう眠ってしまっている。けれどつい先ほどまで、恐らくはソフィーのために部屋を暖めていたことがわかった。マイケルはソフィーよりも先に自室へと戻ってしまふ。

まだソフィーは起きているだろうか。時計を見ると、十一時を少し過ぎたところだった。早寝早起きが基本のソフィーには微妙な時間だった。けれどこのままソフィーの顔を見ずにベッドの中に入ることを考えると、ハウルの足は自然と階段を上っていった。少しでも顔を見て、そうしておやすみが言えればいいと思った。

暗闇の階段を上がり、足音を立てないように廊下を歩く。しばらく前から、ソフィーの寝床は階段下から自室へと移っていた。仕事帰り、ふと立ち寄った家具屋でいいベッドを見つけ、そのままハウルがそれを購入してしまったのだ。ソフィーは無駄な出費だと言っていたが、それでも案外ベッド自体は気に入ったようだった。本当に素直じゃないとハウルはその様子を笑いながら眺めていた。

何も疚しいことをしているわけではないのだが、光のない空間の中では、大きな足音を立ててはいけないように思えた。

暗闇に慣れた目がドアノブを確認する。小さく息を整えてから、ハウルは軽くドアをノックした。寝ているのであれば起こしたくはなかった。自分もそれはもう働いてはいるが、彼女が一人倍な働き者であることもよくわかっていた。

もう寝てしまっただろうか、どうだろうか。あと数秒だけ待とうとハウルが思い始めた頃、静かに部屋の扉が開かれた。

「……ハウル？」

中途半端に開けた扉から顔を出して、ソフィーは驚いたようにハウルの名を呼んだ。

「ごめん、もう寝るところだった？」

髪を解き、カーディガンを羽織ったソフィーは、昼間とはまた違った雰囲気、若干大人びているようにハウルの瞳には映った。

「ううん、今は本を読んでいたから……どうしたの？」

こんな風にハウルが夜のソフィーの部屋を訪ねたのは初めてのことだった。戸惑いの色を浮かべるソフィーに、ハウルは小さく笑った。

「何でも無いんだ。ただちよつと、おやすみを言いたくて」
言うところソフィーは、素直に驚いたようだった。目をまん丸に

するソフィーに、まるで自分がひどく子供染みたことを言っているような気になって、ハウルは照れ隠しに笑った。

「……ええっと、ごめん」

「何で謝るの？」

そんなことでわざわざ、読書の時間を邪魔して悪かったとハウルは素直にそう思った。けれどソフィーは気にした様子もなく、むしろ、決してハウルの思い込みなどではなく、嬉しそうに微笑んでくれたから——ハウルの唇は、ごくごく自然に、ソフィーのそれに重なって行つた。その笑顔に吸い込まれるかのように。

「おやすみ」

一日の終わりにソフィーに会うことができて満足だった。ハウルは微笑んで、自室へ行こうとした。夕飯を食べる気にはなれなかったから、今晚はもうすぐに休んでしまおうと思った。

そのハウルの腕を、決して強くない力でソフィーが掴み、引きとめた。

「ソフィー？」

「どうしてキスするの？」

振り返ったソフィーの顔には、先ほどまで浮かんでいた笑顔は消え、何かを思いつめているかのようにだった。その変化にハウルは驚き、かけられた言葉に眉を寄せた。

キスの理由なんて、そんなもの。今更聞かれるようなものだとは思わなかった。理由を聞くぐらいなら、どうして今まで何度も受け入れてきたのかと、逆にハウルは尋ねたかった。

「愛してるから」

一言でハウルは答えた。それ以外には何も無かった。けれどでは、その言葉だけで全てが現れるかというと、それも違うような気がして仕方なかった。愛しているから傍にいる、キスを

する。しかし決してそれだけではない。

「愛してるから、キスしたいって思ったんだ。ソフィーはそうじゃないの？」

人の心を覗くことはできない。それでもハウルは、ソフィーが自分に抱いている思いが恋慕であると信じて疑っていないかった。見えたわけでも手にとって調べることもできない。それでもソフィーの眼差しの一つ一つが、かけられる言葉に含まれた感情が、彼女の恋心をこの上も無いほどには表していた。

疑うものなどは何も無い。だというのに、ソフィーの口から出る言葉は、ハウルにはわからないものばかりだった。

「嘘」

何に対してそう言っているのか、すぐにはハウルにはわからなかった。

「わたしのこと愛してるだなんて、そんなの嘘じゃない」

「ソフィー……？」

違うと断言することができなかった。思いが揺らいだわけではなく、どうしてソフィーが今更になつて、そんなことを言い出すのがわからなくて、ハウルは否定の言葉を口にするのができなかった。

冗談を言っているのかと思った。けれどソフィーの表情は真面目そのもので、思いつめたような瞳に揺らぐ色は、今彼女がとても苦しんでいることを現していた。どうしてそんな、言う方も言われる方も苦しむ言葉を、どうしてソフィーは。

「僕の気持ち、疑ってるの？」

これ以上無い程には愛情を示しているつもりだった。時に鬱陶しいかと自分でも思える程には。いくらでも溢れてくるこの感情を、日々胸の中にぎっしりと詰めているというのに。

「だってあなた、わたしのことなんて見てないわ」

「ソフィー、何を言って……」

「いっただってハウルが見てるのはわたしじゃない。記憶を無くす前のわたしよ。今のわたしじゃなくて、過去の『ソフィー』を見てる。あなたが愛してるのは、わたしじゃなくて『ソフィー』じゃない！」

ソフィーの叫びを、瞬間、ハウルの耳は理解することを拒んでいた。視線一つ外すことなく、見上げるソフィーの双眸をハウルは見つめた。潤んだ瞳を素直にキレイだと思った。豪華な宝石にも弾かれるが、それでも彼女の瞳の方が何よりも、ずっとずっとキレイだとも思う。

今のソフィーと、過去の『ソフィー』

今はもう、その二つを隔てる物は何も無いかのように思えた。今のソフィーも何ら昔と変わらず、ときにハウルですら、このソフィーが過去の記憶を無くしているなんてこと、ふと忘れてしまいそうになるぐらいには。

ソフィーの言葉に、そんなことないと否定の台詞を、ハウルは口に出すことができなかった。

何も変わっていない。彼女は昔のまま。そのことに安堵し喜びを覚えた。ほら、やっぱりソフィーはソフィーじゃないか。無くした記憶を思い出せる日が来るかもわからない。それでも今から作り上げる思い出があれば、これから先を生きていけると思った。

それでも。

昔のソフィーを忘れることは、できない。

「ソフィー……」

「わたしはソフィーなんかじゃないわっ！」

叫びと共に、ソフィーの頬を涙が静かに流れて行った。キレイだと思う胸が痛んだ。自然と指が、その涙を拭いて行った。

触れた頬は温かった。

「……わたしは今のあなたが好きよ。わたしには記憶が無いから、今のわたしが出会った時からのあなたが好きよ」

でもあなたはそうじゃない。

涙で濡れた瞳は力に満ちて、はつきりとそうハウルに告げた。まるで大きな罪状のように。

「わたしは今しか見てないのに、それしか見るものが無いのに、あなたはそうじゃないわ。わかってるの？ わたしが何かすると、あなたはよく昔と変わらないって笑うの。それはそれは嬉しそうに笑うのよ！」

自分は自分。

『ソフィー』は『ソフィー』

ハウルにとつては当然のように同じ人間でも、それは彼女にとつては違う人間だった。過去の面影を求めて、今の彼女に接しているわけではなかった。そんなつもりはなかった。

「——どうしてわたしだけを見てくれないの……」

知らぬ間に彼女を傷つけていたことを。

ハウルはこの上も無く後悔し、懺悔したい程だった。

「ハウル……」

ごめんなさいと、言葉の代わりにその身体を包み込んだ。小さな小さな身体だった。抱しめる度に、ハウルはこの身体の小ささに改めて驚く。どこにあればどの力を込めているのかと不思議になり、いっただって一人で辛い思いをさせてしまうことが悔しかった。

「……もういいんだ」

何かが、ハウルの中で弾けた。

「もういいんだ、ソフィー。もういいんだ」

もう何も言わなくていい。一人で辛い思いをしなくてもいい。

「僕はもう、あんたの記憶が戻ることを望まないよ」

腕の中のソフィーが震えた。顔を上げようとしたが、それは優しく押さえたハウルの腕に叶わなかった。

「記憶なんて戻らなくてもいい」

言葉にするとより一層、それは身体の隅々にまで浸透していた。抱きしめたソフィーにも、それが伝わればいいと思いい、ハウルは回した腕に力を込めた。

「もちろん、戻ってくればそれは喜ばしいことだとは思いうよ。だけどそれに固執することはなかったんだ。記憶があらうと無かるうと、そんなことはどうだっていい。僕が今相對しているのは、今のあんた、ソフィーなんだから」

過去を忘れるわけではない。

けれど引きずるわけではない。

大事なものは、今のソフィーを愛しいと思う、ただそれだけだったのだ。これからを共に生きていくために。

「……記憶が戻らなくても、わたしのこと愛してくれるの？」

「僕の気持ちはまだ十分に伝わっていないのなら、一晩かけてじっくり教えてあげるけど？」

腕の力を緩め、ソフィーの顔を覗き込みながら、笑いをこめてハウルは言った。泣きそうな顔がわずかに赤くなり、そうしてこくりと頷かれたのを、ハウルは信じられないような思いで見つめていた。

「……ソフィー？」

頷かれるとは思わなかった。いつものように赤くなつて、そうして怒鳴るソフィーを予想していた。そのために言った言葉だった。

「だって、教えて欲しいもの」

熟したトマトのような顔で、けれどはつきりとハウルの瞳を

見つめていた。ただの勢いだけではない言葉だとハウルにもわかった。わかって、胸に広がるこの想いは、一体何だったのだろう。

「ソフィー、いいの？」

これが夢だったらどうしようかと、思わずにはいらなかった。けれど腕の中の温かさは紛れも無い現実で、恥ずかしそうに微笑む彼女自身も、また同じように現実と言えた。

「だってわたし、あなたの奥さんなんですよ？」

小首を傾げて言ったソフィーに、頷くことすらできなかった。返事の代わりに頬に手を添えて、先ほども重なった唇にもう一度口付けた。触れるだけだったのはほんの数秒で、頬に添えた手を後頭部に回し、ぐっと口付けが深くなった。一秒の息ですら許せなかった。まるで肉に飢えた獣のようなキスだった。

「……キスをして泣けたのは、今日が初めてだよ」

ソフィーは笑った。

幸せな笑みだった。

毎週の花屋の定休日、慣れ親しんだがやがや広場への道行く時は、いつだってどうしても小走りになってしまう。ソフィーとやって来る日々の買い物のおかげで、すっかり顔馴染みになってしまった肉屋のおばさんに、道ですれ違い様に「今日もチェザリーかい？」と声をかけられるほどだった。そんなにわかりやすいのかとマイケルは恥じ、「ええ、まあ」と曖昧に答えて道を急いだ。

花屋の定休日、決まってチェザリを訪れるのがマイケルの日課だった。口に出さずともそれは暗黙の了解になっていた。だからマーサはこの日は普段よりも多く休憩時間をもらえるところになっていたが、店の込み具合によって、思うように休憩に入れない場合が多々あった。笑顔の可愛らしい売り子は、やって来る男達の目的の一つになっていたのだ。そのことにマイケルはいつもやきもきしていたが、自分もかつてはその一人だったこともあり、そしてそれがマーサの今の仕事である以上、文句など言えるはずもなく、いつだって言葉を飲み込んでいた。きつとこれがハウルであれば、考えるよりも先に口やあるいは魔法が飛び出るのだろう。思つてマイケルは笑つたが、それが現実となった日には、とても笑うどころでは無い辺りが恐ろしい。

足早に道を行き、見慣れた看板が目に入る距離になった時には、マイケルはもう走り出してた。ベルが鳴るドアをくぐると、たくさんの人が店内の喧騒を作り出してた。わずかに躊躇したのち、すみませんと小声で謝りながら人ごみを掻き分けていく。

案の定マーサは、本来であれば休憩に入っている時間だというのに、忙しくカウンターの前で接客に追われていた。そうして笑顔で働くマーサを見るのがマイケルはとても好きだったが――何せ、マイケル自身もそんなマーサの姿を好きになったのだから――ずっとここで働くマーサを眺めているわけにもいかない。

「マーサ！」

怒鳴らない程度で、けれど周りの喧騒に消されないように名前を呼ぶと、すぐに気づいたマーサはマイケルの顔を見ると嬉しそうに微笑んだ。

「マイケル！」

同僚に何か一言残し、マーサはすぐにカウンターの内側から出てきた。周りの客も自然とマーサに道を開けてくれるのだから、チェザリにおけるマーサの人気の高さはけっこうなものだった。

「ごめんなさい、今日もお客さん多くつて」

「ううん、大丈夫だよ」

あらかじめ用意しておいたのだろう、マーサは薄い上着を羽織り、二人はチェザリから出た。ぶらぶらと辺りを歩き、適当なカフェに入つてお茶やケーキを楽しみながら互いのことを色々と話すのが二人の常だった。チェザリはその点では、ケーキのとても美味しい店だったが、さすがに顔馴染みばかりいる店では嫌だとマーサが言うのは、当然のことだった。

この日も適当にマーサの気に入つたカフェに入り、互いの財布の中身に見合つた物を注文した。頼んだ品物が運ばれてくるまでの間、決まって先に口を開くのはマーサの方だった。

「それで、どう、姉さんの様子は？」

その台詞も、ここ数ヶ月ではお決まりになってしまったものだった。その言葉を聞く度に、マイケルはマーサのソフィーに対する愛情の深さを思い知る。マーサだけではなく、レティーもそうだった。暇さえあれば、無くとも暇を何とか作り、二人ともソフィーの様子を一目見ようと城を訪ねに来る。家族というのはこうあるべきなんだと、二人を見てマイケルは思つた程だった。

「最近、何かね」

そう言つたきり、マイケルは言葉が出てこなかった。言葉につまつたわけではなく、あの二人を表現する適切な言葉が見つからなかった。

「姉さんがどうかしたの？」

マイケルの言葉を悪い方向に受け取ったのか、とたんに顔を曇らすマーサに、マイケルは「そうじゃないよ」と慌てて首を横に振った。

「ええと、何ていうのかな……すごいね、いいんだよ」

自分の表現力の無さを、マイケルはこの時心底から嘆いた。毎日彼らと一緒にいるというのに、どうしてもっと上手い言葉が出てこないのだろう。これではマーサに何も伝わらない。

「いいって……どんな風に？」

案の定マーサは戸惑いを浮かべ、小首を傾げていた。マーサに少しでもわかつてもらうために、マイケルは必死に言葉を探した。

「何ていうか……今までもね、そりや仲良くやってたし、何も変な所なんて無かったんだ。前みたいな感じで……でもそれよりも、すごく自然なんだ。ハウルさんもソフィーさんも、二人とも無理をしてないっていうか——見ていて、ああいいな、って、素直に思えちゃうぐらいで」

言いながらマイケルは、これではダメだと思った。言いたいことの半分も伝わってはいない。

今のハウルとソフィーの様子は、あれは、実際に彼らを見た者にしかわからない類のものだと思った。何がどうではなく、雰囲気、空気そのものが前と違うのだ。

彼らの間に漂うものは、着実に変化している。マイケルはそう思った。そして、マイケルが気づくぐらいなのだから、きっとカルシファーもわかっているのだろう。

「あの、ごめん、わかりにくくて……」

マーサに実際に彼らが一緒にいる場に居てもらえればいいのと思った。けれどそう思う反面、普段共に生活をしているわ

けではないマーサには、例え同じ場所に居たとしても、わからないだろうと思う気持ちも確かにあった。それはきつと、共に暮らす家族にしか共有できないものなのだ。そう思う自分が、マイケルは少しくすぐったかった。

「うん。マイケルがそう言ってくれるんなら、安心だわ」

もつとわかりやすい言葉がいくらでもあるはずなのに、どうしてそれが出てこないのだろうと思ひ悩むマイケルに、マーサはそんな明るい声をかけてきた。マイケルを慰めるためだけではなく、心の底からそう思っているような声だった。

「マイケルの言うこと、あたし、信じてるもの。マイケルが言うんならそうでしょうね。姉さん、義兄さんと仲良くやってるのなら良かったわ」

マーサの花のような可愛らしい笑顔に、マイケルはただ頷くことしかできなかった。

「……うん」

本当に、良かった。

心の底から、そう思うんだ。

その日は驚いたことに、明け方からがやがや街ではお祭り騒ぎになっているようだった。朝食の用意をする前に、窓の外の賑やかさにつられて、少しソフィーは扉を開けた。まだまだ普段であれば、人々が働きだす時間にはほど遠いというのに、通りには人が溢れ、たくさんのざわめき声や花吹雪でいっぱいになっていた。

「すごいわ！」

今日が五月祭だということは教えられていたが、こんな朝早くから賑やかなお祭り騒ぎになるだなんて、思ってもいなかった。これじゃまるで、キングズベリーみたい！ ソフィーはしばらくの間ドアを開けて人々の様子を眺めていたが、その熱気に当てられ早々にドアを閉めてしまった。

「ソフィーもハウルと行くんだろ？」

この時間にはいつもソフィーが朝食を作り出すことをわかっているカルシファーは、大人しく暖炉の中に鎮座していた。

「ええ、ちよつと出かけてくるわ」

賑やかなお祭りがあると聞いて、ソフィーは真っ先に「じゃあ、がんばって花を売らないとね」と思ったものだから、ハウルが嬉しそうな顔で一緒に見て回ろうねと言って来た時には驚いてしまった。すっかり働くことが板について、自分が遊ぶことなんてさっぱり考えていなかった。

「まさか、この後に及んで、花屋があるからなんてことは言わないよね？」

ソフィーの驚きっぷりを見て、ハウルは力の入った笑みでそう言った。ソフィーがそう言おうものなら、派手な癩癩を起こすことは目に見えていた。

だからというわけではないが、ソフィーは大人しくハウルの誘いにのった。ハウルがあまりに楽しみな様子で話していたし、それに決して口には出せないが、誘ってくれたことは嬉しかった。考えてみれば、そんな祭りの日であれば、間違いなくマイケルはマーサと出かけただろう。そんな日に花屋を開くなんて馬鹿げている。

「カルシファーはどうするの？」

火の悪魔が、一体どんな風に祭りを楽しむのか、ソフィーにはさっぱりわからなかった。

「おいらも、あんた達が全員出掛けるんなら、散歩にでも行ってくるよ。その後は花火を打ち上げないといけないけどね」

まるで何かの企み事であるかのように、カルシファーはそれは楽しそうな笑みを浮かべて言った。

「花火？ お祭りだから、花火でも上げるの？」

「それもあるけど、違うよ。今日はマイケルの誕生日なんだよ。だからおいら、毎年花火を打ち上げてやってるんだ」

カルシファーの炎が、少し大きくなったような気がした。自慢しているのだろうか、それとも気が大きくなっているのだろうか。

「まあ、誕生日！ じゃあ帰りに買い物をしてきて、夕飯はご馳走にしないとね。チェザリーでケーキも買ってこないと。そうだわ、マーサも招いてあげたら喜ぶわね。あら、今日はやることがいっぱいあるじゃない」

日頃の花屋の仕事もそれはやりがいのあることだったが、それとはまた違った意味で、今日の仕事もやる気の沸き起こるものだった。

「夕飯はご馳走かい？ 冷えたパンに玉ねぎの酢漬け、それにフルーツの盛り合わせにケーキでどうだい？」

「残念ね。夕飯は何かそうね、お肉を使った料理と色とりどりのサラダと、温かいスープでも作るわ。でも、それにパンとフルーツが付くのはいいことね」

「ばっちり働いてもらうわよ、と視線で言うのと、カルシファアはまるで理不尽だと言わんばかりに身体を揺らした。

「いいじゃないの。マイケルはきつと喜ぶわ。あなただって、マイケルを喜ばしたいでしょう？」

カルシファアは答えなかったが、内心でそう思っているだろうことはソフィーにはよくわかっている。でなければ、わざわざ花火を打ち上げたりするはずがないのだから。この悪魔はちつとも素直ではない。けれど人のことは言えないのかもしれない。

ソフィーが野菜を取り出し、朝のスープを作り始めようとした頃、階段を下りてくる音がした。ブーツの踵が立てる音で、ソフィーには振り向かずともそれがだれなのかわかっていた。

「おはよう、奥さん！ いい朝だね！」

振り返ると、すでに煌びやかな袖のひらひらとした青い洋服に着替え、髪を整えたハウルが満面の笑みで立っていた。

いつもは時間になっても、そうしてソフィーが起こしても起きてこない日が多々あるというのに、祭りの日だけはこんなに早起きだなんて。大きな子供を見ているようだった。

「おはよう、ハウル。確かにいい朝だね。あなたがこんなに早起きだなんて、今からせっかくの晴れ空が大雨になりそうだけだね」

「朝から失礼なことを言ってくれるなあ」

ハウルはそう言ったが、ちつともそれを気にしていないようだった。そんなに祭りが嬉しいのだろうか。ソフィーからしてみれば、先ほど少し覗いた喧騒に、楽しさよりも気後れの方が

大きくなってしまったというのに。何度キングズベリーに出かけても、それでもやはりたくさんの人がいるところは苦手だった。これはもう相性としか呼びようがないのだろう。

「ごめんなさい、ハウル。まだ朝ごはんができてないのよ。こんなに早く起きてくるとは思わなかったから。ちよつと待ってもらえる？」

「朝ごはんなんて、そんなの！」

ハウルが降りて来たのなら、急いで支度をしようと包丁を取り出そうとしたソフィーに、ハウルは「何を言ってるの？」とばかりに大声を上げた。

「ねえ見てわからないの、僕はもう用意万端なんだよ？ 朝ごはんなんて、どっかで適当に食べればいいんだよ。今日はそんな店ならいっぱい出てるんだからさ！ みんな明け方からそりやもう騒いでるんだよ」

ソフィーにはハウルの言葉が、どうにも早く出かけたくて仕方のない子供の駄々のように聞こえて仕方がなかった。どうしてだろう、この人は自分よりもだいぶ年上だというのに。マイケルの方がずっとしつかりしているように思えてしまう。

「そうは言っても、マイケルだっているし……」

「あんた、マイケルを五歳の男の子だとも思ってるの？ あいつなら勝手に何かやるさ。それにどうせ、マイケルだってチエザーリに真つ先に駆け込むんだろうしね」

マイケルがチエザーリ目指して走っていく様は、確かに容易くソフィーにも想像のできるものだった。あんなに想われて、マーサは幸せ者ねと思う。もつともその点では、ソフィーも大きすぎるほどの愛に包まれてはいるのだけれど。

「ああもう、あんたって本当、煮え切らないなあ！」

その言葉は、若干使い方が間違っているような気がした。け

れどソフィーがそんなことを言うよりも先に、ハウルは指をぱちんと一つ鳴らした。何が起こったのかわからなかったのは一瞬で、ソフィーは自分の着ている服が、いつもの灰色の地味な物から、鮮やかな若草色になっていることに気づいた。

「うん、よく似合ってる。ほら、これで準備はばっちりだ！」
「無理やりさせたんじゃないの！」

ソフィーは思わずその声を上げたが、ここに至って、もうハウルに逆らうことは無理なのだとかつていた。この人は本当、インガリー一の魔法使いのくせして、子供っぽくて仕方がない。けれどそんなハウルの子供っぽいところが、本当は嫌でも何でもないのだから、また仕方無いのだ。

「……これ、ちよつと派手過ぎない？」

「何言ってるの。あんたの普段の服装が地味すぎるんだよ」

本当、信じられないよね、と肩をすくめるハウルを見て、ソフィーもまた内心で思った。派手と言えば、このハウルの右に出る者はいないわね、と。けれどまあ、祭りとあつて人々は晴れ着を着ていたし、それにこの騒ぎだからいつもよりはハウルの馬鹿みたいな格好も目立ちはいらないだろう。そう思いたい。

「じゃあ、カルシファー。出かけてきてもいいかしら？」

「別に構わないよ。朝の仕事が無くなるのは嬉しいからね」

満足そうにカルシファーは言った。それほどまでに、フライパンの下で頭を下げるのは嫌なことなのだろうか。生憎、ソフィーは火の悪魔になってこき使われた事はないのでわからない。

「ほらほら、祭りを楽しまなくちゃ！」

ハウルはソフィーの肩に手を回して、さあさあ！ と扉まで連れて行く。その強引さにソフィーはもう笑うしかなかった。

「マイケルも起きたみたいだぜ」

カルシファーには、城の中のことは何でもわかってい

る。時計を見る。いつもであればマイケルが起き出す時間にはまだ早かった。本当、祭りの日だけなんだから！ ソフィーはふんつと鼻を鳴らしたが、嫌な気は全然しなかった。

「はぐれないようにね」

と、そう言つてハウルはソフィーの手を優しく握り締めた。その顔が少し照れているように見えたのは、それはソフィーのただの気のせいだったのだろうか。そう思うと、ソフィーの頬もわずかに赤く染まつてしまった。けれど今なら、お祭り騒ぎの熱気の所為にできるだろう。

城を出た瞬間から一気に賑やかな喧騒に包まれたが、それもがやがや広場に出るともつとすごいことになっていた。ほろ酔い加減の男達が、美しく着飾った女性に声をかけて行くのは、日ごろであればみつともない光景だっただろうが、こと祭りの場になると当然のように見えてしまうのだから不思議なものだった。

広場に来てすぐに、ソフィーはハウルに言つてチェザーリへと向かった。いつも賑やかなその店は、今日はいつも以上にたくさん客でごった返していた。

「すごい人！」

純粹にケーキを買う目的で来ている人もいれば、中には可愛らしい売り子目当てで来ている人もたくさんいるようだった。少しでも気を引こうと、男達はお菓子を買っていくのだ。

カウンターの向こうでは、忙しそうに客の対応をしているマ

ーサの姿もあった。仕事の邪魔をするのは気が引けたが、それでもソフィーは何とかマーサに近付いて行った。顔を上げたマーサはすぐにソフィーに気づき、「姉さん！」と声を上げた。その声に、周りにいた客が一斉にソフィーを見たのが、少々どころではなく居辛かった。

「あの、今日マイケルと一緒に出かけるとしてしよう？　夕飯、うちで一緒に食べましょう。マイケルと一緒に！」

それだけでも、マーサには何のことかわかったのだろう。「じゃあ、ケーキを持ってくわ！」

と、満面の笑顔で返事が返ってきた。良かった、メインのケーキはチェザリの美味しい物が入るようだ。この客の多さでは、もしかしたらケーキが売り切れてしまうのではないかと不安に思ったのだけれど、マーサはちゃんと確保しておいてくれるだろう。

「仕事がんばって。お祭り、楽しんでね」

「姉さんもね！　また後で！」

手を振って、ソフィーは急いで店から出た。周りの客がソフィーのために道を開けてくれたので、店から出る際はとても楽だった。店の入り口ではハウルが待っていて、辺りの女性から一身に視線を集めていた。

「マーサちゃんに伝えられた？」

「ええ。夕飯にはマイケルと一緒に家に来るわ」

「そりゃあ良かった。じゃあ、行こう」

再びソフィーの手を引っ張って、ハウルは歩き出した。迷いの無い足取りは、どこか行く所があるかのようだった。

「こういう人の多い所ってさ、いるだけで何かわくわくしてこない？」

そう言うハウルの様子は、確かにどこからどう見ても心躍っ

ているようだった。傍を土産物売りが通り過ぎれば冷やかして行く。露店で売っていた飲み物で咽を潤した。ソフィーはジュース、ハウルは軽い酒のようだった。

「確かに、お祭りは楽しいけど。でも、一人だったら、わたしはとても来れそうには無いわね」

ぶらぶらと歩きながらソフィーは言った。広場には着飾った若い娘達が、男から誘われることを期待してくすくす微笑みながらぶらついていて。ソフィーにはとてもできそうにない真似だった。

「やっぱり人ごみは苦手？」

「そういうわけじゃないけど……」

上手く言葉にすることができない。一人だときっと、祭りは楽しくも何とも無いものなのだろう。ここにハウルがいるから楽しく感じる。

それを、ハウルに言ってみればどうだろう。普段なら恥ずかしくて言えないようなことも、今この祭りの賑わいの中でなら、いつもは言えないようなことも言えるかもしれない。

「あの、ハウ……」

「大丈夫だよ、臆病な灰色ネズミちゃん」

その台詞は、ソフィーの心を揺さぶった。

同じ言葉。

同じ場所。

――閃いた、閃光。

――あんだ、いったいだれだい？　前にどこかで会ったわけ？　なんたる絶望！　なんたる苦しみ！　悪夢だ！　詮索好きの、手に負えないソフィー。ときどき、あんだはミীগンそっくりの口をきく。僕はウェールズが好きだ。でも、ウェール

ズの連中はぼくを好きじゃない。だってそうだろう。あんた、自分の力も使ってるんだよ。僕は臆病者なんだ。くだらない！あんたはただ、考えが足りないんだよ。こうしちゃいられない。間拔けなソフィーを助けなきゃ――

僕たちって、これからいっしょに末永く幸せに暮らすべきなんじゃない？

ああ、ハウル。

そう思うわ、そう思うわ。

「あんたとの暮らして、本当に、ぞくぞくすることの連続ね」

「……ソフィー？」

「これから先、一体あとどれぐらい、あんたの服を切り刻むことになるのかしら」

思い出はそれぞれ色を纏って、ソフィーの中で盛大に弾けて行った。自分を見下ろすハウルの顔を、久しぶりに見たような気がした。ハウルはこんな顔だっただろうか。こんな、馬鹿みたいに間の抜けた顔をしていただろうか？

ソフィーは笑った。

「あんた、もうちよつとまともな顔ができないの？ 去年の五月祭であたしに声をかけてきた時には、もう少しマシな顔していたじゃないの」

まるで昨日のここのように、浮かび上がるハウルとの出会い。あの時はどうして、ハウルのことを上品な人だなんて思ったのだろう。ハウルのことを知らなかったから、そんな的外れなことを考えることができたのだ。

「……ソフィー」

「だから、何て顔してるのよ」

触れれば壊れてしまうと、夢が覚めてしまうかと思ってるような恐々とした指が、そつとソフィーの頬を撫でた。そのくすぐったさにソフィーは小さく身体を震わせた。

「僕のこと愛してる？」

真つ先に聞いてくるのはそんなことで、それがとてもハウルらしかった。だってそうなのだろう。ハウルにとって、そしてソフィーにとっても、一番大事なことはそれなのだ。それしかない。全て。

「大嫌い」

ハウルの瞳が、震えた。

「こんな所で、そんな恥ずかしいことを臆面もなく聞いてくるあんたのことなんて、嫌いよ」

笑いが止まらなかった。見開かれるハウルの瞳を見つめながら、ソフィーは思い切ってその身体に抱きついた。ヒヤシンスの香りを思い切り吸い込んだ。ハウルの香りだと思った。嬉しかった。泣きたかった。大声で叫びだしたかった。きつと今、世界中で自分より幸福な人なんていない。

「ソフィー！」

「何よ、嫌いだって言ってるのに」

愛してる愛してる愛してる。でも大嫌い。

喧嘩の度に口にするその台詞は、けれど確かな愛の言葉だった。二人にだけ伝わる一生の言葉。きつと明日にはもう喧嘩して、またどちらかが声高にそう叫ぶのだ。

明日のことを考えた瞬間、バンバンって大きな音が聞こえた。二人は顔を上げた。ここからでは何も見えないが、それがカルシファアの上げた花火の音だということはすぐにわかった。何

も知らない人々が、驚いたようにそれぞれ顔を上げる様子がおかしかった。だれかが町のすぐ北の丘の斜面にいる動く城を見つけても、どうして花火が打ちあがっているのかわからないだろう。魔法使いハウルが、祭りを盛り上げようとしていると思うかもしれない。けれどそれは違うのだ。

ハウルの頭の中からは、祭りのことなんてもうどこにも残ってなどはいなかった。それはソフィーにしても同じことだった。

「カルシファー、張り切って花火を打ち上げてるわね」

「それもいいけど、今は他に考えるべきことがあるんじゃないの？」

今はそう、お互いにお互いのことだけを。それだけを考えていればいいのだからと。

見詰め合って、二人はいつまでも笑っていた。今日の夕飯は賑やかで、そしてとても美味しいものになるだろう。そんな平和な日常がとても愛しく、そしてそれ以上に、目の前の温かさ、涙が溢れて止まらなかった。

END.

2005年冬に発行したハウル本です。

ハウル・伯妖含めてもう色々本出してきましたが、内容的にはこれが一番のお気に入りです（とか自分で書くのも恥ずかしいのですが 笑

この話で一番書きたかったのは、「記憶喪失の苦悩」だったかと思います。なった本人はもちろんのこと、それによって生じる家族の色々な悩みや葛藤なんかを書きたかった…のだと思います。書きたいテーマを、自分なりにちゃんと書ききっているので好きな作品なのかな、と。もちろん精進の余地はたっぷりありますが！笑

少しでもお楽しみ頂けたら幸いです。

2010・夏